篠　田　古　墳　群

中国横断自動車道 姫路鳥取線整備促進関連事業に係る
篠田５～11号墳の発掘調査報告書

２００４．３

財団法人　鳥取市文化財団

篠田古墳群 発掘調査報告書　正誤表

頁	行	誤	正
43	5	弧状	僅かに弧状
44	2	円墳である	円墳と考えられる
55	8	10(方)→9(方)→7(方)→8(方)→5(円)→11(円)→6(円)号墳	[11(円？)]→10(方)→9(方)→7(方)→8(方)→5(円)→6(円)号墳
	篠田古墳群調査一覧表 篠田11号墳	円形	円形？

篠　田　古　墳　群

中国横断自動車道 姫路鳥取線整備促進関連事業に係る
篠田５～11号墳の発掘調査報告書

２００４．３

財団法人　鳥取市文化財団

序　　文

鳥取市は、鳥取県の県庁所在地として、また、山陰地方の中核都市として発展してきた、人口15万人あまりを擁する地方都市です。

鳥取市内には、鳥取平野をはじめその周辺丘陵に、数多くの遺跡が存在しています。これらの埋蔵文化財は地域の先人たちの生活を語る歴史資料であり、後世に継承していくべき市民の貴重な財産です。このような認識のもと、財団法人 鳥取市文化財団では、開発と文化財の共存をはかるべく、各関係機関の協力を得ながら埋蔵文化財発掘調査事業を進めています。

さて、今回実施した篠田古墳群の調査は、中国横断自動車道 姫路鳥取線整備促進関連事業に係る発掘調査として、平成13年度から調査を行ってきました。調査の結果、古墳時代前期の古墳、埋葬施設とともに各種副葬品など貴重な遺物が検出され、当地域の古代文化の一端を明らかにする資料を提供することができました。ささやかな冊子ではありますが、市民各位ならびに関係各位の埋蔵文化財の理解に供していただければ幸いです。

おわりに、今回の発掘調査にあたり、ご理解とご協力をいただきました地元の皆様をはじめ関係各位の方々に、心から感謝申し上げます。

平成16年３月

財団法人　鳥取市文化財団
理事長　石　谷　雅　文

例　　言

1．本書は、中国横断自動車道 姫路鳥取線整備促進関連事業の事前調査として実施した篠田古墳群の発掘調査報告書である。
2．本発掘調査は、財団法人 鳥取開発公社の委託を受けて、財団法人 鳥取市文化財団鳥取市埋蔵文化財調査センターが、平成13・14年度に現地調査を実施し、15年度に報告書を作成した。
3．発掘調査を実施した古墳群の所在地は、鳥取市上味野 字洞貝、下味野 字菖蒲谷、朝月 字上篠田である。
4．発掘調査によって作成された記録類および出土遺物は、鳥取市教育委員会に保管されている。
5．現地実測、図面の作成は、調査員、補助員を中心に調査参加者全員の協力のもとに行い、出土遺物の整理および遺物実測は、下多 みゆきを中心として、濱橋 博子がこれを補佐した。
6．本書の執筆、編集は、藤本 隆之が行い、木原 美和がこれを補佐した。
7．現地調査から報告書作成にいたるまで、以下に列記している多くの方々からの指導、助言ならびに協力をいただき、厚く感謝いたします。
鳥取県土木部道路課、姫路鳥取線用地事務所、財団法人 鳥取開発公社、鳥取市建設部土木建設課
西川 寿勝、森下 章司、古川　登、西村　淳、赤木 三郎、八峠　興、杉谷 美恵子
（順不同、敬称略）

凡　　例

1．本報告書における方位はすべて磁北を示し、レベルは海抜標高である。
2．今回の調査によって出土した遺物は、調査年度、古墳名、古墳番号、主体部番号、取上げ順による遺物番号（遺物台帳登録番号）、取上げ年月日を基本的に注記している。写真や図面などの記録類も同様である。
3．現地調査時の仮古墳番号と本書に使用した正式古墳番号との対応は以下のとおりである。

古墳番号対応表

新	仮
5	D
6	F
7	E
8	G

新	仮
9	C
10	B
11	A

本　文　目　次

序文

例言　凡例

第１章　発掘調査の経緯

１．発掘調査に至る経緯 …… 1

２．発掘調査の経過 …… 1

３．調査の組織・体制 …… 2

第２章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 3

第３章　調査の結果

第１節　篠田古墳群の立地と構成 …… 8

第２節　古墳等の調査 ……13

１．篠田５号墳 ……13

２．篠田６号墳 ……18

３．篠田７号墳 ……30

４．篠田８号墳 ……36

５．篠田９号墳 ……36

６．篠田10号墳 ……41

７．篠田11号墳 ……41

８．その他の遺構 ……53

第３節　まとめにかえて ……54

篠田古墳群調査一覧表 ……55

出土遺物観察表 ……56

写真図版

報告書抄録

挿　図　目　次

第１図　篠田古墳群　周辺遺跡分布図
第２図　篠田古墳群　調査位置図
第３図　篠田古墳群　調査地地形図
第４図　篠田古墳群　墳丘遺存図
第５図　５号墳　第１主体部実測図
第６図　５号墳　墳丘遺存図・断面図
第７図　５号墳　第２主体部実測図
第８図　５号墳　第３主体部(土器棺)実測図
第９図　５号墳　第１主体部出土遺物実測図(１)
第10図　５号墳　第１主体部出土遺物実測図(２)
第11図　５号墳　第２主体部出土遺物実測図
第12図　５号墳　第３主体部出土遺物実測図
第13図　５号墳　周溝内出土遺物実測図
第14図　６号墳　墳丘遺存図・断面図・周溝内遺物出土状況
第15図　６号墳　第１主体部実測図
第16図　６号墳　第２主体部実測図
第17図　６号墳　第１主体部出土遺物実測図
第18図　６号墳　第２主体部出土遺物実測図(１)
第19図　６号墳　第２主体部出土遺物実測図(２)
第20図　６号墳　周溝内出土遺物実測図(１)
第21図　６号墳　周溝内出土遺物実測図(２)
第22図　７号墳　墳丘遺存図・断面図
第23図　７号墳　第１主体部実測図
第24図　７号墳　第２主体部実測図
第25図　７号墳　第２主体部出土遺物実測図
第26図　７号墳　周溝内出土遺物実測図
第27図　７号墳　出土遺物実測図
第28図　８号墳　周溝内出土遺物実測図
第29図　８号墳　墳丘遺存図・断面図
第30図　９号墳　墳丘遺存図・断面図
第31図　９号墳　主体部実測図
第32図　９号墳　主体部出土遺物実測図
第33図　９号墳　周溝内出土遺物実測図
第34図　９号墳　墳裾出土遺物実測図
第35図　10号墳　周溝内出土遺物実測図
第36図　10号墳　墳丘遺存図・断面図
第37図　11号墳　墳丘遺存図・断面図
第38図　11号墳　第１主体部実測図
第39図　11号墳　第１主体部出土遺物実測図
第40図　11号墳　第３主体部出土遺物実測図
第41図　11号墳　第２主体部実測図
第42図　11号墳　第３主体部実測図
第43図　11号墳　墳裾出土遺物実測図
第44図　SK―01　実測図

写真図版目次

図版１　調査前全景(北東から)
　　調査後全景(北から)
図版２　６・７・５号墳　全景(北西から)
　　５・９・10号墳　全景(北西から)
　　11号墳　全景(南から)
図版３　６号墳　第１主体部出土銅鏡(飛禽鏡)
図版４　６号墳　第１主体部出土管玉.
　　11号墳　第１主体部出土玉類
図版５　５号墳　調査前(南西から)
　　５号墳　北西裾断面(西から)
　　５号墳　北東裾断面(北から)
図版６　５号墳　墳丘検出状況(北西から)
　　５号墳　第１主体部横断面(東から)
　　５号墳　第１主体部縦断面(南から)
図版７　５号墳　第１主体部検出状況(東から)
　　５号墳　第１主体部内遺物出土状況①
図版８　５号墳　第１主体部内遺物出土状況②
　　５号墳　第２主体部横断面(東から)
　　５号墳　第２主体部縦断面(北から)
図版９　５号墳　第２主体部検出状況(東から)
　　５号墳　第３主体部検出状況(西から)
図版10　５号墳　完掘状況(南西から)
　　６号墳　北裾断面(北東から)
　　６号墳　西裾断面(南西から)
図版11　６号墳　東裾断面(南東から)
　　６号墳　周溝内遺物出土状況(南から)
　　６号墳　周溝内遺物出土状況①
図版12　６号墳　周溝内遺物出土状況②
　　６号墳　周溝内遺物出土状況③
　　６号墳　墳丘検出状況(南から)
図版13　６号墳　第１主体部横断面(北西から)
　　６号墳　第１主体部縦断面(東から)
　　６号墳　第１主体部内遺物出土状況①
図版14　６号墳　第１主体部検出状況(南西から)
　　６号墳　第１主体部内遺物出土状況②
図版15　６号墳　第１主体部内遺物出土状況③
　　６号墳　第１主体部内遺物出土状況④
　　６号墳　第２主体部検出状況①(北東から)
図版16　６号墳　第２主体部検出状況②(北西から)
　　６号墳　第２主体部内遺物出土状況(北東から)
図版17　６号墳　完掘状況(北西から)
　　７号墳　調査前(南西から)
　　７号墳　北西裾断面(西から)
図版18　７号墳　北東裾断面(東から)
　　７号墳　第１主体部検出状況(南西から)
　　７号墳　第１主体部内石枕(南東から)
図版19　７号墳　第２主体部検出状況(北から)
　　７号墳　南裾SK―01検出状況(東から)
　　７号墳　完掘状況(南西から)
図版20　８号墳　調査前(南から)
　　８号墳　南裾断面(西から)
　　８号墳　完掘状況(南から)
図版21　９号墳　北西裾断面(西から)
　　９号墳　主体部横断面(南東から)
　　９号墳　主体部縦断面(北東から)
図版22　９号墳　主体部検出状況(北東から)
　　９号墳　主体部内遺物出土状況(南東から)
　　９号墳　完掘状況(南西から)
図版23　10号墳　調査前(北東から)
　　10号墳　南西裾断面(西から)
　　10号墳　北西裾断面(西から)
図版24　10号墳　北東裾断面(北から)
　　10号墳　南東裾断面(南から)
　　10号墳　完掘状況(南西から)
図版25　11号墳　調査前(東から)
　　11号墳　北裾断面(北東から)
　　11号墳　東裾断面(南東から)
図版26　11号墳　南裾断面(南東から)
　　11号墳　第１主体部横断面(南から)
　　11号墳　第１主体部縦断面(北西から)
図版27　11号墳　第１主体部検出状況(北から)
　　11号墳　第１主体部内遺物出土状況
図版28　11号墳　第２主体部検出状況①(北から)
　　11号墳　第２主体部検出状況②(東から)
図版29　11号墳　第２主体部完掘状況(北から)
　　11号墳　第３主体部検出状況(北から)
　　11号墳　完掘状況(東から)
図版30　11号墳　南裾平坦面(整地層)断面①(南東から)
　　11号墳　南裾同硬化層(東から)
　　調査地　西端平坦面(整地層)断面②(北東から)
図版31　５号墳　第１主体部出土遺物
　　５号墳　第２主体部出土遺物
　　５号墳　第３主体部出土遺物
　　５号墳　出土遺物
図版32　６号墳　第１主体部出土遺物
　　６号墳　第２主体部出土遺物
　　６号墳　周溝内出土遺物(１)
図版33　６号墳　周溝内出土遺物(２)
図版34　７号墳　第２主体部内出土遺物
　　７号墳　周溝内出土遺物
　　７号墳　出土遺物
　　８号墳　周溝内出土遺物
図版35　９号墳　主体部出土遺物
　　９号墳　周溝内出土遺物
　　９号墳　墳裾出土遺物
　　10号墳　周溝内出土遺物
　　11号墳　第１主体部出土遺物
図版36　11号墳　第３主体部出土遺物
　　11号墳　墳裾出土遺物

第１章　発掘調査の経緯

１．発掘調査に至る経緯

篠田古墳群は、中国山地から派生する丘陵に営まれている。鳥取市上味野地内を中心とする小規模な古墳群である。標高は概ね35～86m付近に位置する。過去に行われた遺跡の踏査により、この丘陵上に中世城跡を示唆する平坦面が数ケ所、方墳を中心とする古墳が５基分布していることが明らかとなっている。平成12、14年度には谷を挟んだ北側の下味野古墳群が断続的に調査され、前期から中期を主とした15基の古墳と弥生時代中期の竪穴式住居３棟が確認されている。11～13年度には同じ丘陵の南側に位置する横枕古墳群が調査され、前期から中期を主とした50基の古墳が確認されている。11、12年度には丘陵の末端に位置する服部墳墓群の一部が発掘調査され、弥生時代後期から古墳時代の墳墓と古墳から構成される墳墓群であることが明らかとなってきている。また、本古墳群の北東に昭和44年(1969年)、丘陵と服部集落との間の水田から圃場整備工事によって弥生時代中後期の土器とともに田下駄、大足が出土している。近隣の本格的な発掘調査例としては、昭和62年に北村恵儀谷遺跡、平成３年に釣山古墳群、平成４年に古海古墳群、翌５年に菖蒲遺跡、平成６、７年度に山ケ鼻遺跡などがあり、古くは縄文時代後期から先人の足跡がたどれる地域となってきている。

今回の発掘調査の契機となった姫鳥線整備促進関連事業は、篠田古墳群が所在する丘陵に高速道路建設が予定されており、工事範囲内には古墳などが分布し、事前の踏査の結果、明らかに古墳の存在が確認されたことにより、鳥取市教育委員会と関係機関との路線変更等を含め種々の協議を行ったが、現状での保護、保存は難しく記録保存で対応することとなった。

２．発掘調査の経過

篠田古墳群の発掘調査は、財団法人 鳥取開発公社の委託を受け、財団法人 鳥取市文化財団鳥取市埋蔵文化財調査センターが調査を行った。

調査は平成14年２月より開始し、樹木の伐採整理の後、10号墳から９・５・７号墳を結ぶ稜線上に基準ライン(Ｂ～Ｅ杭)を設け、Ｂ杭からＢ―Ｅラインより東に140°角度を振ってＡ杭を、Ｅ杭からＥ―Ｂラインより北へ145°振ってＦ杭を設置し、Ｆ杭からＦ―Ｅラインに西へ90°、13mに仮のＦ―W13杭を設置し、Ｆ―W13杭より北へ135°振ってＧ杭を設置した。また各古墳についても各々測量杭を設定した。その後、現況の地形測量を業務委託にて行い、平成13年度を終えた。平成14年度は４月から進入路の整備や資材搬入などの調査準備の後、表土除去作業を尾根高位の11号墳から順次進め、合わせて墳丘の検出を行った。墳丘検出の後、墳丘遺存実測を行い、続いて埋葬施設の検出に着手した。８・10号墳を除き１基以上の埋葬施設を有し、いずれも古墳時代前期の築造であることが明らかとなった。なかでも６号墳の第１主体部からは銅鏡(飛禽鏡)、管玉、第２主体部からは鉄剣が出土している。５号墳は墳頂部の削平が著しいものの、２基の埋葬施設から鉄剣、ガラス小玉などが出土した。８号墳西半、10号墳南半は流失しており、埋葬施設を検出することはできなかった。また、この他に11号墳の南裾で古道と考えられる平坦面(整地層)などを検出した。埋葬施設の調査の後、断割などの墳丘の調査を行った。最終的な調査面積は2,544㎡である。

こうして、平成14年８月末で現地調査を完了した。検出した各遺構、遺物については適宜写真撮影や実測して記録をとり、各古墳単位や調査区全体の写真撮影を行なった。写真や図面などの記録類の整理は現地調査と並行して行い、土器などの遺物整理については、水洗い、バインダー処理の後注記、復元作業を行なった。また、本格的な報告書作成作業は平成15年度に行った。

3．調査の組織・体制

発掘調査の組織、体制は以下のとおりである。

平成13年度　調査主体　財団法人　鳥取市文化財団
理事長　西尾迢富(鳥取市長)
副理事長　伊藤憲男
米澤秀介(鳥取市教育長)
常務理事　田中哲夫
事務局長　小谷荘太郎
調査指導　鳥取市教育委員会事務局文化課
事務局　財団法人鳥取市文化財団鳥取市埋蔵文化財調査センター
所長　藤井博
副所長　加藤卓美
前田均
主幹　山田真宏
調査事務　秋田澄世
白岩千足
水戸口直美
調査担当　財団法人鳥取市文化財団鳥取市埋蔵文化財調査センター
調査員　藤本隆之
調査補助員　矢芝泰伸
岡本大輔

平成14年度　調査主体　財団法人　鳥取市文化財団
理事長　竹内功(鳥取市長)
副理事長　福田泰昌
中川俊隆(鳥取市教育長)
常務理事　小谷荘太郎(事務局長兼務)
調査指導　鳥取市教育委員会事務局文化課
事務局　財団法人鳥取市文化財団鳥取市埋蔵文化財調査センター
所長　前田均
主幹　山田真宏
調査事務　秋田澄世
白岩千足
水戸口直美
調査担当　財団法人鳥取市文化財団鳥取市埋蔵文化財調査センター
調査員　藤本隆之
調査補助員　木原美和
矢芝泰伸
永田りん太郎

平成15年度　調査主体　財団法人　鳥取市文化財団
理事長　石谷雅文(鳥取市副市長)
副理事長　中川俊隆(鳥取市教育長)
三田三香子
常務理事　小谷荘太郎
調査指導　鳥取市教育委員会事務局庶務課文化財室
事務局　財団法人鳥取市文化財団鳥取市埋蔵文化財調査センター
所長　前田均
主幹　山田真宏
調査事務　秋田澄世
白岩千足
調査担当　財団法人鳥取市文化財団鳥取市埋蔵文化財調査センター
調査員　藤本隆之
調査補助員　木原美和
下多みゆき
濱橋博子

第２章　遺跡の位置と歴史的環境

鳥取市は県東部に位置し、面積237.25km²、人口15万人余りを擁する県庁所在地である。市域の三方は山に囲まれ、北は日本海を臨む鳥取砂丘が広がる。市の中央には中国山地を源とする千代川が流れ、この下流域に広がる鳥取平野は、縄文時代前期の縄文海進時には複雑に入り組んだ内湾状を呈していたとみられ、海退に伴う湖沼化と海岸部の砂洲の発達、千代川が運ぶ膨大な土砂の堆積によって形成された沖積平野である。

今回調査した篠田古墳群は、鳥取市上味野、下味野、朝月地内に所在する標高72～86m余りの丘陵に立地する。JR鳥取駅から直線にして南西約4.5kmの位置である。この丘陵は東に千代川を望みながら中国山地から鳥取平野へと延びる丘陵の、標高294mの八町山を頂として更に北東へと延びる丘陵北端部に位置し、最北端は有富川を隔てた釣山(標高105m)である。1985年(昭和60年)の鳥取国体を一つの契機として、国道29号線(旧国道53号線鳥取南バイパス)が菖蒲と服部集落の間を通って南吉成へと開通し、その沿線に店舗や各種事業所が進出するなど調査地以北では開発が著しい地帯となっている。ただ、南側の丘陵縁辺部においては、のどかな田園風景が広がる地域でもあるが、今後の開発によってその様相は一変するものと思われる。

縄文時代

鳥取平野において最初に人の足跡がたどれるのは、千代川東岸の浜坂地内の砂丘で採集された黒曜石製の有舌尖頭器である。詳細は不明ながら旧石器時代まで遡る可能性をもつ遺物である。続く縄文時代前期の遺跡として、砂丘後背地の低湿地に立地する福部村栗谷遺跡が中期から始まる直浪遺跡とともに、後・晩期まで続く遺跡として知られている。やや遅れ、前期末の大歳山式土器が千代川東岸の丘陵上に立地する美和古墳群下層遺跡から微量ながら出土している。また、調査地から北西へ4.6km、湖山池南東岸の低湿地に立地する桂見遺跡は現在のところ前期末を初源とし、東桂見遺跡、布勢第１遺跡とともに後期を中心とした湖山池南東岸の低湿地遺跡群として知られる。桂見遺跡ではこれまで数度にわたる調査が行われているが、平成６、７年度に全長7.2、6.4mの丸木舟が相次いで出土し話題となった。桂見遺跡の東側に位置する布勢第１遺跡では木組みを有する水路や漆塗で木製の広口壺や腕輪が出土し、高度な漆技術が示された。また、湖山池に浮かぶ青島遺跡では、磨消縄文の浅鉢など多くの遺物が出土している。中期の遺跡としては砂丘地に立地する栃木山遺跡、追後遺跡、天神山遺跡があげられるが、中期の断片的な土器の出土にとどまる。調査地から1.7km北の山裾に位置する本高段木遺跡では二次堆積とみられるものの晩期の突帯文土器が出土している。また、そのさらに北側、釣山の北東に広がる山ケ鼻遺跡で、縄文時代後期後葉から晩期前葉に比定される土器群が出土している。さらに千代川の自然堤防上に立地する古海遺跡では突帯文土器の良好な資料が出土しており、中期から晩期へかけて遺跡の立地場所が推移していく状況が窺える。布勢第１遺跡では晩期後半になると平野中心部の微高地上に遺跡が進出するようになる。このように後期も後半を過ぎると遺跡は自然堤防上へ進出するようになり、晩期後半になると平野中心部の微高地へ進出するようになる。また、千代川左岸では、岩本第２遺跡、帆城遺跡、湖山第２遺跡、岩吉遺跡、大桷遺跡、里仁遺跡(仮称)等で少量の土器片が出土している。千代川東岸では、平野部に位置する大路川遺跡でトチ・アラカシなどの堅果類の詰まった貯蔵穴５基、土製耳飾、後期～晩期前半の土器等が検出され、この他晩期の土器が断片的ながら、西大路土居遺跡、古市遺跡などで出土している。

弥生時代

弥生時代に入り、縄文時代晩期からの遺跡が引き続き営まれるが、前期の遺物を断片的に出土するだけで中期へ継続しない傾向がみられ、前期の実態は不透明な部分が多い。前期の遺物を出土する遺跡として、青島遺跡、湖山第１・２遺跡、布勢第１遺跡、桂見遺跡、帆城遺跡、天神山遺跡、身干山遺跡な

どが挙げられる。そんな中、鳥取平野の拠点集落と考えられている岩吉遺跡では、千代水平野の自然堤防上の砂州を中心とした微高地に立地し、これまで数度の調査が行われている。遺跡の範囲は南北1,300m、東西800mに及び、鳥取平野で最初に稲作を導入した遺跡と考えられる。ただ前期の資料は数少なく、中期の遺物も今のところ断片的な出土にとどまり、昭和63～平成２年度の調査では、弥生中期中葉末から後期にかけて掘立柱建物、土坑、溝状遺構等の遺構が検出されている。この他、千代川東岸では西大路土居遺跡、富安遺跡が前期の遺物を出土する遺跡として知られる。中期中頃には自然堤防上に出現する古海、菖蒲、山ケ鼻、服部、秋里遺跡などがある。中期後葉になると段丘状の微高地に立地する遺跡が目立ち始め、帆城、湖山第２、布勢第２、大桷、北村恵儀谷遺跡などがその例である。こうして後期に入ると松原谷田、桂見遺跡をはじめ数は飛躍的に増加するとともに遺跡内の住居も増加傾向がみられ、それぞれ古墳時代へと営まれていく。

この地域の弥生集落の一特徴として、玉作り関連の遺物が帆城、岩吉、秋里遺跡で出土している他、布勢第２遺跡で玉作り工房とみられる竪穴住居が検出されている。この他に、祭祀遺跡として湖山池に浮かぶ青島遺跡、湧泉に展開した塞ノ谷遺跡、弥生中期を初現とした秋里遺跡があり、高住字宮ノ谷では、扁平鈕式の流水文銅鐸が出土している。

周辺の弥生時代の遺跡としては、千代川水系の氾濫原にあたる平野部にあたり、服部集落西側の標高７～８m程度の微高地に服部遺跡が内包している。昭和44年、圃場整備に伴う工事によって弥生時代後期の土器とともに田下駄、大足などの木製品が出土している他、服部遺跡出土とされる弥生時代中期の土器が鳥取県立博物館で所蔵されている。また、服部遺跡より西側1.3kmの丘陵裾部の微高地には北村恵儀谷遺跡が位置しており、後期を主体とする竪穴住居や土坑、掘立柱建物などが検出されている。また、北側の独立丘陵の釣山では、弥生時代後期の住居跡が検出されている。調査地から2.5～3.2km北の自然堤防上の微高地には、山ケ鼻遺跡、菖蒲遺跡が位置しており、中期中葉～後期の土坑や重複する溝状遺構が検出されている他、山ケ鼻丘陵では、中期の竪穴住居、貯蔵穴が調査されている。

こうして弥生時代も後期に入ると、諸集団の統合がすすみ、千代川東岸の南部地域の勢力に対するかのように地域勢力として目覚ましい台頭がみられる。その構造を具体的に示すものとして挙げられのが、布勢鶴指奥１号墓、第１土壙墓を中心とした桂見土壙墓群である。これらは、湖山池を望む丘陵上に突如造営され、この中で最も古い布勢鶴指奥１号墳丘墓は後期中葉の造営で、次の時期となる西桂見墳丘墓は四隅突出型墳と考えられており、突出部を含め一辺64×高さ５mと傑出した規模である。続く桂見土壙墓群では調査前重機の削平・撹乱を受けていた後の調査であったが、丘陵頂部に位置し、石列と地山の浅い掘削によって12mの方形状に墓域を区画し、中心主体とみられる第１土壙墓でのガラス製勾玉、水銀朱の出土などから墳丘墓であった可能性があるとされる。この他に、千代川東岸では、桂見周辺の勢力に対峙すると考えられている郡家町下坂１号墓、紙子谷遺跡門上谷１・２号墓がある。このうち１号墓は長辺24mの規模で26基の埋葬施設をもち、ガラス製管玉や鉄刀などが出土している。この他、これまで調査事例の少なかった弥生時代の墳墓は、後期前葉に位置付けられる滝山猿懸平２号墓をはじめ、土壙墓については古墳築造以前の遺構として検出される例(六部山古墳群など)もあり、弥生時代の墳墓の調査例は今後増加していくものとみられる。

古墳時代

古墳時代になると、平野周辺部の丘陵上に大小さまざまな古墳が造られるようになる。引き続き千代川西岸では湖山池南東岸の桂見古墳群、倉見古墳群などを中心として展開されるが、これらは弥生時代からの系譜を引く方墳である。桂見１号墳は長辺22m×高さ2.5m、続いて作られた２号墳は長辺28m×高さ4.5mの規模で長大な木棺から舶載鏡を出土している。これらに続く主体部や副葬品等卓越した内容の古墳は今のところ明らかになっていない。10m前後の小規模古墳として倉見２～７号墳、桂見10・16号墳が調査されており、前期後半～中期初頭とやや遅れて丘陵上に造営されている。土器転用枕

や弥生時代からの系譜とみられる湾曲する小口を有する木棺、舟形木棺の採用が特徴的であり但馬から丹後地方との同期の交流を窺う上で興味深い。周辺では、これまでに判明しているものでは、釣山24号墳(長辺22m、方墳)、銅鏡を出土した古海40号墳を含め古海古墳群、徳尾古墳群が前期古墳として知られている。中期になって前方後円墳としてそれぞれ未調査のため内容は不明瞭ながら、里仁29号墳(全長85m)が、やや遅れて桷間1号墳(全長92m)、前方後方墳では古海36号墳(全長67m)などが点在する。調査例としては方墳で構成される里仁古墳群があり、畿内地方の影響を強く受けた鰭付円筒埴輪が出土している。また、最近調査された下味野古墳群では箱式石棺より鉄鉾が出土している。後期に入って小規模古墳は墳丘規模が全体的に小型化する傾向があり、支稜線上にも造られるようになる。前方後円墳として布勢1号墳(全長59m)、大熊段1号墳(全長46.5m)があり、三浦1号墳(全長36m)、桂見6号墳(全長24.5m)、釣山2号墳(全長26.4m)等のように小規模な前方後円墳の築造もみられるようになる。このように小規模な前方後円墳を比較的多く有する古墳群として良田古墳群、松原古墳群などが挙げられる。桂見古墳群では湾曲した小口穴をもつ木棺が再び採用されるなど木棺墓が主流であり、千代川右岸に比べて箱式石棺の事例が少ないようである。千代川左岸では古墳の内部構造については右岸に比較して調査例が少なく特に湖山池周辺の横穴式石室については6世紀中葉の葦岡長者古墳(吉岡1号墳)、後葉の倉見9号墳、時期不明の石場山5号墳、高住12号墳が確認されているだけである。石材の豊富な東岸と比べて全体的に横穴式石室の造営が数少なく東岸でよく見られる所謂「中高式天井石室」とは異なる石室形態をとるようである。ただ、野坂川右岸の丘陵東側斜面に立地する山ケ鼻古墳(古海13号墳)は巨石を刳り抜いた石棺式石室で7世紀中頃の築造でありその特徴的石室構造とともに数少ない後期～終末期古墳として、7世紀後半に創建されたと考えられている菖蒲廃寺につながる貴重な存在である。

古墳時代の集落の調査例は比較的少ないものの、現在のところ古墳の立地する丘陵の後背地微高地上、現集落と重なって営まれたものと推察されている。弥生時代から続く遺跡として、布勢第2遺跡、桂見遺跡、帆城遺跡、湖山第1、湖山第2遺跡、天神山遺跡等がある。いずれも大集落とはいかず微高地上に住居跡が点在するといった状況で、西桂見遺跡の調査から、弥生時代丘陵上にみられた住居も古墳築造期になると丘陵斜面へ下りていくとされる。この他に千代川左岸では、岩吉、菖蒲、山ケ鼻、大桷遺跡等がある。菖蒲遺跡では釣山裾の微高地に焼失住居が検出されている。しかし菖蒲・服部の平野部周辺では中期になると溝状遺構を除いて明確に古墳時代中後期に比定される遺構は7世紀に入るまでみられなくなるようである。また、この時期の特徴的な遺跡として、秋里、塞ノ谷遺跡を挙げることができる。前者は古墳時代を中心として弥生後期、奈良・平安時代と祭祀色が濃く、特に多量の土師器とともに各種模造土・石製品が出土する土器群、土器溜状遺構が特徴的である。後者は湧泉を中心に弥生～古墳時代と継続して展開され、分銅形土製品や、舟、刀等各種木製模造品が注目される。

歴史時代

7世紀に入ってからは、白鳳後期創建とされる菖蒲廃寺に象徴されるように菖蒲村周辺は古代山陰道の通過地点とともに駅衙、郡家の推定地でもあり、律令期に入って鳥取平野西岸の中心的地域であったとされる。現在でも菖蒲集落の西に菖蒲廃寺の塔の心礎とみられる礎石があり、この付近で土師百井式軒丸瓦が出土している。またその250m西の山ケ鼻遺跡では、菖蒲廃寺の時期と重なる7世紀の掘立柱建物群、溝状遺構、土坑等が検出されている。千代川対岸の古市遺跡では7世紀後半から平安時代にかけての掘立柱建物と奈良三彩小壺、墨書土器などが出土している。また、律令体制下のこの地域は、天平勝宝7年(755年)、『東大寺東南院文書』「東大寺領因幡国高草郡高庭庄坪付注進状案」から南北10条にわたり条里制が施行されていたことが明らかとなっている。この時期、菖蒲遺跡では釣山沿いの微高地に8世紀後半の総柱建物が検出されている。しかし高庭庄の経営はうまくいかず、その後延暦20年(801年)、延暦22年(803年)東大寺から庄域の多くが藤原縄主、藤原藤嗣へ売却され、残りの散在する5町8反余りを中心として開発を行ったが、その後10世紀後半には完全に没落し、長保6年(1004年)を最後に

史料に見られなくなる。10世紀初頭から国衙領体制が成立していく中で国衙領として再編されたものと考えられ、中世には一部を高草郡の郡領寺である薬師寺(後の座光寺)が有していたと『因幡民談記』に記されている。その間の遺構として、山ケ鼻遺跡のそれぞれ墨書土器などが出土した9世紀後半の井戸や13世紀に至る多量の遺物が出土した大形土坑があり、菖蒲遺跡では9世紀後半の墨書土器が出土している。また、岩吉遺跡では8～10世紀にかけて溜り状遺構や自然流路から567点にもおよぶ多量の墨書土器、人形、「天長二年(825年)税帳」と記された題箋軸を含む木簡等が出土し、桂見遺跡堤谷地区では8世紀後半、9世紀後半の掘立柱建物が検出され、いずれも公の機関の存在を示唆する報告がなされている。山ケ鼻遺跡では輸入陶磁器類が土坑や井戸から出土しており、菖蒲遺跡では、京都、近江産の緑釉陶器片とともに、白磁片、青磁片が多数出土していることなどから、高庭庄没落後も中世にかけて何らかの統治機関的なものがあったと考えられている。

貞治3年(1364年)、因幡守護に山名氏が任じられる。山名氏は15世紀に入って守護所を布施に移して布施天神山城を築き、鳥取城へ移るまでの100年程の間、因幡支配の拠点とした。『大幅絵図』『因幡民談記』所載の17世紀後半の古絵図には、天神城周辺の様子が描かれており、一部調査されて内堀や土塁、井戸、焼け落ちた建物跡等が検出されている。また、「葬地」と記された丘陵である布勢鶴指奥墳墓群、桂見墳墓群で中世墓が検出され、この他に西桂見遺跡、大熊段遺跡、三浦遺跡、里仁古墳群、徳尾古墳群や、中世の埋葬施設とみられる集石遺構が釣山古墳群で検出されている。また、中世の倉庫跡が布勢第2遺跡で、長さ45m以上の土塁状遺構が西桂見遺跡で検出されている。

慶長5年(1600年)関ヶ原の合戦後鹿野城主となった亀井茲矩は、慶長年間(1596～1614年)によって行われた亀井堤と呼ばれる大規模な堤防や河原を取水口とする大井出用水を開削した。古海、菖蒲、服部地区を含む千代川西岸下流域一帯は安定した用水を確保できるようになった。

引用・主要参考文献
鳥取市 『新修鳥取市史 第1巻 古代・中世篇』 1983年
平凡社 『日本歴史地名大系第32巻 鳥取県の地名』 1992年

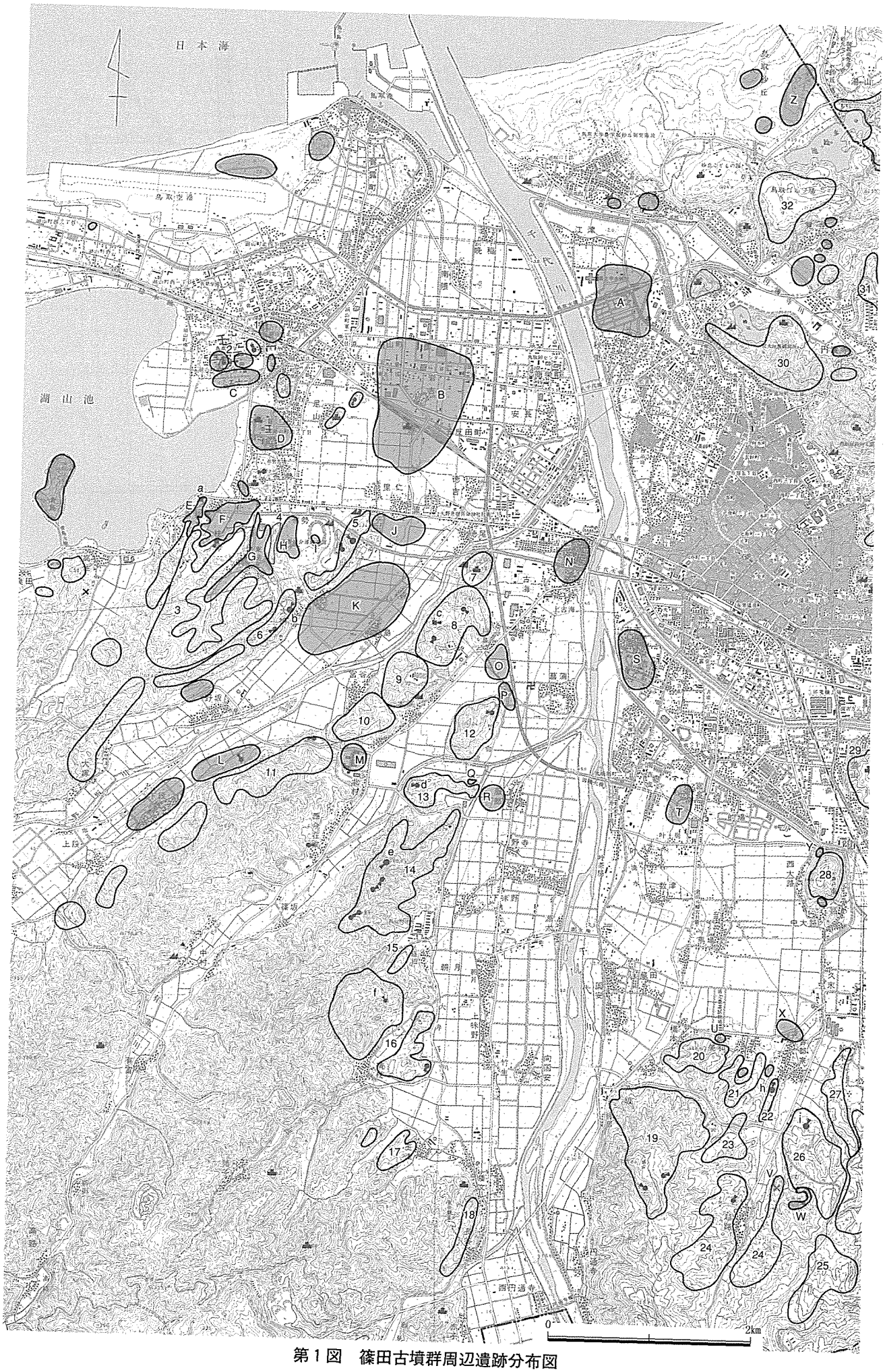
第1図 遺跡名称

1．大熊段古墳群
2．三浦古墳群
3．桂見墳墓群
4．布勢鶴指奥墳墓群
5．里仁古墳群
6．桷間古墳群
7．徳尾古墳群
8．古海古墳群
9．本高古墳群
10．宮谷古墳群
11．小森山古墳群
12．釣山古墳群
13．服部墳墓群
14．下味野古墳群
15．篠田古墳群
16．横枕古墳群
17．玉津古墳群
18．長谷古墳群
19．八坂古墳群
20．橋本古墳群
21．美和古墳群
22．古郡家古墳群
23．園原古墳群
24．越路古墳群
25．空山古墳群
26．六部山古墳群
27．船木古墳群
28．大路山古墳群
29．面影山古墳群
30．雁金山古墳群
31．円護寺古墳群
32．開地谷古墳群
33．湯山古墳群

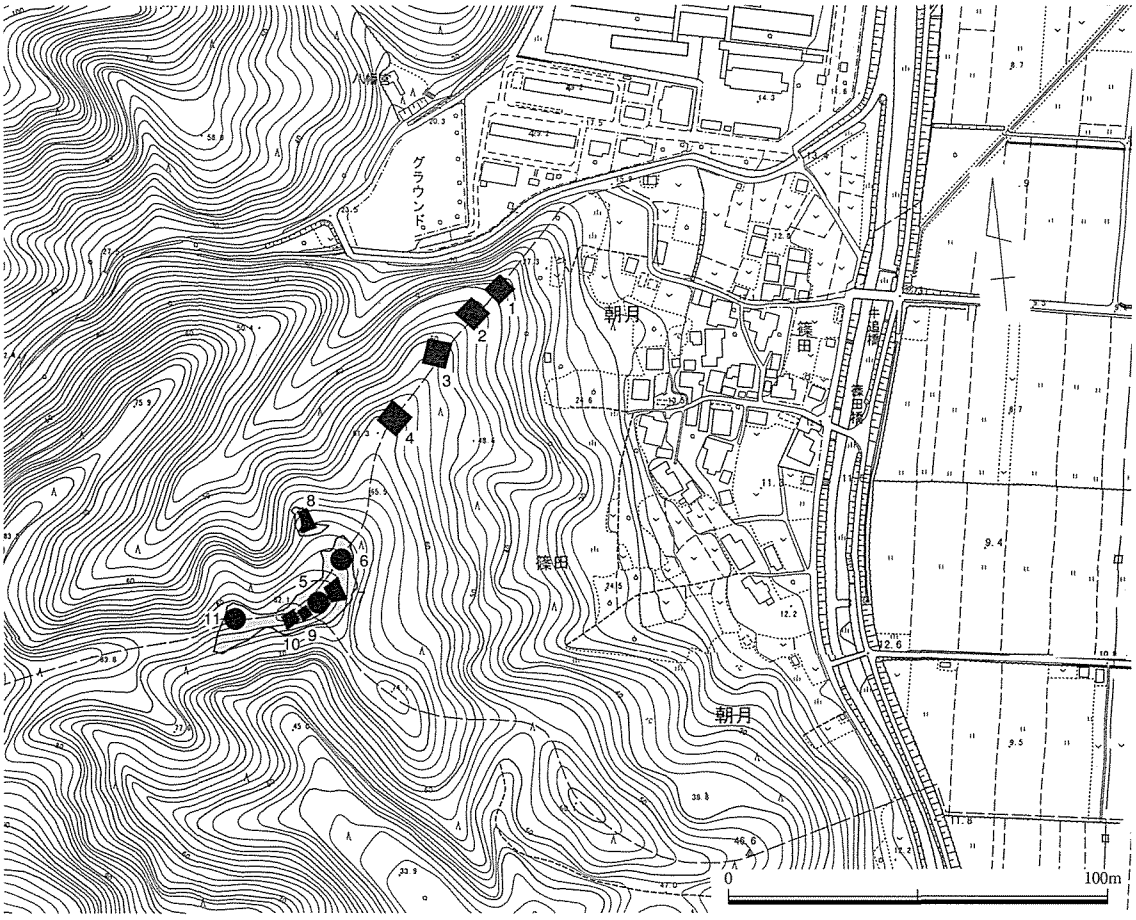
a．西桂見墳丘墓
b．桷間1号墳
c．古海35号墳
d．服部23号墳
e．下味野23号墳
f．横枕55号墳
g．横枕13号墳
h．古郡家1号墳
i．六部山3号墳

A．秋里遺跡
B．岩吉遺跡
C．湖山第2遺跡
D．天神山遺跡
E．西桂見遺跡
F．桂見遺跡
G．東桂見遺跡
H．布勢第1遺跡
I．布勢第2遺跡
J．里仁遺跡
K．大桷遺跡
L．小森山遺跡
M．北村恵儀谷遺跡
N．古海遺跡
O．山ヶ鼻遺跡
P．菖蒲遺跡
Q．本高円ノ前遺跡
R．服部遺跡
S．古市遺跡
T．宮長竹ヶ鼻遺跡
U．橋本遺跡
V．越路銅鐸出土地
W．七谷須恵器窯跡群
X．久末・古郡家・大路川遺跡
Y．西大路土居遺跡
Z．追後遺跡

—凡例—
集落遺跡、遺物散布地
墳墓群、古墳群
主要古墳
横穴
城跡



第１図　篠田古墳群周辺遺跡分布図



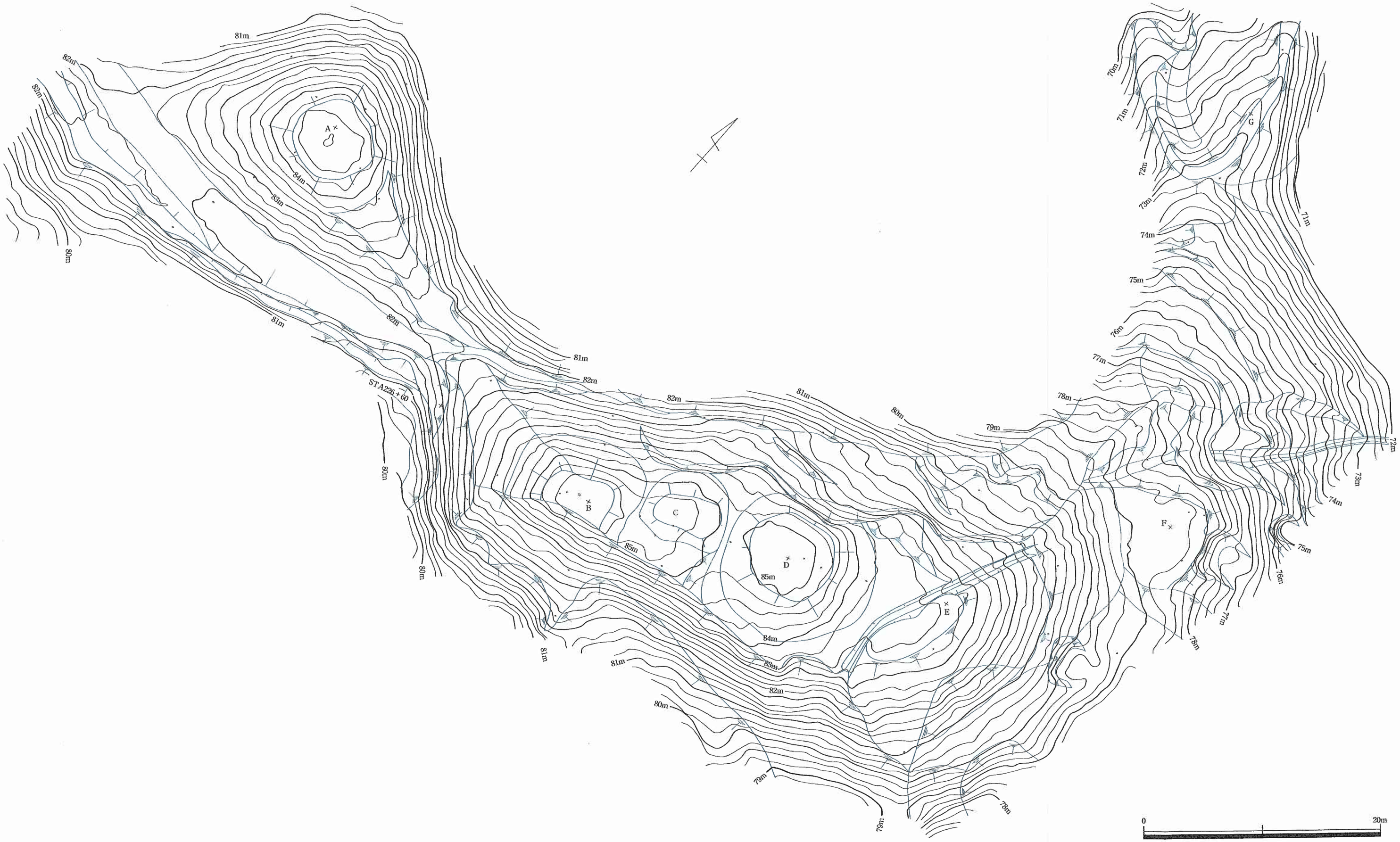
第２図　篠田古墳群調査位置図

第３章　調査の結果

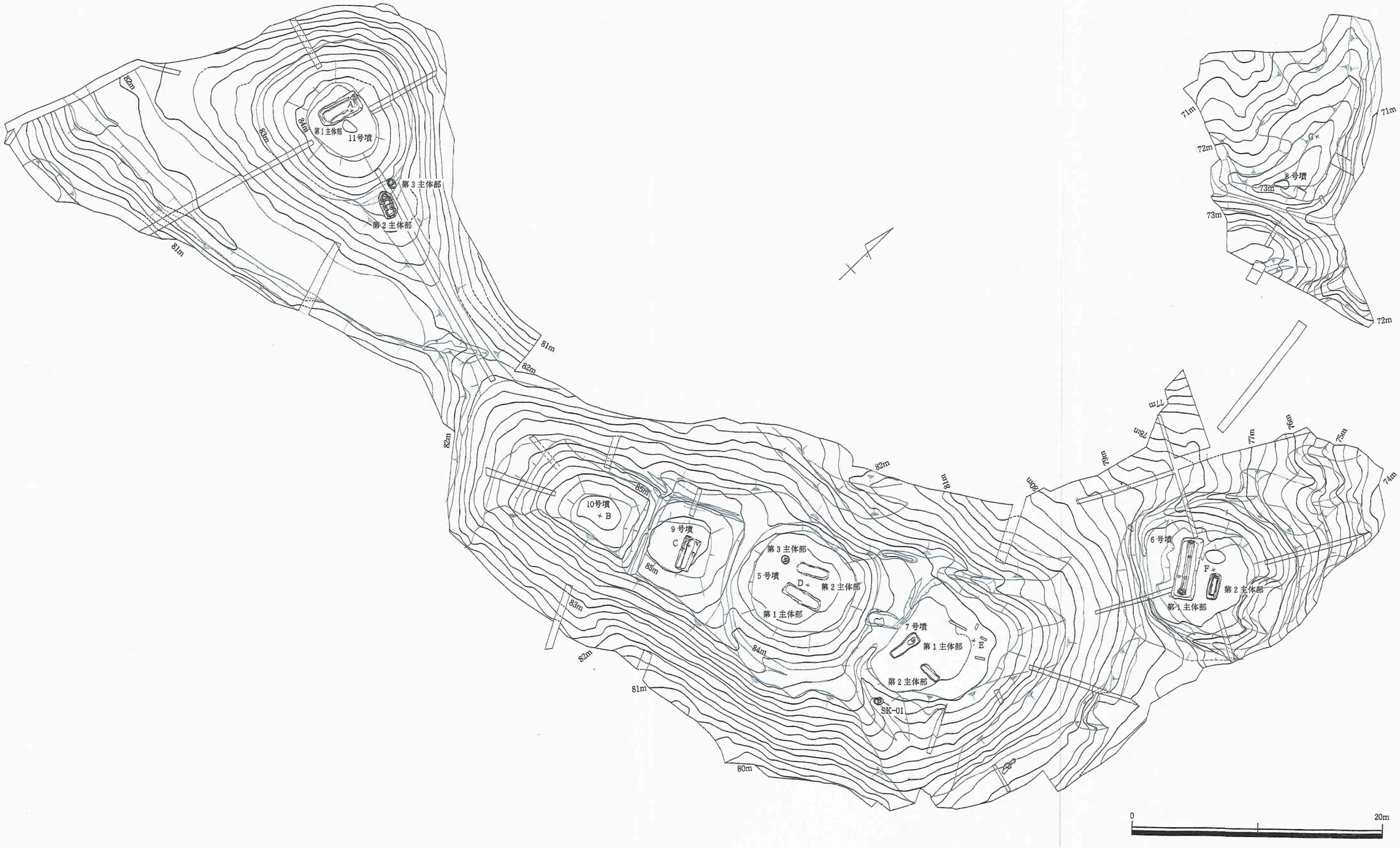
第１節　篠田古墳群の立地と構成（第２図）

篠田古墳群は、鳥取市上味野を中心に下味野、朝月に所在する標高約35～86mの丘陵に展開する古墳群である。現在までに５基の古墳が確認されている。古墳群は中国山地から鳥取平野へ向けて延びる丘陵のうち、標高294mの「八町山」を頂として東に千代川を望みながら更に北東へと延びる丘陵上に位置し、有富川を隔ててそびえる独立丘陵「釣山」(標高105m)が丘陵最北端となる。篠田古墳群の所在する丘陵の東には河原町の取水口から丘陵の東縁辺部を通って千代水平野へと続く大井手川(17世紀初頭に鹿野城主亀井茲矩によって掘削)が北上する。さらに東には千代川や「大路山」(標高105m)、「面影山」をはじめ鳥取平野南部が視界一面に広がる。丘陵最北端に位置する「釣山」には、総数42基からなる釣山古墳群が分布し、平成２、３年度に前方後円墳(全長26.4m)１基を含む古墳６基と弥生時代後期の甕棺、住居跡の調査が行われている。「釣山」の手前にも独立丘陵が存在しており、これまでに総数47基の古墳、墳墓が確認されている服部古墳群が存在する。平成11・12年度には弥生時代後期の墳墓３基と古墳６基などの調査が行われている。また、篠田古墳群の北側には下味野古墳群、南側には横枕古墳群が分布している。

篠田古墳群の所在する丘陵は、主稜線より北東へ派生する小支稜線に存在するが、谷を挟んで北西側に位置する下味野古墳群には主稜線頂部の標高160mに前方後円墳である23号墳(全長73.5m)が占拠し、そこから南西に延びる主稜線上標高150～160m付近には29号墳(全長29m)、30号墳(全長12m)、33号墳(全長19m)、36号墳(全長22.5m)計５基の前方後円墳が700m範囲内に点在し、鳥取市内でも前方後円墳が密集する地域となる。主稜線は鞍部と高まりを繰り返しながら蛇行して北東側へ延びる尾根筋



第３図　篠田古墳群調査地地形図



第4図　篠田古墳群墳丘遺存図

とその尾根筋から北へ派生する尾根上に古墳が展開する。主稜線の両側には幾つもの小尾根が派生するが、東側斜面は西側斜面に較べて緩やかであり、東側に派生する小尾根上には古墳が存在するものもある。篠田古墳群から谷を挟んだ南側には横枕古墳群が存在しており、現在までに91基の古墳が確認されている。古墳群は標高157mに存在する全長14mの円墳である46号墳を頂とし南東に降る尾根筋、その裾部、南東側の独立丘陵の３群に大別できる。独立丘陵に立地する一群には当古墳群において最大の前方後円墳である13号墳(全長70m)を含み、方墳、円墳を主とした前期後半の古墳が形成されている。北西側の一群はやや高位に形成され、小型の前方後円墳である55号墳(全長23m)や円墳で構成される後期古墳の一群、その裾部に展開する横穴式石室を中心とする終末期の一群と大きく３群に大別されている。これらの古墳群は何れも千代川左岸丘陵の隣接地域に分布しており、範囲などは便宜的に字名などの地名から呼称されており、将来的には各古墳群の再編成も含め、統括的な検討が必要である。

篠田古墳群は下味野古墳群の南東側、横枕古墳群の北側に位置し、下味野古墳群と横枕古墳群の中間に存在している。古墳群は標高85mに存在する全長約15mの円墳である５号墳を頂とし、北東に派生する尾根上に展開する。往年の踏査によると、確認されている古墳は５基を数える。標高40～65mには４基の方墳が一群を形成し、少し距離をおいてその上方、標高78～84m付近には５ケ所の平坦面が存在する。隣接してさらに上方に５号墳が存在する。この５号墳周辺の平坦面が城跡関連遺構の可能性を有することから篠田所在城跡と認識されていた。今回の調査において、城跡と考えられる曲輪、堀、土塁、切岸などの顕著な遺構は確認できなかった。平坦面と認識されていた付近を中心に新たに６基の古墳を確認している。諸般の事情でこの度、再踏査を行うことは叶わなかったが、近隣にはまだ古墳の存在する可能性があり、さらに広範囲にわたる詳細な分布調査が必要である。

第２節　古墳等の調査（第３・４図、図版１）

今回の調査地は５号墳を含めた平坦面を中心に調査を実施した。また、北西に派生する小尾根、鞍部を隔てた尾根上位側にも古墳など遺構の存在の可能性が認められたので調査対象に含めた。標高は概ね72～86mに位置する。

１．篠田５号墳（第５～13図、図版２～10・31）

位置と現状

５号墳は、調査地中央の標高85m付近に位置し、北東側の上方に７号墳、南西側の下方に９号墳が隣接する。地形上の理由と考えられるが、５・７・９・10号墳は隣接する。当古墳は今回の調査地内では、往年の踏査において唯一、古墳と認識されていた。調査前の観察では墳丘は確認できるものの、墳頂部が極めて平坦であり、盛土の流失若しくは後世の削平が考えられた。

墳丘

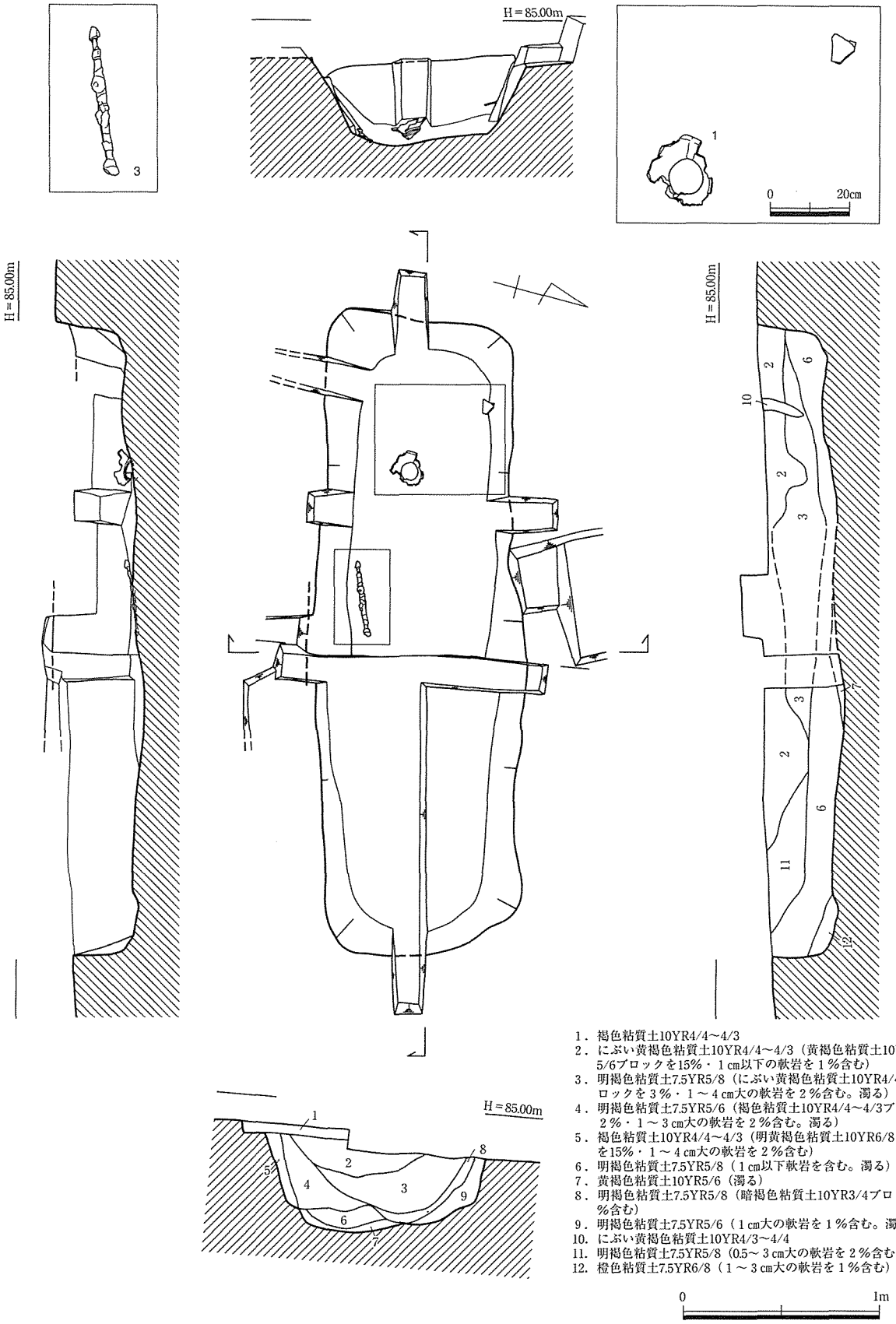
厚さ10～18cmの表土を除去した段階で墳丘面を検出した。北西側約１/６が流失する。墳丘の築造は、南西側の尾根上位に弧状の溝を切削して成形し、さらに盛土して形を整えている。尾根側に隣接する９号墳の墳裾を僅かに切る。盛土の厚さは最大65cmを測るが、尾根上位側は流失したものとみられ10cm程の遺存が観察される。表土除去後の墳頂部の標高は84.96m、墳丘の遺存高は南東墳裾から墳頂部まで最大1.29mを測る。周溝は尾根の上方側半周程度に認められ、規模は概ね幅200cm、深さ35cm。墳丘規模は北東～南西方向で径11.35m、北西～南東方向で11.82mを測り、尾根筋が僅かに短い円墳である。

埋葬施設

埋葬施設は墳頂部に３基を検出した。

主体部

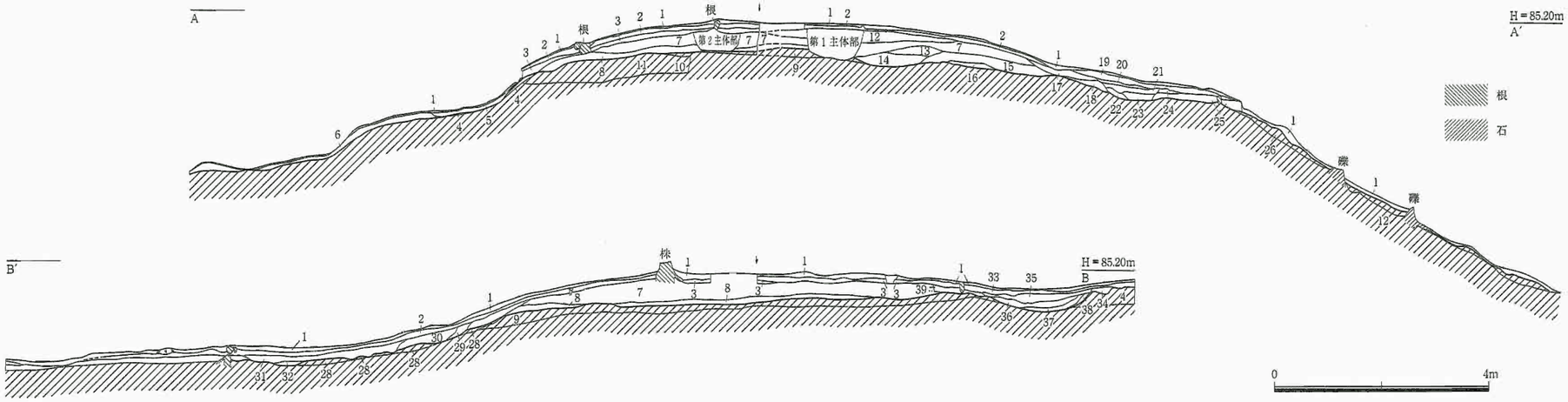
第１主体部は墳頂部中央のやや南東側に位置し、主軸はN-76°-Eにとる。墓壙は平面が隅丸長方形を



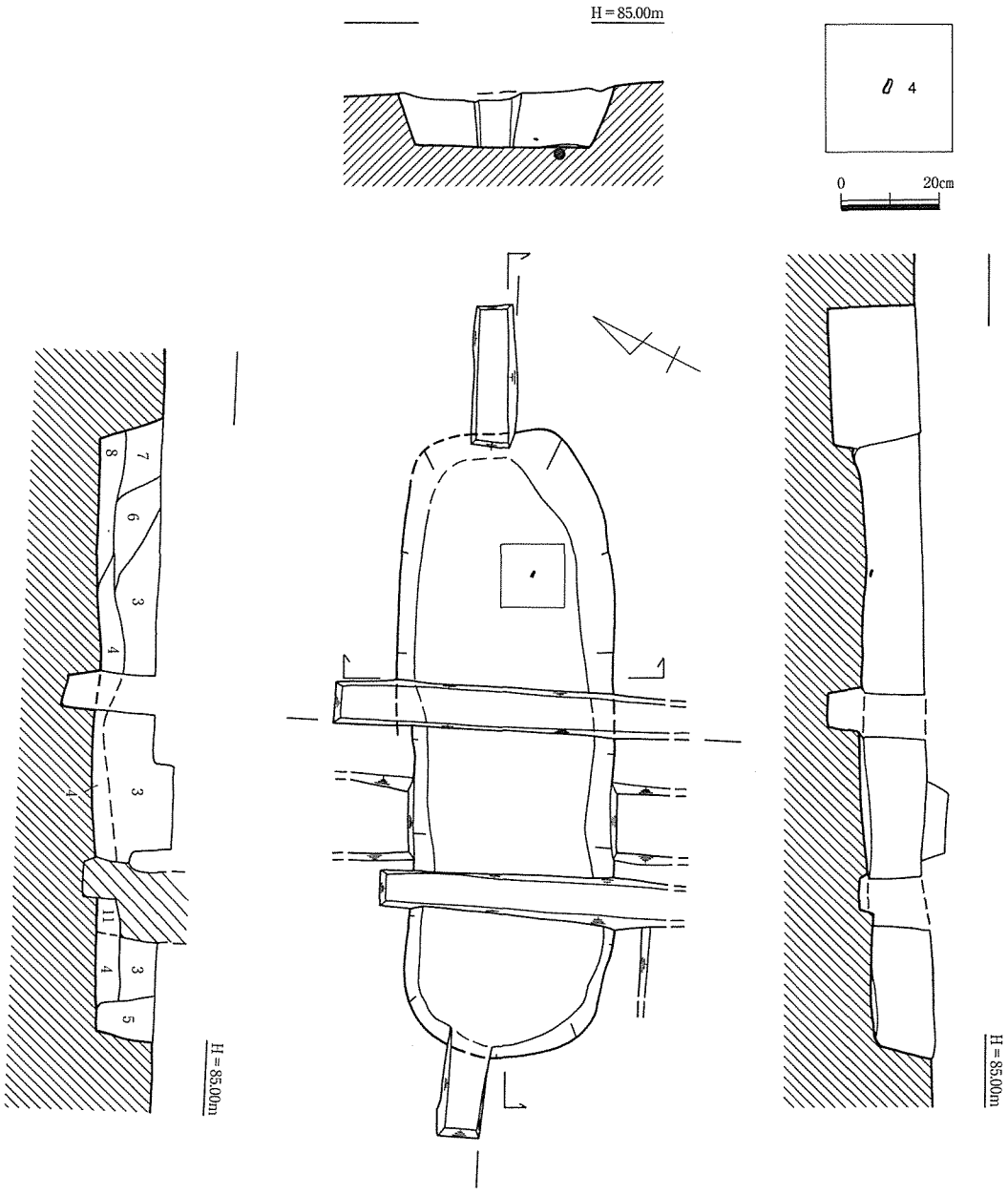
1．褐色粘質土10YR4/4～4/3
2．にぶい黄褐色粘質土10YR4/4～4/3（黄褐色粘質土10YR5/8～5/6ブロックを15%・1㎝以下の軟岩を1%含む）
3．明褐色粘質土7.5YR5/8（にぶい黄褐色粘質土10YR4/4～4/3ブロックを3%・1～4㎝大の軟岩を2%含む。濁る）
4．明褐色粘質土7.5YR5/6（褐色粘質土10YR4/4～4/3ブロックを2%・1～3㎝大の軟岩を2%含む。濁る）
5．褐色粘質土10YR4/4～4/3（明黄褐色粘質土10YR6/8ブロックを15%・1～4㎝大の軟岩を2%含む）
6．明褐色粘質土7.5YR5/8（1㎝以下軟岩を含む。濁る）
7．黄褐色粘質土10YR5/6（濁る）
8．明褐色粘質土7.5YR5/8（暗褐色粘質土10YR3/4ブロックを25%含む）
9．明褐色粘質土7.5YR5/6（1㎝大の軟岩を1%含む。濁る）
10．にぶい黄褐色粘質土10YR4/3～4/4
11．明褐色粘質土7.5YR5/8（0.5～3㎝大の軟岩を2%含む。濁る）
12．橙色粘質土7.5YR6/8（1～3㎝大の軟岩を1%含む）

第5図　5号墳第1主体部実測図

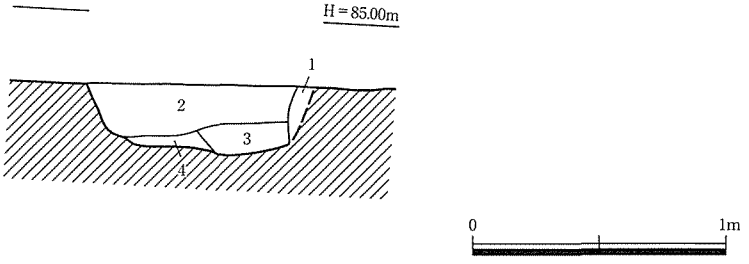
1．腐植土
2．褐色粘質土10YR4/4～4/6
3．暗褐色粘質土10YR3/3（やや黒色を帯びる）
4．明赤褐色粘質土5YR5/8（１～８cm大の地山岩を10～15%含む）
5．褐色砂混粘質土10YR4/4（0.5～４cm大の地山岩を２%含む）
6．褐色砂混粘質土7.5YR4/6～5/6
7．橙色粘質土7.5YR6/6～6/8（0.5～４cm大の地山岩を３%含む。湧る）
8．暗褐色粘質土10YR4/4～5/4（やや黒色を帯びる）
9．明褐色粘質シルト7.5YR5/8
10．黄褐色粘質シルト10YR5/6
11．黄橙色粘質シルト10YR7/8
12．にぶい黄褐色粘質土10YR5/4～5/6
13．橙色粘質土7.5YR6/8～5/8（１cm大の地山岩を２%含む。湧る）
14．明褐色粘質土7.5YR5/8～6/8（１cm大の地山岩を１%含む。湧る）
15．橙色粘質土7.5YR6/8（若干湧る）
16．橙色粘質土7.5YR6/8～5/8
17．暗褐色粘質土10YR3/4（やや黒色を帯びる。湧る）
18．暗褐色粘質土10YR3/4（にぶい褐色粘質土7.5YR5/4ブロックを２%含む）
19．褐色粘質土7.5YR4/6（砂粒を僅かに含む。湧る）
20．暗褐色粘質土10YR3/4（褐色粘質土7.5YR4/6ブロックを10%含む。湧る）
21．黒褐色粘質土10YR3/2（炭化物を僅かに含む）
22．暗褐色砂混粘質土10YR3/4（やや黒色を帯びる）
23．暗褐色粘質土10YR3/3（黒色を帯びる。0.5～５cm大の地山岩を１%含む）
24．褐色粘質土10YR4/6（暗褐色粘質土10YR3/3～3/4ブロックを２～３%含む。湧る）
25．暗褐色粘質土10YR3/4～4/4（やや黒灰色を帯びる。１～３cm大の地山岩を１%含む）
26．明黄褐色粘質土（0.5cm以上の地山岩を10%含む）
27．褐色粘質土10YR4/4～4/3（やや黒色を帯びる。湧る）
28．黄褐色粘質土10YR5/8（0.5～15cm大の地山岩を10%含む）
29．褐色粘質土10YR4/4～4/6（黄色を帯びる。黄褐色粘質土10YR5/8ブロックを３%含む。湧る）
30．黒褐色粘質土10YR3/2～3/3（湧る）
31．灰黄褐色粘質土10YR4/2～3/2（やや黒色を帯びる）
32．褐色粘質土10YR4/4～4/6
33．にぶい黄褐色粘質土10YR4/3（灰色を帯びる。湧る）
34．暗褐色粘質土10YR3/3（黒色を帯びる）
35．黒褐色粘質土10YR3/2（砂粒僅かに含む）
36．暗褐色砂混粘質土10YR3/3（黄褐色粘質土10YR5/6ブロックを３%含む）
37．暗褐色砂混粘質土10YR3/3～3/4（黒色を帯びる）
38．褐色粘質土10YR4/4～4/6（湧る）
39．褐色粘質土10YR4/4～5/4



第６図　５号墳墳丘遺存図・断面図

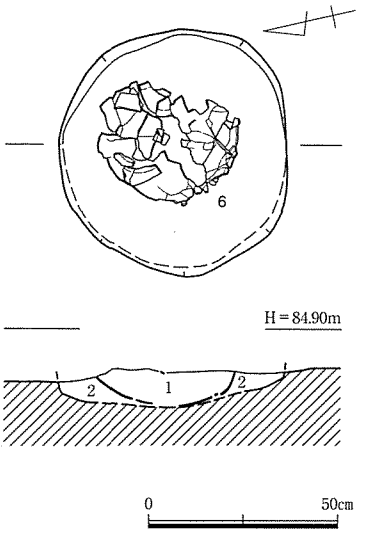


1．にぶい黄褐色粘質土10YR4/3～4/2（3cm大の軟岩1片を含む）
2．にぶい黄褐色粘質土10YR5/4～5/6（明褐色粘質土7.5YR5/8ブロックを3％・2cm以下の軟岩を1％含む。濁る）
3．褐色粘質土10YR4/4（黒色を帯びる。濁る）
4．黄褐色粘質土10YR6/6～6/8（濁る）
5．にぶい黄褐色粘質土10YR5/4～5/6（黄褐色粘質土10YR5/6ブロックを3％・2cm以下の軟岩を1％含む）
6．にぶい黄褐色粘質土10YR5/4～5/6（2cm以下の軟岩を3％含む）
7．褐色粘質土10YR4/4～4/3（明黄褐色粘質土10YR6/6～6/8ブロックを7％含む）
8．明黄褐色粘質土10YR6/6～6/8（2cm以下の軟岩3片を含む）



第7図　5号墳第2主体部実測図

呈し、長さ3.29m、幅1.13m、深さ44cmを測る。底面は若干の凹凸があるものの、ほぼ一定で標高84.42mを測る。土層断面の観察では木棺痕跡を確認することはできず、遺体を墓壙に直接埋葬する土壙墓とも考えられる。遺物は墓壙の西壁から約70cmのやや南寄りから土師器の器台(1)、中央やや西寄りの南壁沿いで鉄剣(3)が出土している。(1)は鼓形器台の受部を転用枕としている。受部は直線的に開き、端部は外反して丸く納める。復元口径は19.2cm。残存状況から打ち欠きの可能性も考えられるが、風化が著しく不明である。(3)は剣身部27.4cm、茎部10.7cmを測り、全長は38.1cmとなる。切先を東北東に向けている。墓壙の軸よりも約10°南に振る。ほぼ床面上から出土するが茎部が3cm程度浮いた状態である。全体的に銹化する。中心軸の鎬は不明瞭である。茎部に目釘孔を有する。切先部付近に布目痕、茎部に木質痕が認められる。さらに、出土状態を図示できなかったが(3)付近に管玉1点(2)が出土している。(2)は一端部を欠失し、残存する長さは7.0mm、径4.3mm、重量0.2gを測る。色調は暗オリーブ灰色を呈しており、材質は碧玉製と思われる。これらの遺物の出土状態から頭位は西南西の尾根上位側と考えられ、頭部に器台を転用した枕、遺体の右脇、腹部から腰位に切先を足元に向けた鉄剣の出土位置が想定できる。



1．褐色粘質土10YR4/6～4/4（1cm大の軟岩1片を含む。濁る）
2．黄褐色粘質土10YR5/8（1cm以下の軟岩を1%含む）

第8図　5号墳第3主体部（土器棺）実測図

第2主体部は墳頂部中央のやや北西側に位置し、主軸はN-64°-Eにとる。墓壙は平面が長楕円形を呈し、長さ3.60m、幅0.91m、深さ27cmを測る。底面の標高は尾根上位に向かって緩やかに高くなり、その比高差は12cmを測る。土層断面の観察では第1主体部同様、木棺痕跡を確認することはできなかった。遺物は北東半の南東壁寄りから刀子(4)、管玉(5)が出土している。(4)は銹化が著しく、切先部、茎尻部を欠失する。断面形は刀部が二等辺三角形、茎部が長方形を呈する。茎部に木質痕が認められる。(5)は、長さ12.7mm、径4.3mm、重量0.35gを測る。色調はオリーブ灰色を呈しており、材質は碧玉製と思われる。これらの遺物の出土状態から推測すれば、頭位は北東の尾根下位とも考えられ、頭付近に刀子、遺体の左脇、想像を逞しくすれば左手首付近に管玉とも考えられ、第1主体部とは頭位が逆方向となる。

第3主体部は墳頂部中央のやや西側に位置する。墓壙は平面がほぼ円形を呈し、長径1.31m、短径1.21m、深さ20cmを測る。墓壙中央には土師器の壷(6)を横位に安置した土器棺である。土器棺の主軸はN-20°-Eにとり、口を南西に向ける。風化著しく、遺存状態は劣悪で、意図的の可能性もあるが口縁部は欠失しており、本来存在していたであろう体部から底部にかけての約2/3が欠失する。

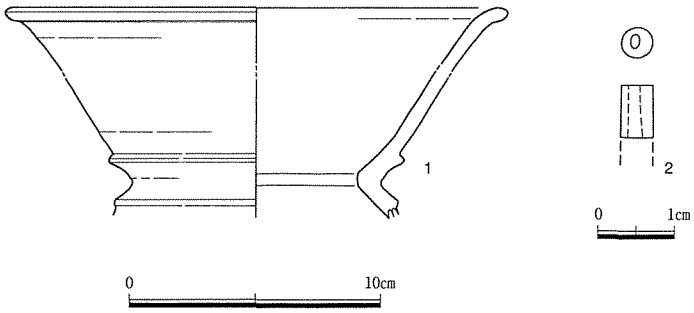
その他の出土遺物

南西側の周溝から高杯の脚柱部(7)、東側の周溝から高杯の杯底部(8)が出土している。

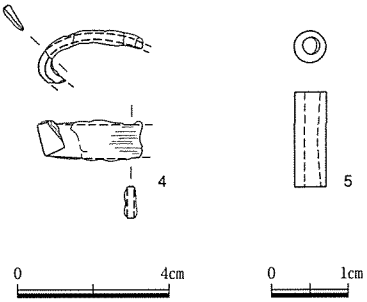
2．篠田6号墳（第14～21図、図版2～4・10～17・32・33）

位置と現状

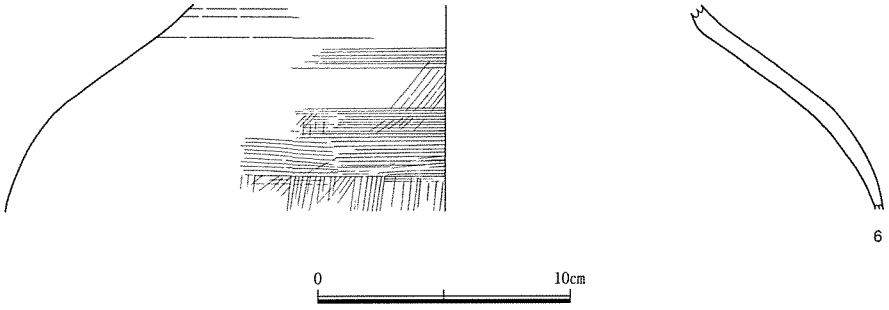
6号墳は、調査地北東端の標高78.8m付近に位置し、小尾根が北西に派生する分岐点に立地する。南西側の上方約20mには7号墳が存在し、北西側約35m下方の新たに派生する舌状の小尾根上には8号墳が存在する。北東に延びる尾根上には、約40m下方に4号墳が存在する。6号墳は往年の踏査において古墳とは認識されておらず、斜面中位の半円状の平坦面として捉えられている。また4号墳から6号墳までの間には、古墳などの顕著な遺構は確認されていない。調査前の観察では段状の平坦面は確認することができたが、ひどく荒れており、城跡関連遺構や古墳か否かは不明であった。



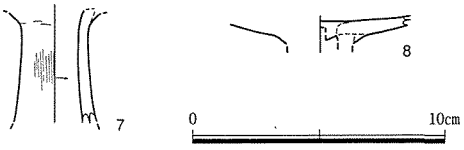
第９図　５号墳第１主体部出土遺物実測図（１）



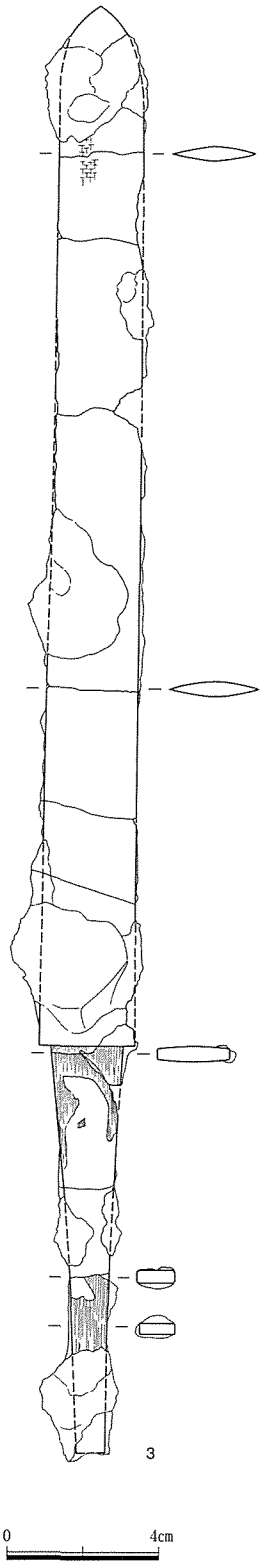
第11図　５号墳第２主体部出土遺物実測図



第12図　５号墳第３主体部出土遺物実測図



第13図　５号墳周溝内出土遺物実測図



第10図　５号墳第１主体部
出土遺物実測図（２）

墳丘

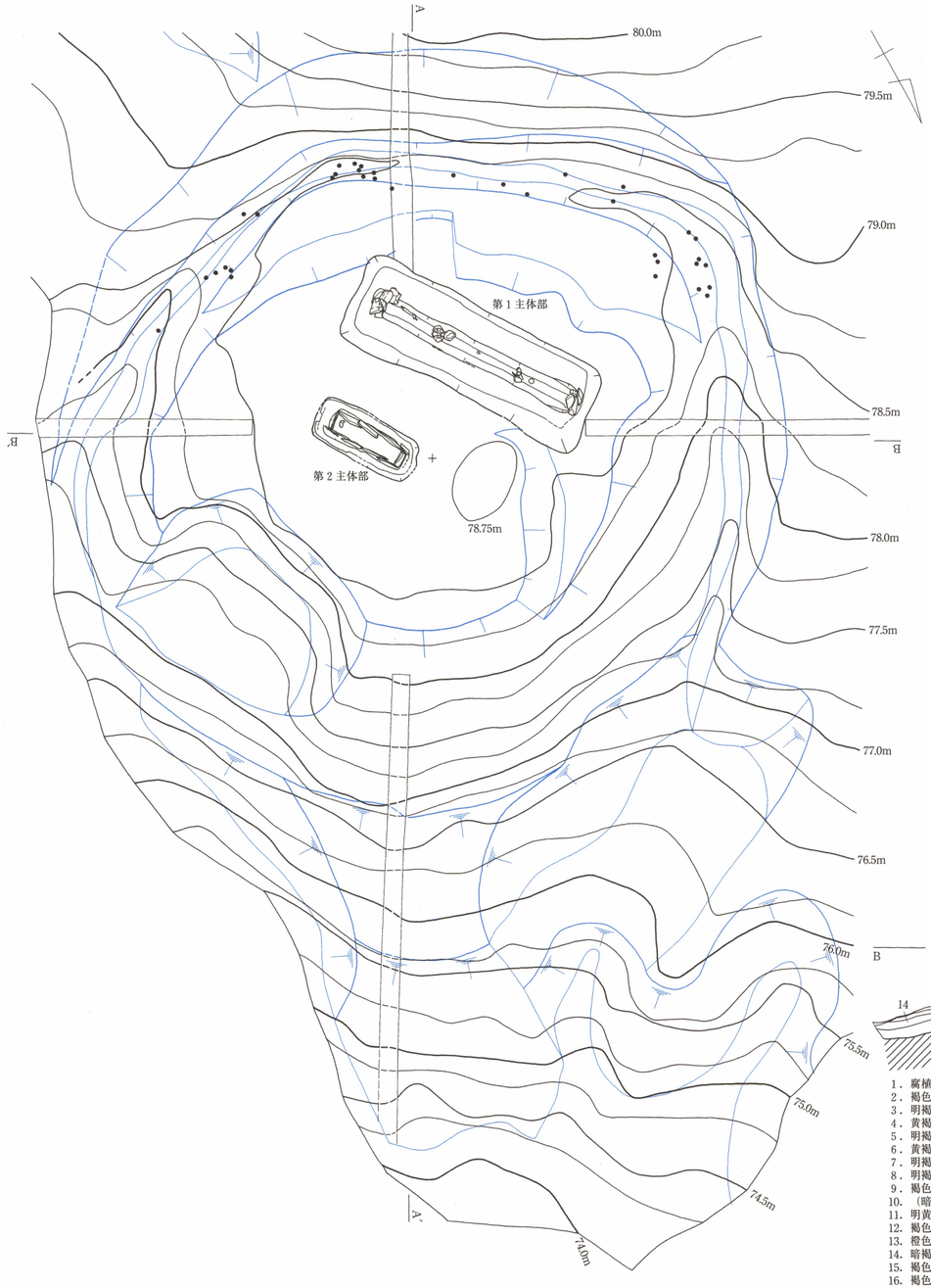
厚さ４～32cmの表土を除去した段階で墳丘面を検出した。東側の一部が崩落する。また、北東半の裾周りも侵食が著しい。墳丘の築造は、南西側の尾根上位に弧状の溝を切削して成形し、さらに盛土して形を整えている。盛土の厚さは最大90cmを測るが、尾根上位側は流失したものとみられ15～27cm程の遺存が観察される。表土除去後の墳頂部の標高は78.78m、墳丘の遺存高は北東墳裾から墳頂部まで最大2.88mを測る。周溝は尾根の上方側半周程度に認められ、規模は幅120～137cm、深さは尾根側が最も深く71cm、平均40～47cm程度。墳丘規模は北東～南西方向で径13.99m、北西～南東方向で12.09mを測り、尾根筋が若干長い円墳である。

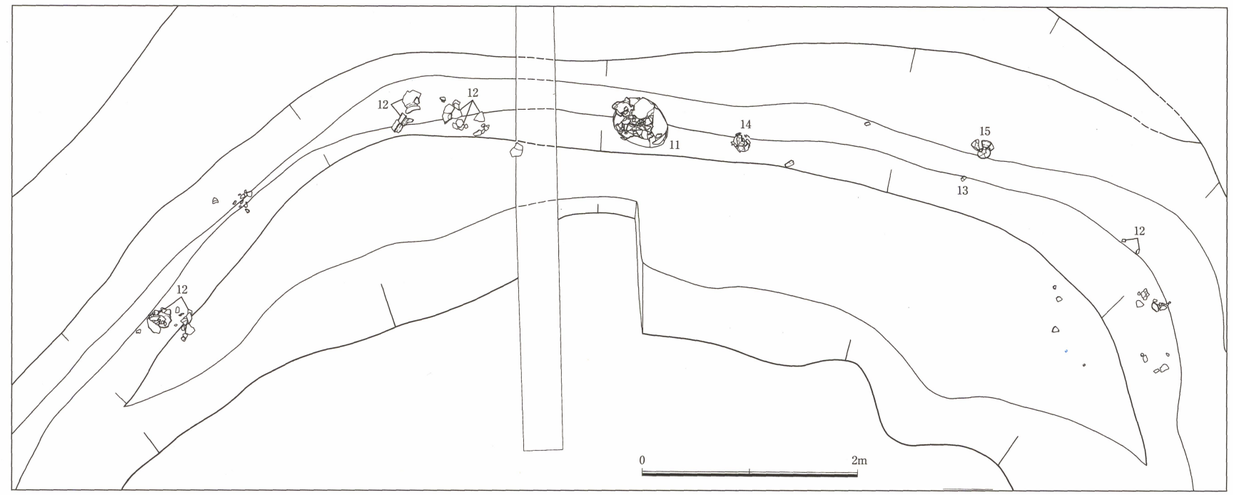
埋葬施設

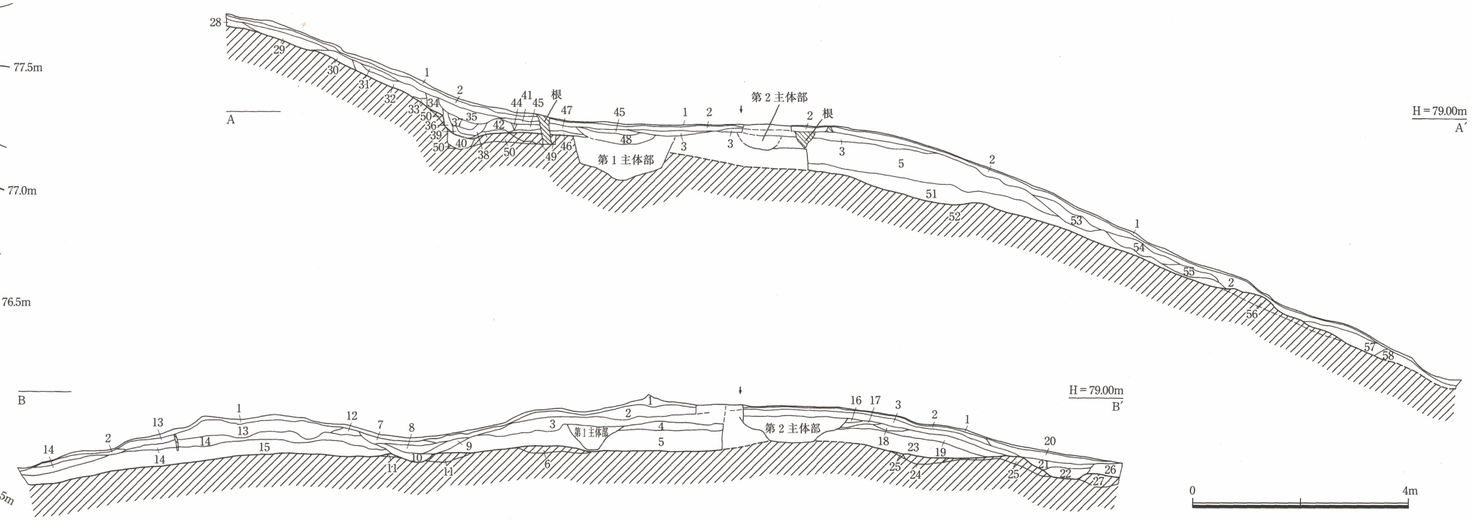
埋葬施設は墳頂部に２基を検出した。

主体部

第１主体部は墳頂部中央のやや南西、尾根側に位置し、主軸はN-34°-Wにとる。墓壙は平面が隅丸長方形を呈し、長さ5.10m、幅1.83m、深さ68cmを測る。底面は二段状になり、中央部分が長さ4.43m、幅43～54cmの範囲で10cm程浅く凹む、標高はほぼ一定で77.79mを測る。墓壙底から棺の小口若しくは小口板の裏込めと考えられる石積みが検出された。長さ20～35cm、厚さ10～15cm程の比較的扁平な割り石を３～５個、特に棺内を意識した積み方でも無く、雑然と積み重ねている。土層断面の観察では縦断面において小口板と考えられる痕跡を確認することができたが、横断面からは明瞭な棺痕跡を確認することはできなかった。縦断面から棺の長さを計測すると内法370cmを測る。規模や棺底の断面形などから割竹形木棺の可能性もある。遺物は棺床面のほぼ中央に長さ7.0cm、幅4.5cm、厚さ3.6cmの川原石、南東小口より北西側106cmの位置に土師器の高杯杯部(１)、北西小口から南西側98cmの位置から土師器の高杯杯部(２)が出土している。(１)と(２)間の距離は166cmを測る。(１)は下位に扁平な板石を、(２)は10～20cm程度の割り石を周りに３個配置して安定させている。南東小口寄りには長さ42cm、幅３～７cm程度の範囲に鉄錆痕、木質痕が認められ、その大きさ、断面形などから鉄剣と考えられるが、銹化著しく復元、図化できなかった。(２)から北西小口寄り30cmの位置には銅鏡(７)が鏡面を上方に向けて、その周辺に管玉(４～６)が出土している。出土位置は不明であるが埋土中より刀子の切先部(３)が出土している。(１・２)は共に有段の杯部である。(１)はほぼ完存、口縁端部は外反する。口径は最大20.9cmを測る。風化が著しいが、外面ヘラ磨き痕が認められる。(２)は１/２弱が遺存する。口縁部は直線的に開く。復元口径は19.2cmとなる。外面は上半にハケ目、下半にヘラ磨き。内面はハケ目後ヘラ磨き。(３)は残存長3.6cm、幅1.43cmを測り、断面形は二等辺三角形状を呈する。(４～６)は碧玉製の管玉、色調は明オリーブ灰色を呈する。(５・６)は一端部を欠失する。(４)の長さ50.0mm、重量13.775gを測ることから概ね長さ50mm、重量14g程度と考えられる。径は10～13.2cm。(７)は飛禽鏡、銹化著しく４/５が残存する。径は9.3cm、厚さは最小で0.03cm、最大で0.43cmを測る。表面は外縁近くでわずかに反りをもつ。裏面は斜縁から内に鋸歯文75前後、櫛歯文150前後、素文帯を有し、内区文様は４乳を配し半肉彫りにて１羽の鳥文を配す。鳥文の周囲には渦巻文、飛雲文あるいは蕨手文とも考えられる文様も確認できるが明確ではない。斜縁は比較的そそり立ち、三角縁に近い感もある。鳥文は上下に頭と尾、左右に平行に羽を広げて鈕を胴体とした形状を成す。頭は左、尾先は右向きである。足は左右下方につき出すが足先は欠失する。全体的に文様は不鮮明である。これらの遺物の出土状態から推測すると、高杯(１・２)は何れも土器転用枕と考えられるが、(１)から南東小口までが106cm、(２)から北西小口までが98cmと共に短く、仮に各々に小口側を足元に埋葬したと考えると(１)と(２)の空間が無駄になり、２遺体を埋葬したとは考え難い。(１)、(２)間が166cmであることを考慮すれば、(１)と(２)の何れかが転用枕と考えることが妥当である。土器以外の副葬品の格から推測すると、銅鏡(７)、管玉(４～６)を副葬する側の(２)が転用枕と考えることもできる。

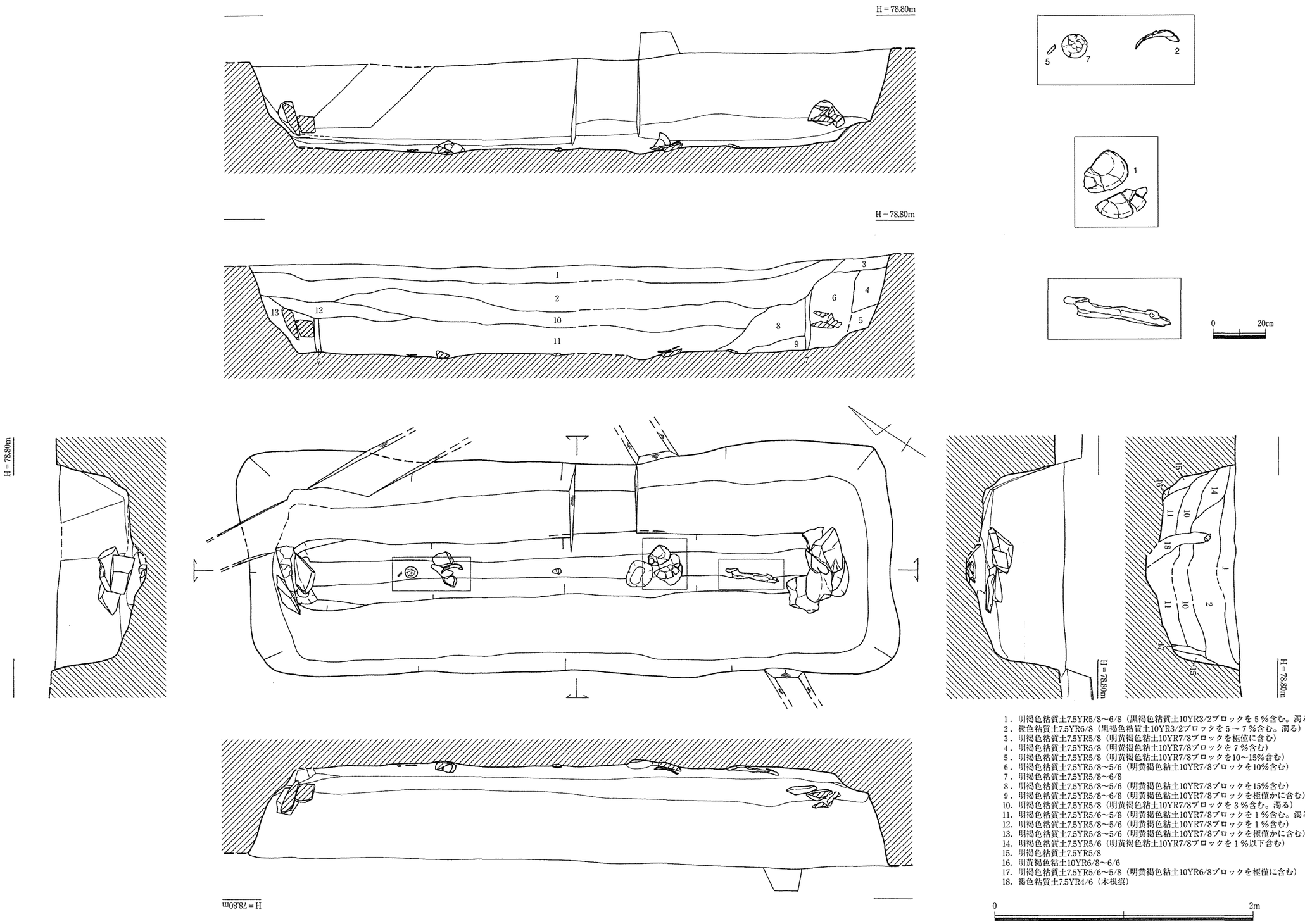






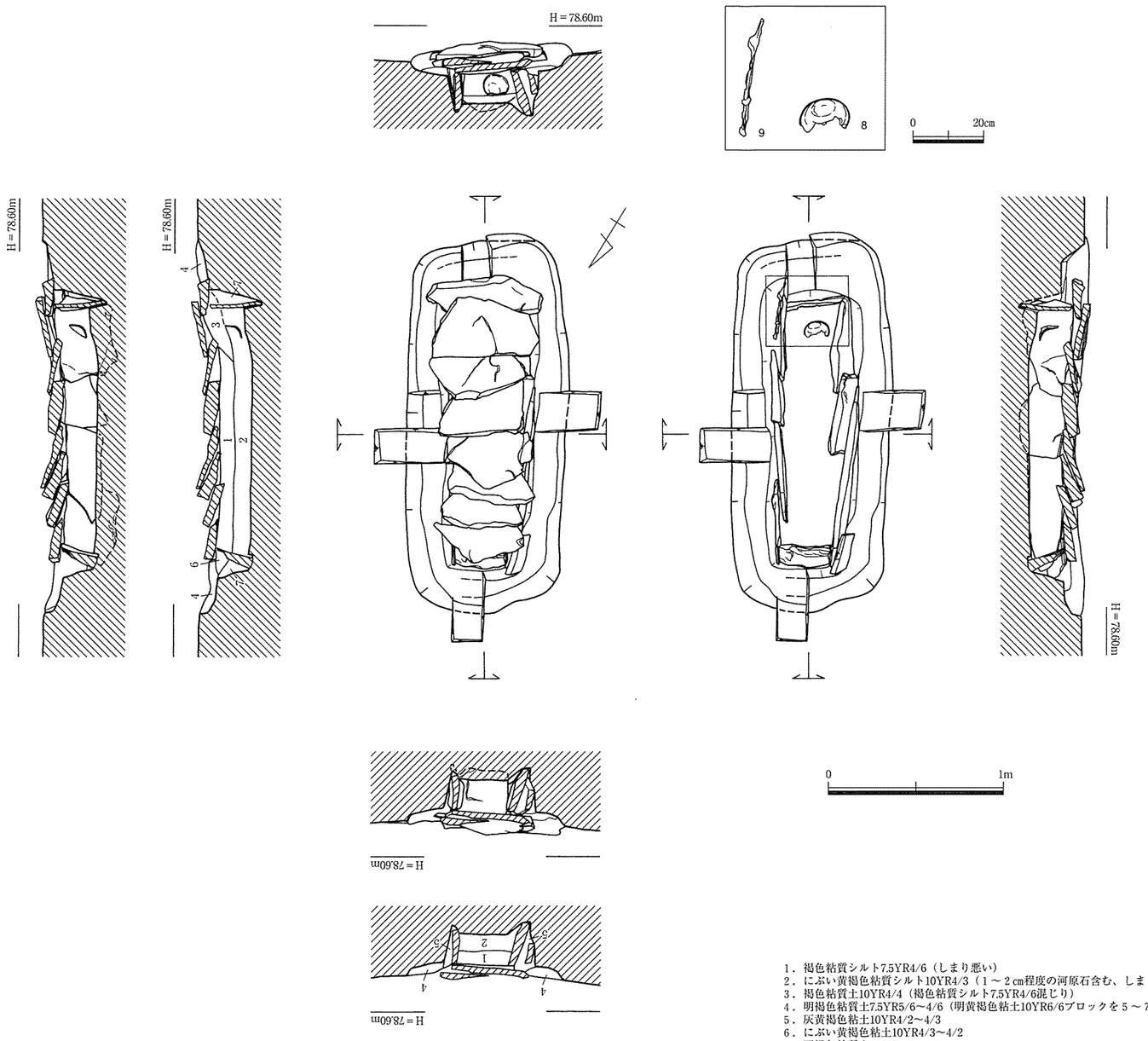
1．腐植土
2．褐色粘質土7.5YR4/6（濁る）
3．明褐色粘質土10YR5/6～5/8（濁る）
4．黄褐色粘質土10YR5/6
5．明褐色粘質土7.5YR5/6～5/8（若干砂質）
6．黄褐色粘質土10YR5/8
7．明褐色砂質粘質土7.5YR5/8（１cm以下の地山岩を１％含む）
8．明褐色砂質粘質土7.5YR5/6～4/6（１cm以下の地山岩を５％含む）
9．褐色粘質土10YR4/4～4/6（濁る）
10．（暗）褐色粘質土10YR3/4～4/4
11．明黄褐色粘質土10YR6/6
12．褐色粘質土10YR4/6～5/6（暗褐色粘質土10YR3/4が混じる）
13．橙色粘質土7.5YR6/6～5/6（２cm以下の地山岩を10%含む）
14．暗褐色粘質土10YR3/4（黒色を帯びる。若干砂質）
15．褐色粘質土10YR4/6～5/6（若干砂質）
16．褐色粘質土7.5YR4/6～5/6
17．褐色粘質土7.5YR4/6～5/6（明黄褐色粘質土10YR6/6ブロックを３％含む）
18．明褐色粘質土7.5YR5/8
19．明褐色粘質土7.5YR4/8（若干砂質）
20．褐色粘質土7.5YR4/4～4/6（やや黒色を帯びる。濁る）
21．暗褐色粘質土10YR3/4（褐色粘質土7.5YR4/4～4/6ブロックを５％含む）
22．黒褐色粘質土10YR3/2～2/2（褐色粘質土7.5YR4/4～4/6ブロックを20%含む）
23．褐色粘質土10YR4/4～3/4（黒色を帯びる。濁る）
24．褐色粘質土7.5YR4/6（灰色を帯びる。濁る）
25．明赤褐色粘質土5YR5/8（若干濁る）
26．褐色粘質土7.5YR4/6（濁る）
27．明褐色粘質土7.5YR5/6～5/8（若干濁る）
28．暗褐色粘質土10YR3/3～4/3（やや黒色を帯びる）
29．にぶい褐色粘質土7.5YR5/4～4/4（赤褐色粘質土5YR4/6が混じる。濁る）
30．褐色粘質土7.5YR4/4～4/6（赤褐色粘質土5YR4/6が混じる。濁る）
31．にぶい褐色粘質土7.5YR5/4（やや黒色を帯びる。濁る）
32．暗褐色粘質土10YR3/3（黒色を帯びる。赤褐色粘質土5YR4/6が混じる）
33．明赤褐色粘質土5YR5/6
34．暗褐色粘質土7.5YR3/4（やや黒色を帯びる。明赤褐色粘質土5YR5/6が混じる）
35．暗褐色粘質土10YR3/3（黒色を帯びる。褐色粘質土7.5YR4/6が混じる）
36．暗褐色粘質土7.5YR3/3（褐色を帯びる。濁る）
37．暗褐色粘質土10YR3/4（褐色粘質土7.5YR4/6が混じる）
38．黒褐色粘質土7.5YR3/1（暗褐色粘質土10YR3/4が混じる）
39．暗褐色粘質土10YR3/4（濁る）
40．褐色粘質土7.5YR4/6（やや黒色を帯びる）
41．にぶい褐色粘質土7.5YR5/4（やや黒色を帯びる。濁る）
42．暗褐色粘質土10YR3/2
43．橙色粘質土7.5YR6/6（黒褐色粘質土7.5YR3/1ブロックを７％含む）
44．暗褐色粘質土10YR3/4（褐色を帯びる）
45．暗褐色粘質土10YR3/4（黒色を帯びる。橙色粘質土7.5YR5/6ブロックを10%含む）
46．橙色粘質土7.5YR5/6（暗褐色粘質土10YR3/4ブロックを７％含む）
47．褐色粘質土10YR4/4～4/6
48．暗褐色粘質土10YR3/4（黄褐色粘質土10YR5/6ブロックを３％含む）
49．明褐色粘（質）土7.5YR5/6～6/6
50．橙色粘土7.5YR6/8
51．褐色粘質土7.5YR4/4（黒色を帯びる。濁る）
52．褐色粘質土7.5YR4/6（やや赤色を帯びる）
53．褐色粘質土7.5YR4/6（やや灰色を帯びる。濁る）
54．暗褐色粘質土7.5YR3/4～4/4（やや黒色を帯びる。濁る）
55．黒褐色粘質土7.5YR3/2～3/3（橙色を帯びる。明褐色粘質土7.5YR5/6ブロックを５％含む）
56．明褐色粘質土7.5YR5/6～5/8（１～３cm大の地山岩を５～７％含む）
57．橙色砂混粘質土7.5YR4/6～4/4（１cm以下の地山岩を１％含む。濁る）
58．明暗褐色粘質土5YR5/6（0.5～８cm大の地山岩を７％含む）

第14図　６号墳墳丘遺存図・断面図・周溝内遺物出土状況



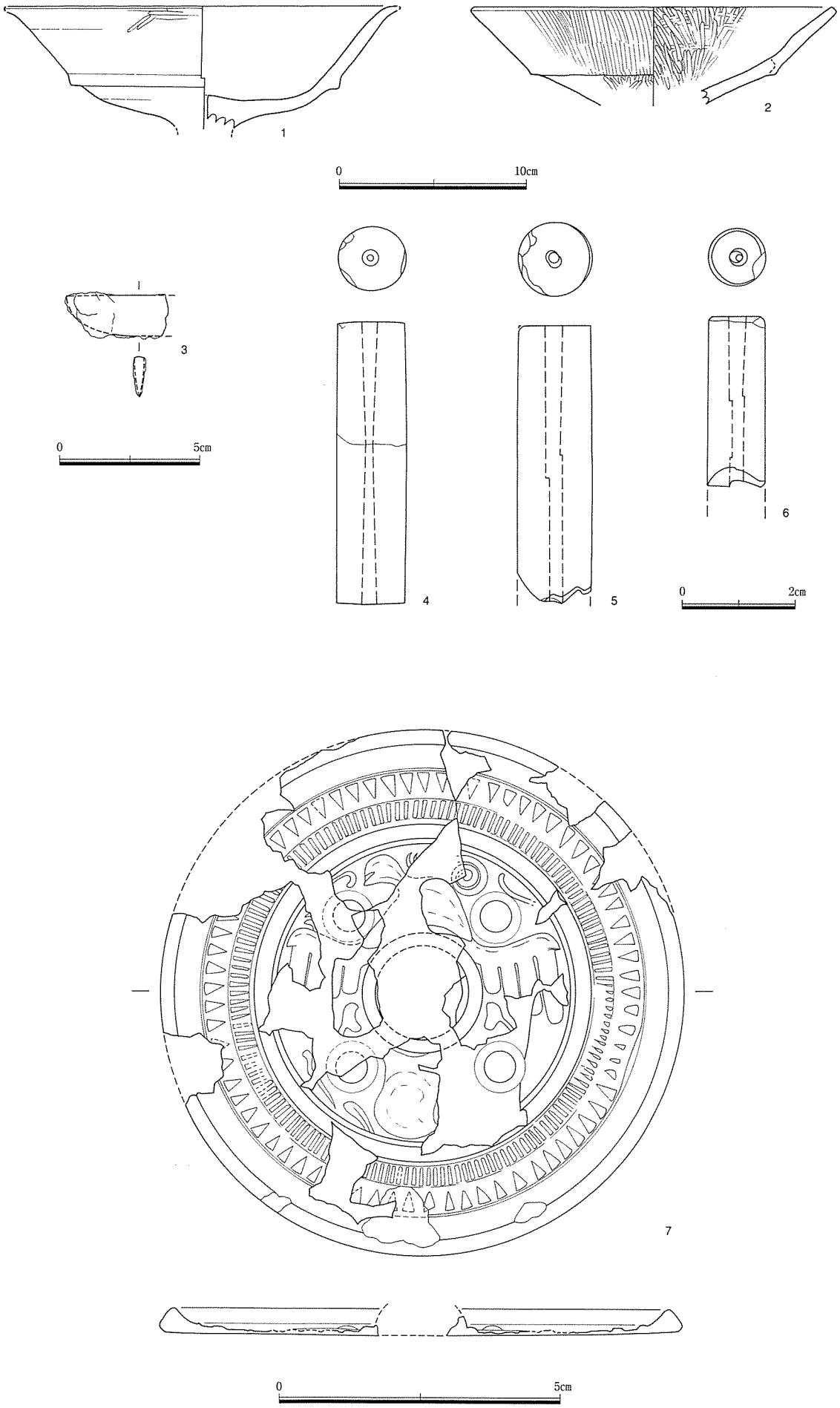
1．明褐色粘質土7.5YR5/8～6/8（黒褐色粘質土10YR3/2ブロックを５％含む。渇る）
2．橙色粘質土7.5YR6/8（黒褐色粘質土10YR3/2ブロックを５～７％含む。渇る）
3．明褐色粘質土7.5YR5/8（明黄褐色粘土10YR7/8ブロックを極僅に含む）
4．明褐色粘質土7.5YR5/8（明黄褐色粘土10YR7/8ブロックを７％含む）
5．明褐色粘質土7.5YR5/8（明黄褐色粘土10YR7/8ブロックを10～15％含む）
6．明褐色粘質土7.5YR5/8～5/6（明黄褐色粘土10YR7/8ブロックを10％含む）
7．明褐色粘質土7.5YR5/8～6/8
8．明褐色粘質土7.5YR5/8～5/6（明黄褐色粘土10YR7/8ブロックを15％含む）
9．明褐色粘質土7.5YR5/8～6/8（明黄褐色粘土10YR7/8ブロックを極僅かに含む）
10．明褐色粘質土7.5YR5/8（明黄褐色粘土10YR7/8ブロックを３％含む。渇る）
11．明褐色粘質土7.5YR5/6～5/8（明黄褐色粘土10YR7/8ブロックを１％含む。渇る）
12．明褐色粘質土7.5YR5/8～5/6（明黄褐色粘土10YR7/8ブロックを１％含む）
13．明褐色粘質土7.5YR5/8～5/6（明黄褐色粘土10YR7/8ブロックを極僅かに含む）
14．明褐色粘質土7.5YR5/6（明黄褐色粘土10YR7/8ブロックを１％以下含む）
15．明褐色粘質土7.5YR5/8
16．明黄褐色粘土10YR6/8～6/6
17．明褐色粘質土7.5YR5/6～5/8（明黄褐色粘土10YR6/8ブロックを極僅に含む）
18．褐色粘質土7.5YR4/6（木根痕）

第15図　６号墳第１主体部実測図

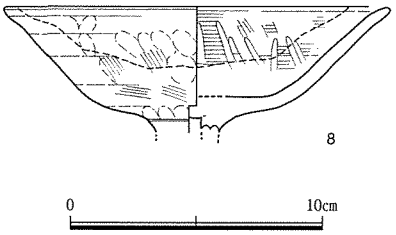


1．褐色粘質シルト7.5YR4/6（しまり悪い）
2．にぶい黄褐色粘質シルト10YR4/3（1～2㎝程度の河原石含む、しまり悪い）
3．褐色粘質土10YR4/4（褐色粘質シルト7.5YR4/6混じり）
4．明褐色粘質土7.5YR5/6～4/6（明黄褐色粘土10YR6/6ブロックを5～7％含む）
5．灰黄褐色粘土10YR4/2～4/3
6．にぶい黄褐色粘土10YR4/3～4/2
7．明褐色粘質土7.5YR5/8～5/6

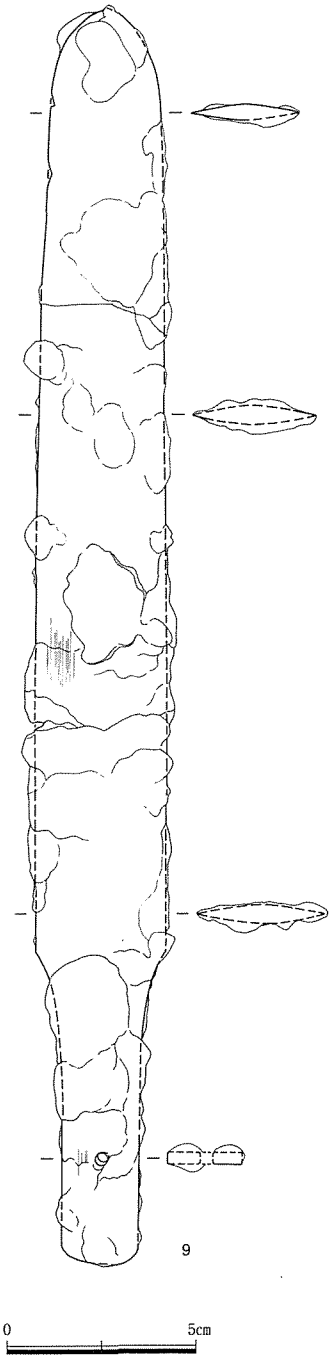
第16図　6号墳第2主体部実測図



第17図　6号墳第1主体部出土遺物実測図



第18図　6号墳第2主体部出土遺物実測図(1)

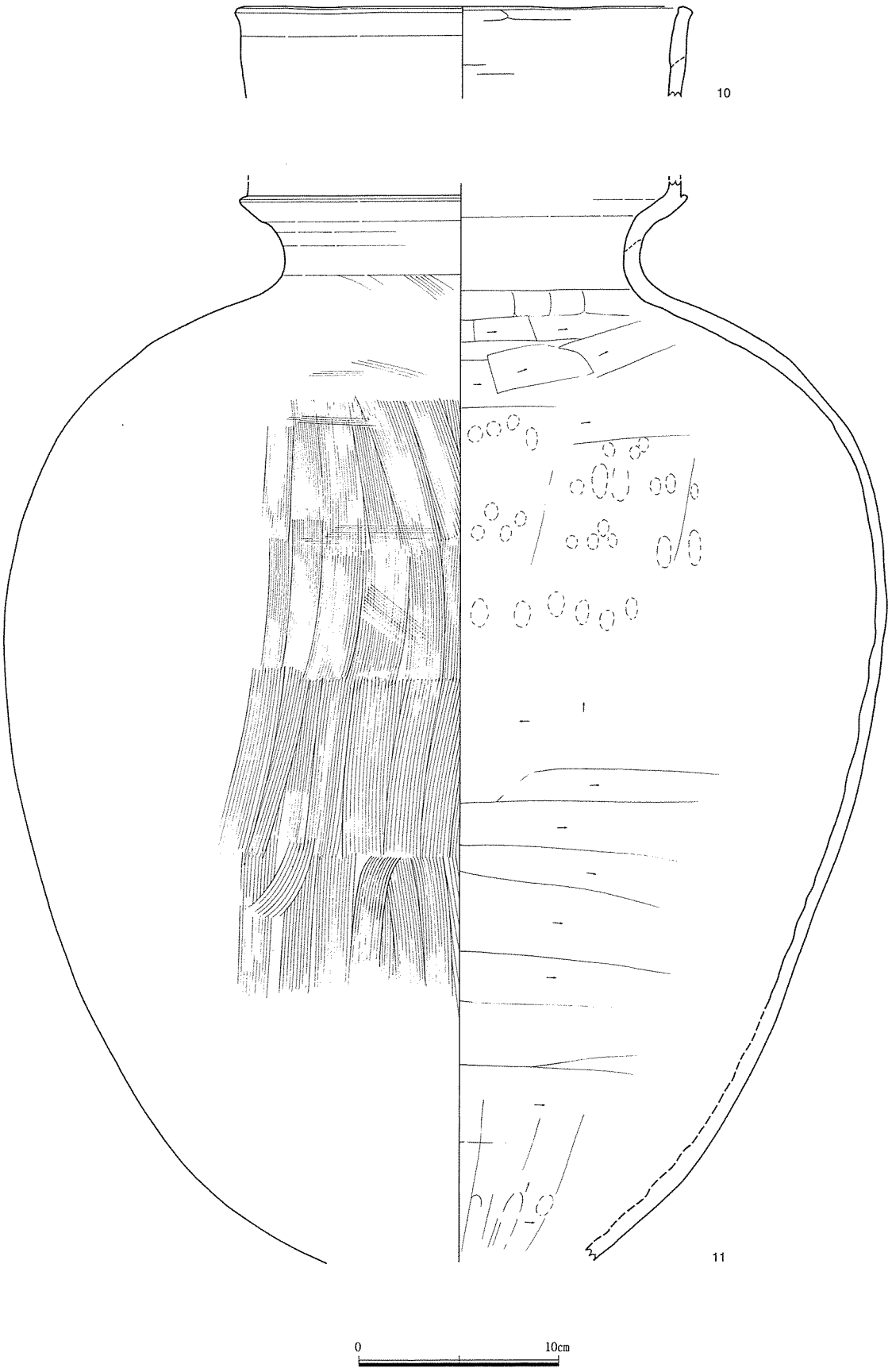


第19図　6号墳第2主体部出土遺物実測図(2)

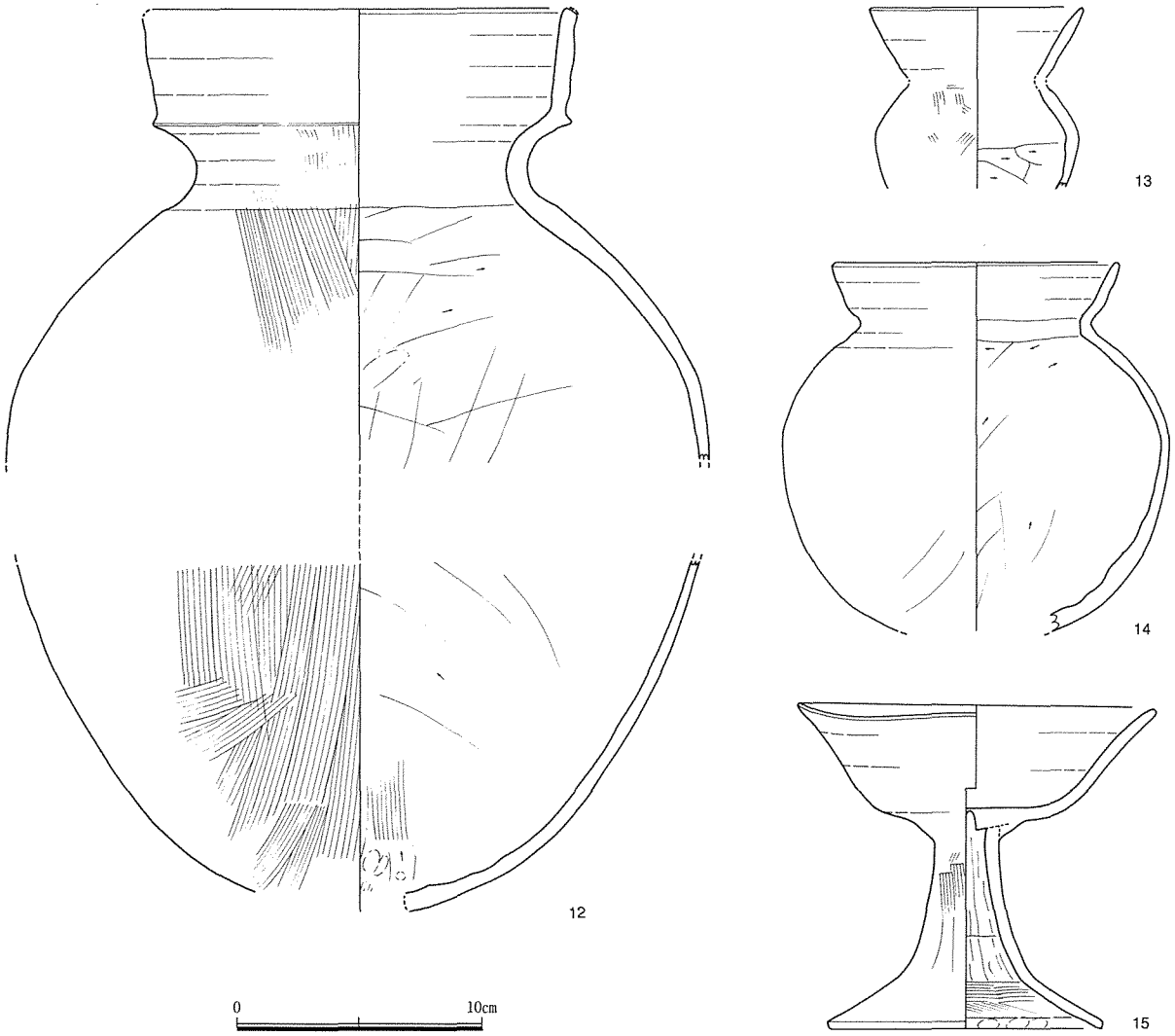
第2主体部は墳頂部中央のやや南東側に位置する。埋葬形態は加工された板石を組み合わせた箱式石棺である。墓壙は表土除去後の墳丘面から掘り込まれている。墓壙の平面は隅丸長方形を呈し、主軸はN-32°-Wにとる。長さ2.16m、幅0.93mを測る。いわゆる二段墓壙であり、検出面から17cmの深さでさらに石棺の外法より若干大きく掘り込まれている。墓壙底には小口および側板を固定するための幅6～13cmの溝を掘り込む。溝の深さは均一ではなく4～13cmを測る。これらの溝は墓壙下部の壁面直下に掘り込まれており、石棺はこの墓壙内にほぼいっぱいに組み込まれている。箱式石棺の規模は内法で長さ1.41m、幅は0.28～0.33m、深さは19cmを測る。微妙ではあるが、頭位に相当する南東側が深く、幅も増している。石棺の構造は両小口に1枚の長方形の板石をほぼ垂直に立て、両側板にはそれぞれ4枚の板石のうち2枚で両小口を押さえるが、南東(頭位)側から外側へと組み合わせ、最後の4枚目にて北西(足位)側の小口を押さえる。側板は何れもやや内傾しており、断面形「ハ」字状である。墓壙壁と石棺の間の僅かな隙間には、裏込め土によって固定している。埋土下位には1～2cm程度の小石が混ざっており、本来棺床に小石を敷設していたものと考えられる。蓋石は8枚を使用し、まず南東(頭位)側に1枚を据え、その後北西(足位)側から順に頭位へと重ねている。南東側(頭位)に向かうに従って蓋石は大きめの石材を使用している。小口や側板と蓋石を密着させるための加工は施していない。蓋石の隙間は灰黄褐色粘土で目張りをする。蓋石上面の墓壙上部には厚さ数cm程度の封土が置かれている。石棺内にはほぼ一杯に土が流入しており、蓋石までの空間はなかった。遺物は棺内の南東側小口付近から土師器の高杯(8)、棺外の南東側小口、北東側側板沿いから鉄剣(9)が出土している。(8)は高杯の杯部で2/3が遺存する。口縁部は直線的に開く。口径は15.1cmを測る。土器転用枕と考えられ、床面に安定させる為、意図的に1/3を打ち欠いているものと考えられる。(9)は剣身部24.8cm、茎部8.2cmを測り、全長は33.0cmとなる。切先を棺の内側、北西に向けている。墓壙の軸とほぼ平行。墓壙床面上から出土する。全体的に銹化する。中心軸の鎬は不明瞭、斜角両関である。茎部目釘孔に目釘が遺存する。

その他の出土遺物

南西側の主に周溝底から散在的に土師器(10～15)が出土している。(10)は口縁部。ほぼ直立して立ち上がり、端部で外反する。(11)は壷。口縁部を欠失するが複合口縁であることが確認できる。体部はほ



第20図　6号墳周溝内出土遺物実測図（1）



第21図　6号墳周溝内出土遺物実測図（2）

ぼ完存。残存する器高は50cm以上でその大きさから土器棺として使用されていた可能性もある。(12)も壷。複合口縁を有し、口縁部は直立気味に立ち上がり僅かに端部を欠く。上半と下半の接点は無いが同一固体と考えられる。底部を欠き、穿孔した可能性も考えられる。(13)は小型壷。復元口径8.7cm、口縁部は直線的に外傾、端部は細る。(14)は甕。口縁部外傾し端部で丸く納める。体部は球形を呈する。(15)は高杯。口縁部を1/4欠く、口径14.4cm、底径11.1cm、器高13.5cmを測る。口縁部は外傾する。脚部は下半で大きく「ハ」字状に開き裾端面を有する。

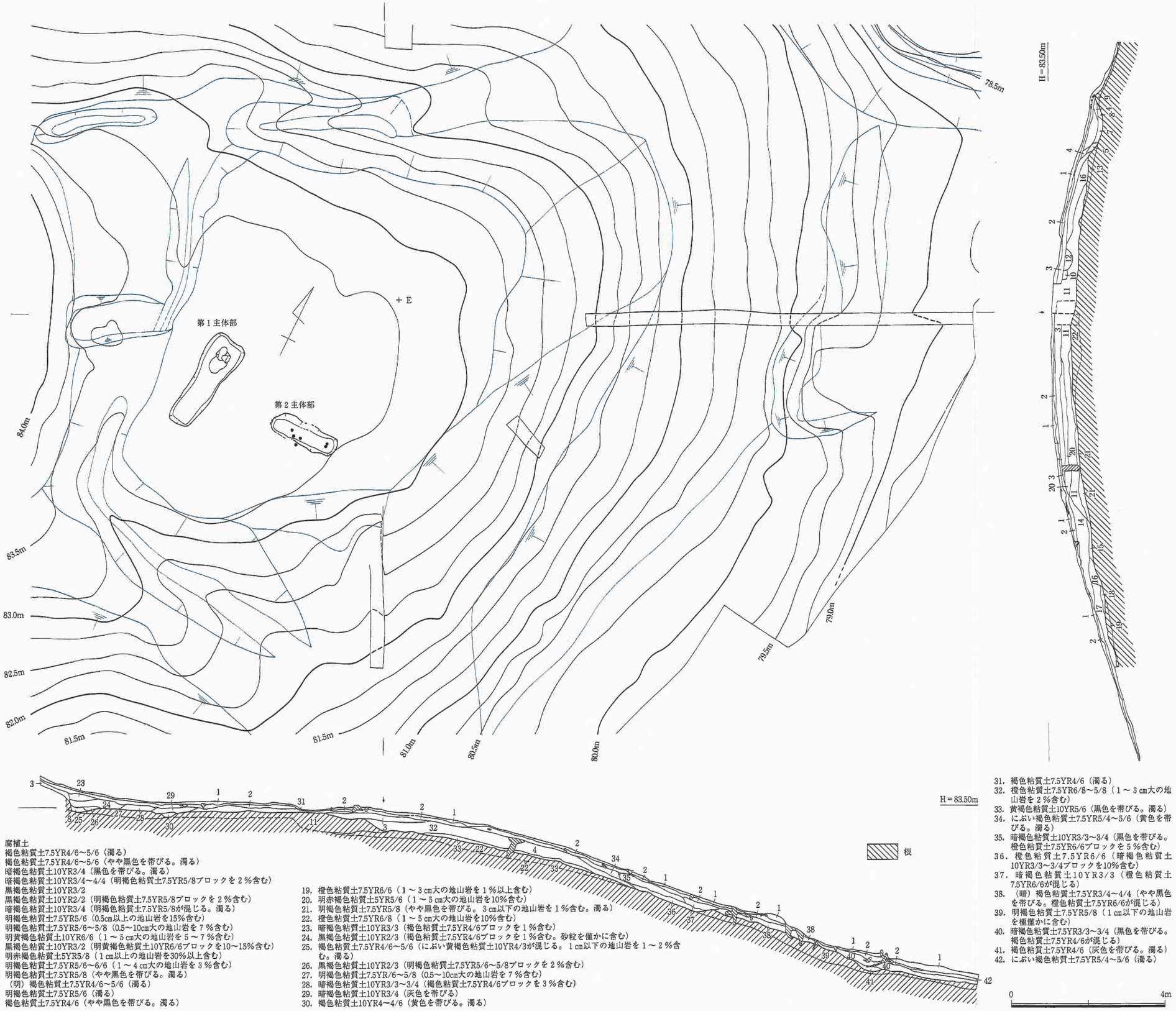
3．篠田7号墳（第22～27図、図版2・17～19・34）

位置と現状

7号墳は、調査地中央の北東寄り、標高83.5m付近に位置し、小尾根が北西に派生する分岐点である6号墳の上方に立地する。南西側の上方には5号墳が隣接する。往年の踏査においては、6号墳と同様、古墳とは認識されておらず、舌状の平坦面として捉えられている。調査前の観察においても6号墳と同様、平坦面は確認することができたが、城跡関連遺構や古墳か否かは明確ではなかった。

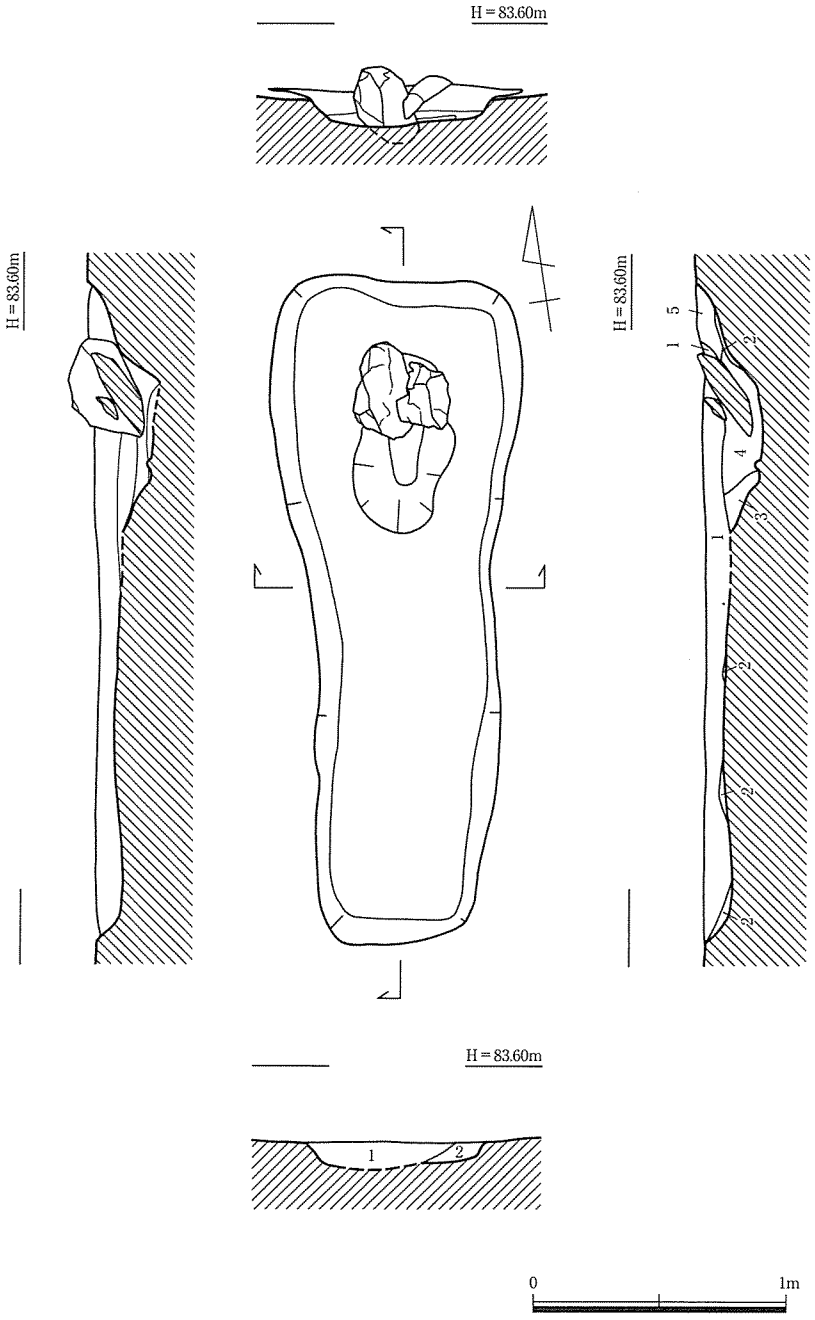
墳丘

厚さ18～27cmの表土を除去した段階で墳丘面を検出した。南東隅から東側辺にかけて流失している。墳丘の築造は、西側の尾根上位に「冂」状の溝を切削して成形し、さらに盛土して形を整えている。盛土



1．腐植土
2．褐色粘質土7.5YR4/6～5/6（濁る）
3．褐色粘質土7.5YR4/6～5/6（やや黒色を帯びる。濁る）
4．暗褐色粘質土10YR3/4（黒色を帯びる。濁る）
5．暗褐色粘質土10YR3/4～4/4（明褐色粘質土7.5YR5/8ブロックを２％含む）
6．黒褐色粘質土10YR3/2
7．黒褐色粘質土10YR2/2（明褐色粘質土7.5YR5/8ブロックを２％含む）
8．暗褐色粘質土10YR3/4（明褐色粘質土7.5YR5/8が混じる。濁る）
9．明褐色粘質土7.5YR5/6（0.5cm以上の地山岩を15％含む）
10．明褐色粘質土7.5YR5/6～5/8（0.5～10cm大の地山岩を７％含む）
11．明黄褐色粘質土10YR6/6（１～５cm大の地山岩を５～７％含む）
12．黒褐色粘質土10YR3/2（明黄褐色粘質土10YR6/6ブロックを10～15％含む）
13．明赤褐色粘質土5YR5/8（１cm以上の地山岩を30％以上含む）
14．明褐色粘質土7.5YR5/6～6/6（１～４cm大の地山岩を３％含む）
15．明褐色粘質土7.5YR5/8（やや黒色を帯びる。濁る）
16．（明）褐色粘質土7.5YR4/6～5/6（濁る）
17．明褐色粘質土7.5YR5/6（濁る）
18．褐色粘質土7.5YR4/6（やや黒色を帯びる。濁る）
19．橙色粘質土7.5YR6/6（１～３cm大の地山岩を１％以上含む）
20．明赤褐色粘質土5YR5/6（１～５cm大の地山岩を10％含む）
21．明褐色粘質土7.5YR5/8（やや黒色を帯びる。３cm以下の地山岩を１％含む。濁る）
22．橙色粘質土7.5YR6/8（１～５cm大の地山岩を10％含む）
23．暗褐色粘質土10YR3/3（褐色粘質土7.5YR4/6ブロックを１％含む）
24．黒褐色粘質土10YR2/3（褐色粘質土7.5YR4/6ブロックを１％含む。砂粒を僅かに含む）
25．褐色粘質土7.5YR4/6～5/6（にぶい黄褐色粘質土10YR4/3が混じる。１cm以下の地山岩を１～２％含む。濁る）
26．黒褐色粘質土10YR2/3（明褐色粘質土7.5YR5/6～5/8ブロックを２％含む）
27．明褐色粘質土7.5YR/6～5/8（0.5～10cm大の地山岩を７％含む）
28．暗褐色粘質土10YR3/3～3/4（褐色粘質土7.5YR4/6ブロックを３％含む）
29．暗褐色粘質土10YR3/4（灰色を帯びる）
30．褐色粘質土10YR4～4/6（黄色を帯びる。濁る）
31．褐色粘質土7.5YR4/6（濁る）
32．橙色粘質土7.5YR6/8～5/8（１～３cm大の地山岩を２％含む）
33．黄褐色粘質土10YR5/6（黒色を帯びる。濁る）
34．にぶい褐色粘質土7.5YR5/4～5/6（黄色を帯びる。濁る）
35．暗褐色粘質土10YR3/3～3/4（黒色を帯びる。橙色粘質土7.5YR6/6ブロックを５％含む）
36．橙色粘質土7.5YR6/6（暗褐色粘質土10YR3/3～3/4ブロックを10％含む）
37．暗褐色粘質土10YR3/3（橙色粘質土7.5YR6/6が混じる）
38．（暗）褐色粘質土7.5YR3/4～4/4（やや黒色を帯びる。橙色粘質土7.5YR6/6が混じる）
39．明褐色粘質土7.5YR5/8（１cm以下の地山岩を極僅かに含む）
40．暗褐色粘質土7.5YR3/3～3/4（黒色を帯びる。褐色粘質土7.5YR4/6が混じる）
41．褐色粘質土7.5YR4/6（灰色を帯びる。濁る）
42．にぶい褐色粘質土7.5YR5/4～5/6（濁る）

第22図　７号墳墳丘遺存図・断面図

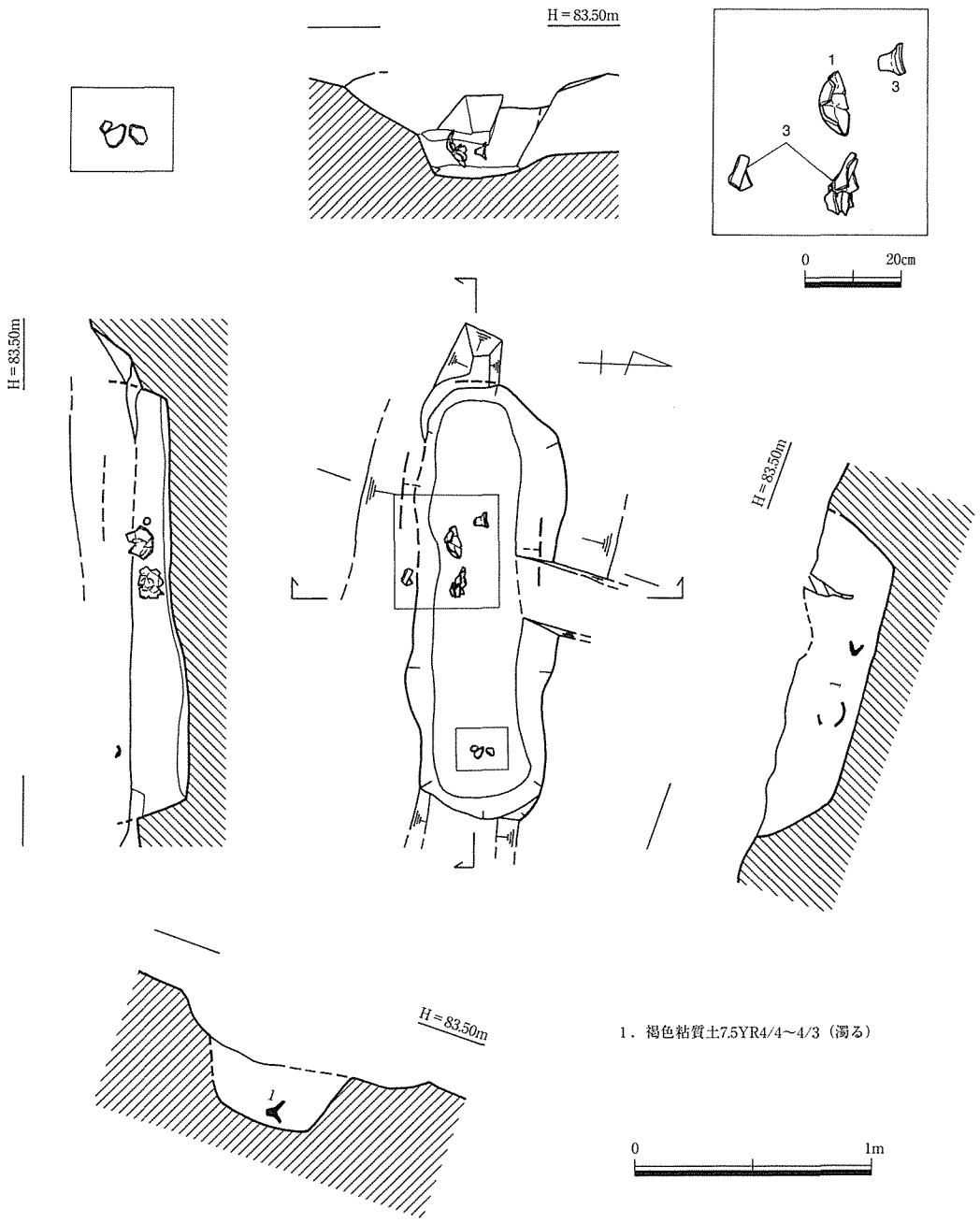


1．褐色粘質土10YR4/6～4/4（黄褐色粘質土10YR5/6ブロックを僅に含む。3㎝以下の軟岩を1％含む）
2．橙色粘質土7.5YR6/8～5/8（2㎝以下の軟岩を1％含む）
3．黄褐色粘質土10YR5/6（暗褐色粘質土10YR3/3～4/3ブロックを5％含む。2㎝以下の軟岩1片を含む）
4．褐色粘質土10YR4/6～5/6（暗褐色粘質土10YR3/3～3/4ブロックを3％・0.5㎝～1㎝大の軟岩を1％含む）
5．黄褐色粘質土10YR5/8（褐色粘質土10YR4/4～4/5が僅に混じる）

第23図　7号墳第1主体部実測図

は最大で51㎝、尾根上位側は流失したものとみられ、8～16㎝と劣悪である。表土除去後の墳頂部の標高は83.34m、墳丘の遺存高は東墳裾から墳頂部まで最大2.19mを測る。周溝は尾根の上方西側と北側、南側に比較的直線的に認められる。隣接する5号墳の墳裾とは重複しない。規模は北側で幅164㎝、深さ58㎝を測る。墳丘規模は一辺が西～東方向で7.7～8.1m、北～南方向で9.3～9.8mを測り、主軸をN-83°-Eにとる。尾根筋が短い方形墳と考えられる。

当古墳との直接的な関係の有無は不明であるが、南東墳裾外に石棺材と考えられる割石が数片、散乱していた。



第24図　7号墳第2主体部実測図

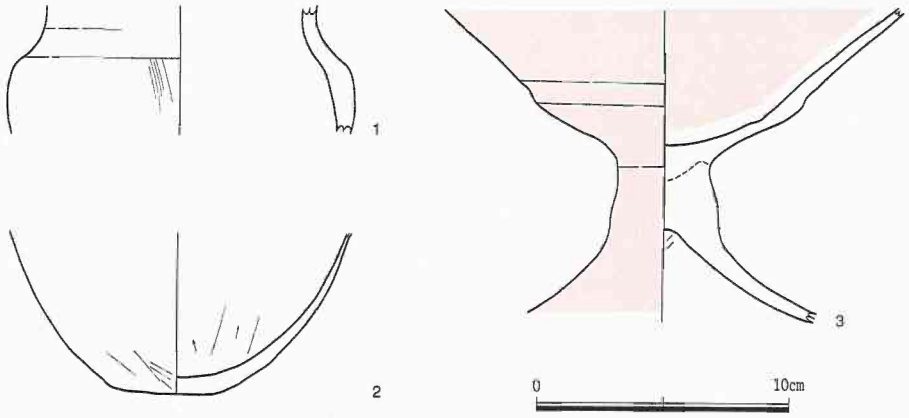
埋葬施設

埋葬施設は墳頂部に2基を検出した。

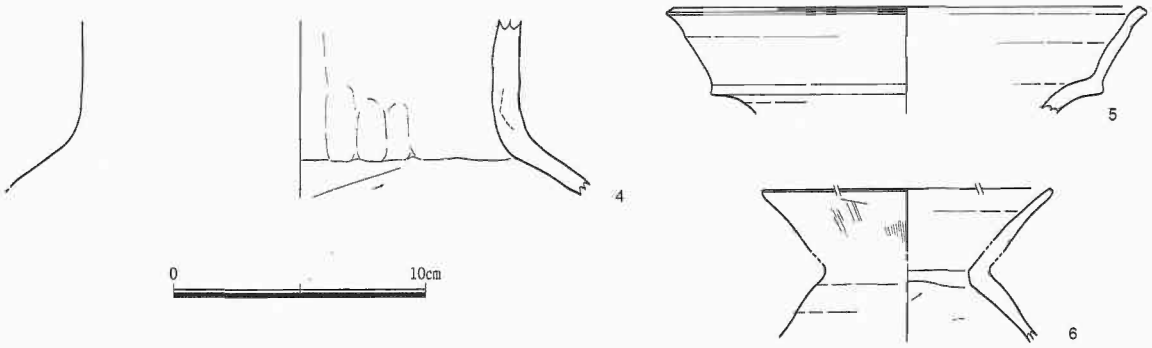
主体部

第1主体部は墳頂部中央のやや尾根側に位置し、主軸はN-8°-Eにとる。平面は不整長方形を呈し、長さ2.64m、幅は南側で0.61m、北側で1.00m、深さ11cmを測る。遺存状態は悪く、土層断面の観察においても木棺痕跡などは確認することはできなかった。墓壙の中央部北側に長さ24cmと38cm、2個の石の比較的平滑な面を「V」字状に組み枕としている。枕の安定の為、墓壙底より長さ67cm、幅37cm、深さ15cmの平面形、楕円形状の穴を掘り込み、石を据えている。石の大きさも揃っておらず、丁寧な加工も見られない粗雑な石枕である。墓壙内からは遺物は出土しなかった。

第2主体部は墳頂部中央のやや尾根側に位置し、主軸はN-88°-Eにとる。平面は不整楕円形を呈し、



第25図　7号墳第2主体部出土遺物実測図



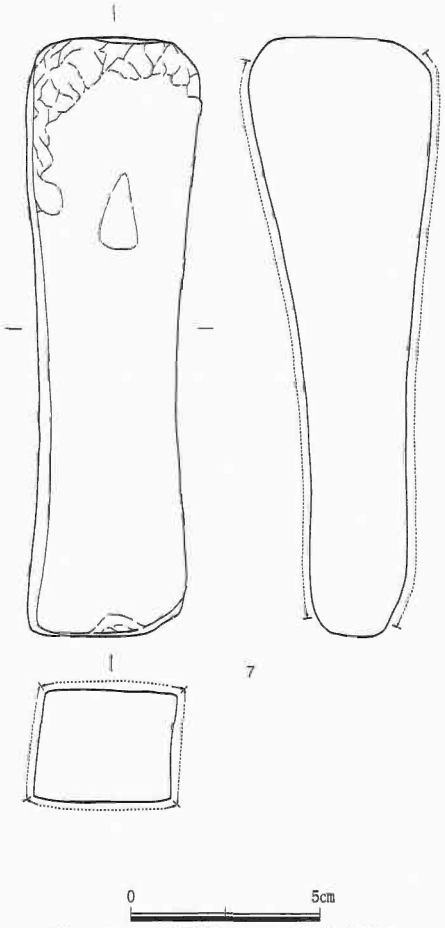
第26図　7号墳周溝内出土遺物実測図

長さ1.84m、幅は0.67m、深さ26cmを測る。第1主体部の主軸とは80°東に振る。断面観察からは木棺痕跡などは確認できなかった。遺物は中央やや西寄りの埋土下位から土師器(1～3)が出土している。(1)は壷の頸肩部、全体的に風化剥落不明瞭。(2)は壷の底部、平底である。(3)は高杯。有段の杯部、口縁部は外傾して上方に延びる。脚下半部は「ハ」の字状に開く。赤彩を施す。また、東端部から細片が出土するが図化できなかった。

その他の出土遺物

西側の裾部、周溝内から土師器(4～6)、砥石(7)が出土している。(4)は壷、甕類の頸肩部、(5)は口縁部で複合口縁を有する。口縁部外傾、端部で外反気味。推定口径18.6cm。(6)は鼓形器台、推定口径11.3cm。(7)は長さ15.7cmを測り、4面に使用痕が認められる。

また、当古墳に直接関係無いものと考えられるが、東側墳裾外、北西墳裾外の表土中より須恵器の細片が出土している。



第27図　7号墳出土遺物実測図

4．篠田８号墳（第28・29図、図版20・34）

位置と現状

８号墳は、６号墳を分岐点として北西へ派生する舌状の小尾根上の標高73.0m付近に位置する。６号墳とは約35mの距離を測る。往年の踏査においては、古墳などの遺構は確認されていない。調査前の観察では、尾根上位側を区切る溝状の凹みを辛うじて確認するものの尾根は痩せており、特に西半はほとんど流失している様相を呈していた。

墳丘

厚さ３～12cmの腐植土を除去した段階で尾根上位側に一部、墳丘面を検出した。西側は大きく崩落、流失し、腐植土直下で地山が確認された。墳丘の築造は、南側の尾根上位に直線の溝を切削して切り離し、区画している。現状では顕著な盛土は確認できなかった。盛土と考えられる層位の厚さは最大でも６cm程度である。東裾、西裾は地山を切削して整形するが北裾は明確ではない。表土除去後の墳頂部の標高は73.1m、墳丘の遺存高は西裾から墳頂部まで最大2.23mを測る。周溝は尾根の上方のみに認められ、規模は、最大幅305cm、深さ98cmを測る。墳丘規模は東西方向10.40mを測り、主軸をN-28°-Wにとる。一辺11m程度の方形墳と考えられる。

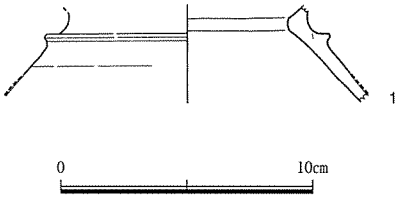
埋葬施設

埋葬施設は検出できなかった。流失したものと考えられる。

その他の出土遺物

南側周溝内より土師器の器台（１）が出土している。

5．篠田９号墳（第30～34図、図版２・21・22・35）



第28図　８号墳周溝内出土遺物実測図

位置と現状

９号墳は、調査地中央の標高85.3m付近に位置し、上方である南西側に10号墳、下方である北東側に５号墳が隣接する。往年の踏査においては古墳などの存在は確認されていない。調査前の観察においては、若干の周溝状の凹み、墳丘の高まりを確認することができたが、墳頂部と南裾部には盛土の流失、若しくは後世の削平が考えられた。

墳丘

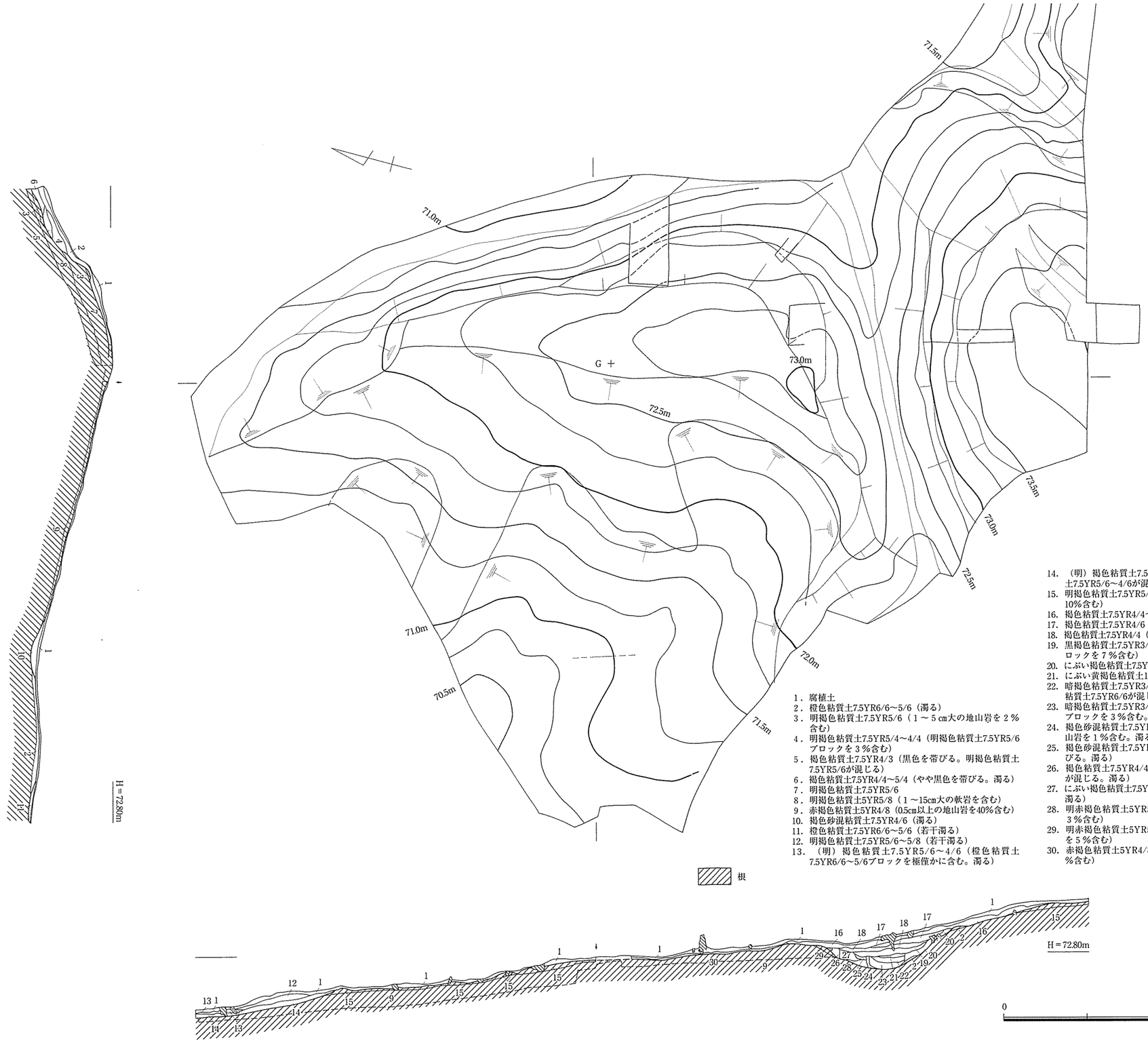
厚さ８～18cmの表土を除去した段階で墳丘面を検出した。南東側は崩落、流失している。墳丘の築造は、西側の尾根上位に本来「冂」状の溝を切削して成形し、さらに若干盛土して形を整えている。盛土は最大で29cmを測る。表土除去後の墳頂部の標高は85.26m、墳丘の遺存高は北西裾から墳頂部まで最大0.70mを測る。周溝は尾根上方の南西側と北西側に直線的に認められ、両者は直交する。隣接する尾根上位の10号墳の墳裾僅かに切り、下位の５号墳には北東裾を僅かに切られる。周溝の規模は南西側で幅174cm、深さ66cm、北西側で幅72cm、深さ36cmを測る。墳丘残存規模は南西辺7.1m、北西辺6.5mを測り、主軸をN-63°-Eにとる。一辺７m前後の方形墳と考えられる。

埋葬施設

埋葬施設は墳頂部に１基を検出した。

主体部

主体部は墳頂部中央のやや南東側に位置する。墓壙は表土除去後の墳丘面から掘り込まれている。いわゆる二段墓壙であり、埋葬形態は平面と横断面の観察から組み合わせ式の木棺直葬と考えられる。墓壙の平面は長方形を呈し、主軸はN-24°-Wにとる。長さ2.74m、幅1.31m、深さ43cmを測る。検出面から16～27cmの深さで木棺痕跡を検出した。断面の観察などから木棺の規模を推定すると、長さ2.56m、



1．腐植土
2．橙色粘質土7.5YR6/6～5/6（濁る）
3．明褐色粘質土7.5YR5/6（1～5㎝大の地山岩を2％含む）
4．明褐色粘質土7.5YR5/4～4/4（明褐色粘質土7.5YR5/6ブロックを3％含む）
5．褐色粘質土7.5YR4/3（黒色を帯びる。明褐色粘質土7.5YR5/6が混じる）
6．褐色粘質土7.5YR4/4～5/4（やや黒色を帯びる。濁る）
7．明褐色粘質土7.5YR5/6
8．明褐色粘質土5YR5/8（1～15㎝大の軟岩を含む）
9．赤褐色粘質土5YR4/8（0.5㎝以上の地山岩を40％含む）
10．褐色砂混粘質土7.5YR4/6（濁る）
11．橙色粘質土7.5YR6/6～5/6（若干濁る）
12．明褐色粘質土7.5YR5/6～5/8（若干濁る）
13．（明）褐色粘質土7.5YR5/6～4/6（橙色粘質土7.5YR6/6～5/6ブロックを極僅かに含む。濁る）
14．（明）褐色粘質土7.5YR5/6～4/6（明褐色粘質土7.5YR5/6～4/6が混じる）
15．明褐色粘質土7.5YR5/8（1～10㎝大の地山岩を10％含む）
16．褐色粘質土7.5YR4/4～4/6
17．褐色粘質土7.5YR4/6（濁る）
18．褐色粘質土7.5YR4/4（やや黒色を帯びる。濁る）
19．黒褐色粘質土7.5YR3/2（褐色粘質土7.5YR4/4ブロックを7％含む）
20．にぶい褐色粘質土7.5YR5/4（やや黒色を帯びる）
21．にぶい黄褐色粘質土10YR5/4（濁る）
22．暗褐色粘質土7.5YR3/3（黒色を帯びる。明褐色粘質土7.5YR6/6が混じる。濁る）
23．暗褐色粘質土7.5YR3/4（明褐色粘質土7.5YR5/8ブロックを3％含む。濁る）
24．褐色砂混粘質土7.5YR4/4～4/6（1㎝以下の地山岩を1％含む。濁る）
25．褐色砂混粘質土7.5YR4/4～5/4（やや黒色を帯びる。濁る）
26．褐色粘質土7.5YR4/4（明赤褐色粘質土5YR5/6が混じる。濁る）
27．にぶい褐色粘質土7.5YR5/4（やや黒色を帯びる。濁る）
28．明赤褐色粘質土5YR5/6（1㎝以下の地山岩を3％含む）
29．明赤褐色粘質土5YR5/6（1～10㎝大の地山岩を5％含む）
30．赤褐色粘質土5YR4/8（1㎝以上の地山岩を15％含む）

根

第29図　8号墳墳丘遺存図・断面図

1．腐植土
2．褐色粘質土10YR4/4（明褐色粘質土7.5YR5/8 ブロックを３～５％含む。砂粒を僅かに含む。渇る）
3．褐色粘質土10YR4/4～4/3（黄色を帯びる）
4．橙色粘質土7.5YR6/8（１～４cm地山岩を３～５％含む）
5．(暗)褐色砂混粘質土10YR4/4～3/4（やや黒色を帯びる。橙色粘質土7.5YR6/8が混じる）
6．暗褐色粘質土10YR3/4（黒色を帯びる。渇る）
7．暗褐色粘質土10YR3/4（0.5cm大の地山岩を極僅かに含む。渇る）
8．褐色砂混粘質土10YR4/6（黄色を帯びる）
9．褐色粘質土10YR4/4（やや黒色を帯びる。橙色粘質土7.5YR6/6ブロックを２％含む）
10．明褐色粘質土7.5YR5/8～6/8（0.5cm以上の地山岩を10％含む）
11．褐色砂混粘質土7.5YR4/4～4/6（１cm以下の地山岩を僅かに含む。渇る）
12．明黄褐色粘質土10YR6/8（やや黒(灰)色を帯びる。渇る）
13．にぶい黄褐色粘質土10YR4/3（黒色を帯びる。橙色粘質土7.5YR6/8ブロックを２％含む）
14．橙色粘質土7.5YR6/8（地山岩を５～10％含む。若干渇る）
15．暗褐色粘質土10YR3/4（黒色を帯びる。橙色粘質土7.5YR6/8ブロックを１％以下含む）
16．黒褐色粘質土10YR3/2（灰色を帯びる。１cm大の地山岩を１％以下含む）
17．にぶい黄褐色粘質土10YR4/3（黄色を帯びる。橙色粘質土7.5YR6/8ブロックを２～３％含む）
18．黒褐色粘質土10YR2/3（0.5cm大の地山岩を僅かに含む）
19．橙色粘質土10YR4/6（黒褐色粘質土10YR3/2ブロックを２％含む。１～３cm大の地山岩を僅かに含む）
20．暗褐色粘質土10YR3/3
21．暗褐色粘質土10YR3/4（橙色粘質土7.5YR6/8が混じる。１～３cm大の地山岩を２％含む。渇る）
22．褐色粘質土10YR4/6（黄褐色粘質土10YR5/8ブロックを２％含む。渇る）
23．暗褐色粘質土10YR3/3（黒色を帯びる）

第30図　９号墳墳丘遺存図・断面図

幅0.61m、深さ32cm程度の棺が埋置されていたと考えられる。調査時の所見では北西側の小口部の方が南東側より幅が広く、北西側が頭位とも考えられる。遺物は棺内北西小口寄り床面から鉇(1)が出土している。(1)は全長28.0cmを測るが側面側で「V」字状に折り曲げた状態で出土した。折り曲げた状態での長さは14.4cmを測る。鉇身部の長さは3.0cm、断面形は表面凸状、裏面凹状を呈する。鎬は不明瞭である。出土状態から頭上に副葬したものと考えられる。

その他の出土遺物

南西側周溝内より土師器(1・2)、同周溝肩部より土師器(3)が出土している。また、図化していないが北西側周溝内からも土師器細片が出土する。(1)は壷の口縁部、「く」の字状に外反気味に開く。復元口径14.6cm。(2)は壷甕類の底部。底径7.8cmを測る。平底。(3)は壷の口縁部。複合口縁を有し、口縁部は大きく外傾し端部を欠く。

6．篠田10号墳（第35・36図、図版2・23～24・35）

位置と現状

10号墳は、調査地中央のやや南西寄り、標高85.7m付近に位置し、下方の北東側に9号墳が隣接する。

西側の上方には「馬の背」状の鞍部を経て約35mの距離に11号墳が存在する。9号墳同様、往年の踏査では古墳などは確認されていない。調査前の観察では、墳丘は認められるものの尾根は痩せており、特に南半はそのほとんどが流失している様相を呈していた。

墳丘

厚さ8～18cmの表土を除去した段階で墳丘面を検出した。南東側は崩落、流失している。墳丘の築造は各墳裾を地山の切削にて成形し、さらに若干盛土して形を整えている。盛土は最大で45cmを測る。表土除去後の墳頂部の標高は85.64m、墳丘の遺存高は北西裾から墳頂部まで最大1.64mを測る。隣接する下位の9号墳には北東裾を僅かに切られる。墳丘規模は北西辺9.1m、北東辺、南西辺は残存値で6.9m、7.0mを測り、主軸をN-71°-Eにとる。一辺9m前後の方形墳と考えられる。

埋葬施設

墳頂部南半は崩落、流失している為、北半を水平に少しずつ掘り下げ、主体部検出を試みたが平面では検出することができなかった。墳丘断割り断面の観察からは主体部と考えられる層序を認めることができた。

主体部

断面の観察から推定すると、墳頂部の北西寄りに位置し、主軸はN-47°-E、長さ2.16m、幅は1.42m、深さ50cmとなる。遺物は出土していない。埋葬形態は不明である。

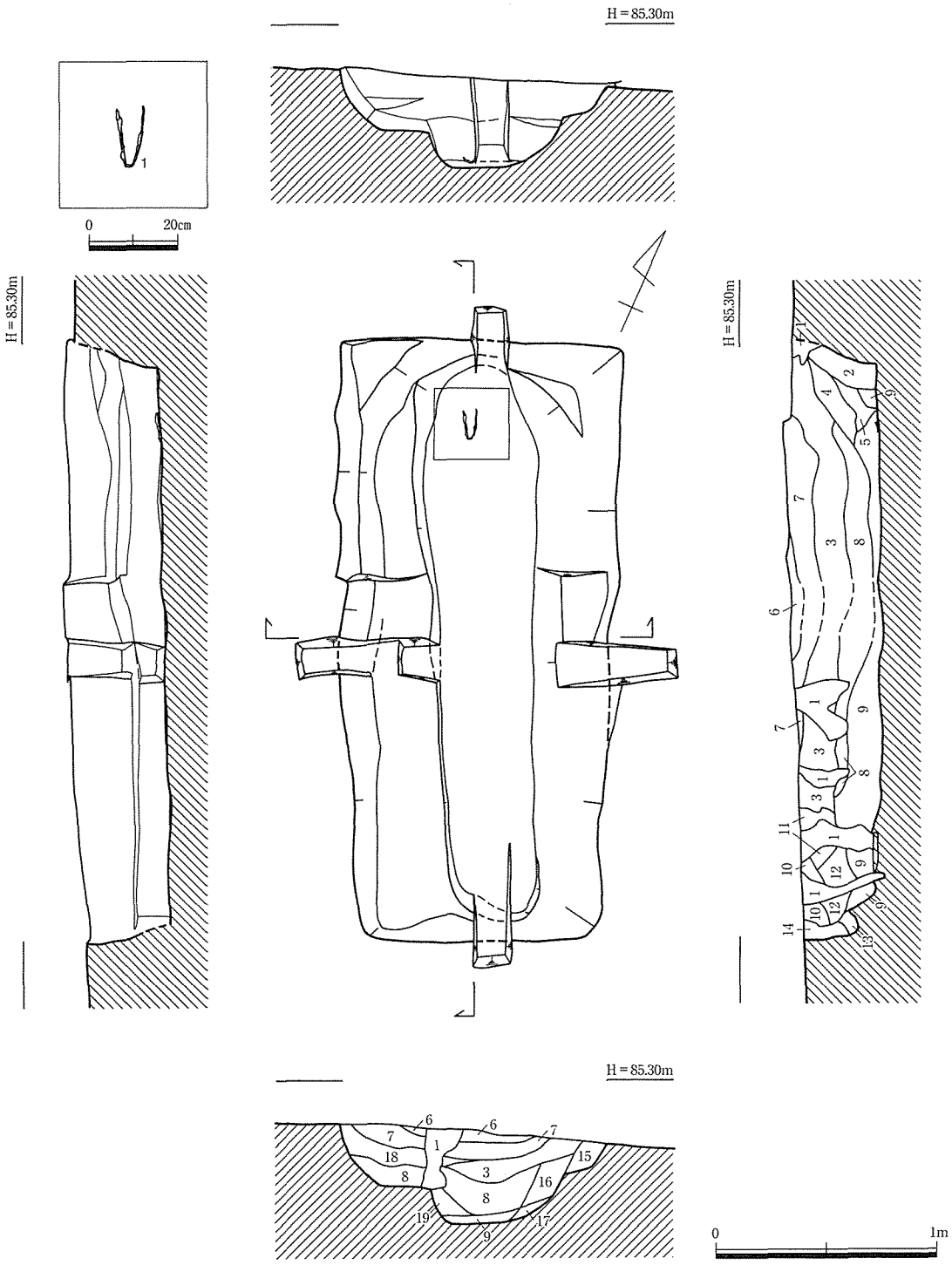
その他の出土遺物

墳裾北東隅より土師器(1)が出土するが、9号墳の墳裾北西隅にも相当し帰属は確実でない。

7．篠田11号墳（第37～43図、図版2・25～29・35・36）

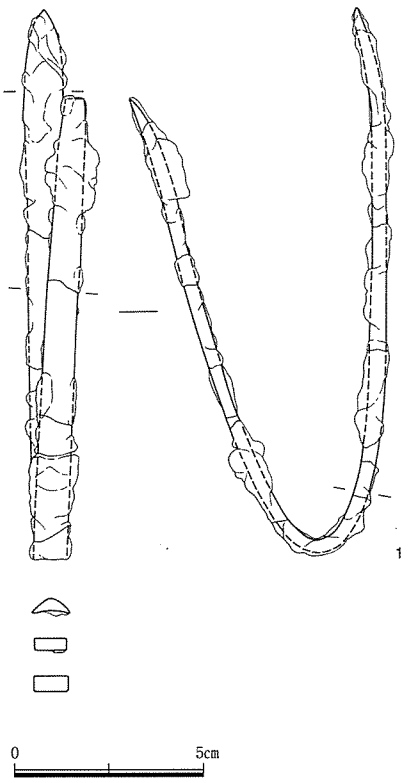
位置と現状

11号墳は、調査地の西端、標高84.6mに位置し、小尾根が北へ派生する分岐点に立地する。東側の下方、約35mには10号墳が存在する。現在、この派生する小尾根上には古墳などは確認されていない。また当古墳より上方尾根にも古墳などの顕著な遺構は確認されていない。調査前の観察では古墳の墳丘と考えられる高まりが明確に確認できた。南裾側には幅3～5m、長さ30m以上の細長い平坦面が存在しており、帯曲輪などの城跡関連遺構の可能性も考えられた。

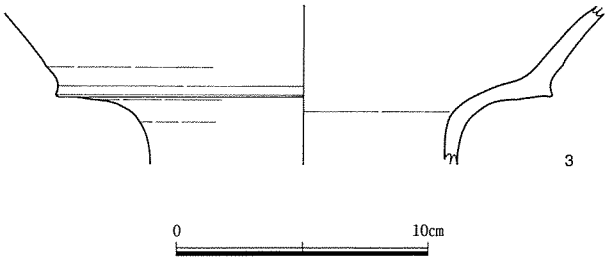


1．褐色粘質土10YR4/4～4/6（濁る。木根痕）
2．黄褐色粘質土10YR5/6（1～4cm大の軟岩を含む。若干濁る）
3．明褐色粘質土7.5YR5/8～6/8（0.5～3cm大の軟岩を3％含む。濁る）
4．明黄褐色粘質土10YR6/8（1cm大の軟岩を1％以下含む。濁る）
5．明褐色粘質土7.5YR5/8～5/6（若干濁る）
6．褐色粘質土10YR4/4
7．にぶい黄褐色粘質土10YR4/3（黒色を帯びる。1cm大の軟岩を1％含む。濁る）
8．橙色粘質土7.5YR6/8～5/8（1～4cm大の軟岩を1％含む。若干濁る）
9．明黄褐色粘質土10YR6/6（1cm大の軟岩を極僅かに含む。濁る）
10．褐色粘質土10YR4/4～4/6（濁る）
11．黄褐色粘質土10YR5/6（若干濁る）
12．黄褐色粘質土10YR5/6（濁る）
13．黄褐色粘質土10YR5/8～6/8
14．黄褐色粘質土10YR5/6～6/6
15．黄褐色粘質土10YR5/6～5/8（1～3cm大の軟岩3片を含む）
16．黄褐色粘質土10YR5/6（1～3cm大の軟岩を1％含む）
17．明褐色粘質土7.5YR5/8（1cm以下の軟岩を2％含む。濁る）
18．橙色粘質土7.5YR6/8（0.5～1.5cm大の軟岩を含む）
19．黄褐色粘質土10YR5/6～5/8（0.5～2cm大の軟岩を含む。濁る）

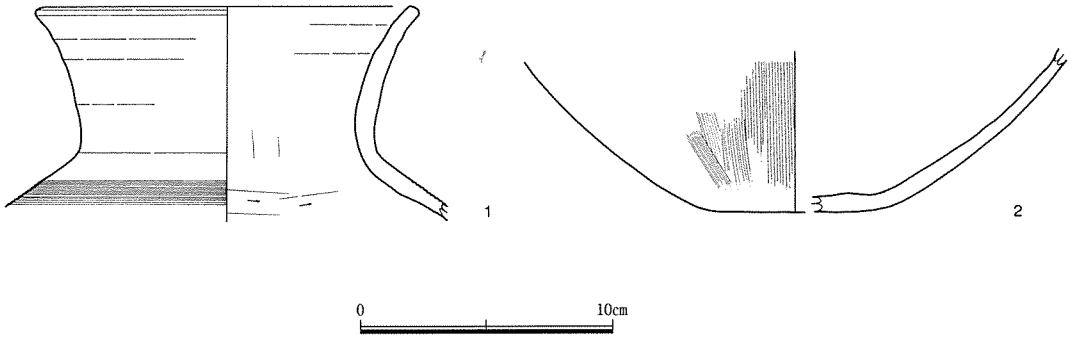
第31図　9号墳主体部実測図



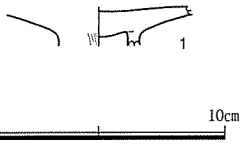
第32図　9号墳主体部出土遺物実測図



第34図　9号墳墳裾出土遺物実測図



第33図　9号墳周溝内出土遺物実測図



第35図　10号墳周溝内出土遺物
実測図

墳丘

厚さ8～15cmの表土を除去した段階で墳丘面を検出した。墳丘の築造は墳裾を切削して成形するが、南東側墳裾は尾根を切り離し区別する為、周溝状に切削する。さらに盛土して形を整えている。盛土の厚さは最大24cmを測る。表土除去後の墳頂部の標高は84.54m、墳丘の遺存高は南東墳裾から墳頂部まで最大1.72mを測る。周溝は尾根の下方に弧状に認められ、最大規模は幅129cm、深さ80cmを測る。長

さは5.64mを測り、両端は終息する。墳丘規模は北西～南東方向で径12.07m、北東～南西方向で11.15mを測り、尾根筋が僅かに長い円墳である。

埋葬施設

墳頂部より１基、南東裾より２基の埋葬施設を検出した。

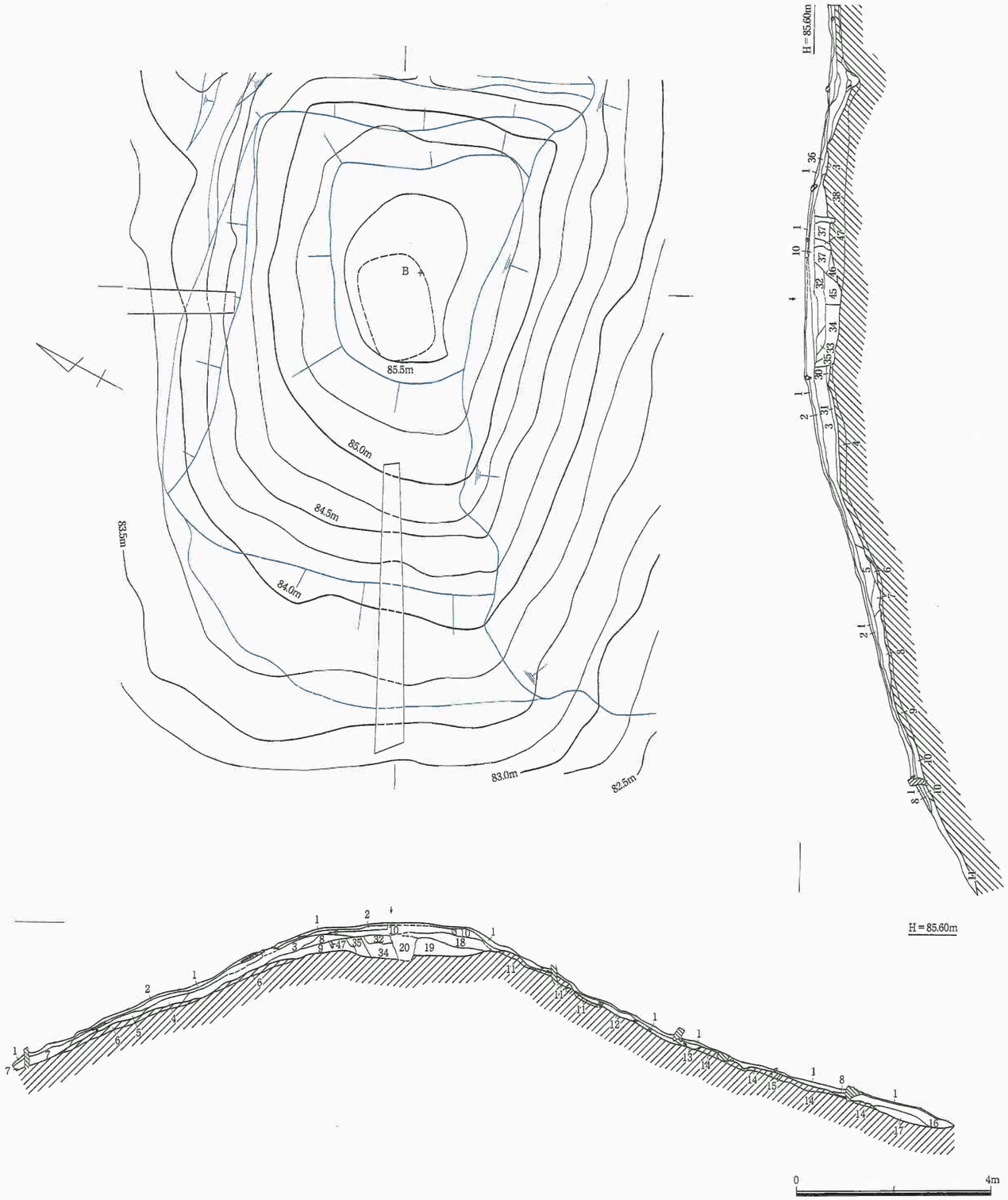
主体部

第１主体部は墳頂部中央のやや西側に位置し、主軸をN-18°-Eにとる。平面は不整長方形を呈し、長さ3.58m、幅は1.77m、深さ55cmを測る。いわゆる二段墓壙であり、検出面から約30cmの深さでさらに25cm程深く掘り込まれている。埋葬形態は平面から組み合わせ式の木棺直葬と考えられるが、断面の観察では顕著な痕跡は確認できなかった。平面などから棺規模を想定すると、長さ2.81m、幅0.84m、深さ38cm程度の棺が埋置されていたと考えられる。遺物は中央やや南西側より土師器の器台(１)、不明鉄製品(２～４)が出土している。また出土位置は不明であるが玉類(５・６)が出土している。(１)はいわゆる鼓形器台。復元口径は19.8cmとなり、受部、台部ともに直線的に開き端部で外反する。受部には意図的な打ち欠きが認められる。土器転用枕。(２～４)は鏃や刀子の茎部と考えられる。(４)には布目痕、木質痕が観察される。(５)はガラス製の小玉。長さ4.3mm、径6.0mm、重量0.199gを測る。全体的に歪である。色調は青緑色を呈する。(６)は碧玉製の管玉。一端部を欠失し、残存する長さ5.0mm、径3.0mmとなり、色調はオリーブ灰色を呈する。これらの遺物の出土状態から頭位は南東側、頭部周辺に鉄製品を副葬したものと推測できる。

第２主体部は南東裾に位置し、埋葬形態は石材を組み合わせた箱式石棺である。墓壙平面は不整楕円形を呈し、主軸をN-64°-Wにとり、第１主体部とほぼ直交する。長さ2.22m、幅は1.23m、深さ56cmを測る。石棺はこの墓壙内の下場から組み込まれている。墓壙壁と石棺の隙間には、裏込め土によって固定している。石棺の規模は内法で長さ1.53m、幅は0.39m、深さは31cmを測る。微妙ではあるが南東側が深く、幅も増していることから南東側が頭位とも考えられる。墓壙底には小口および側板を固定するための構造は顕著では無く、部分的にピット状に凹む。側板は北東側に４石、南西側に５石を使用している。全体的に粗雑で石材の組み方にも規則性は無く、雑然と並べて隙間を小石にて補填する。蓋石は最初に比較的大きさの揃った石材を７石並べるが隙間は適当な大きさの石で雑然と補填している。隙間の目張りは認められない。石棺内にはほぼ一杯に土が流入しており、蓋石までの空間はなかった。

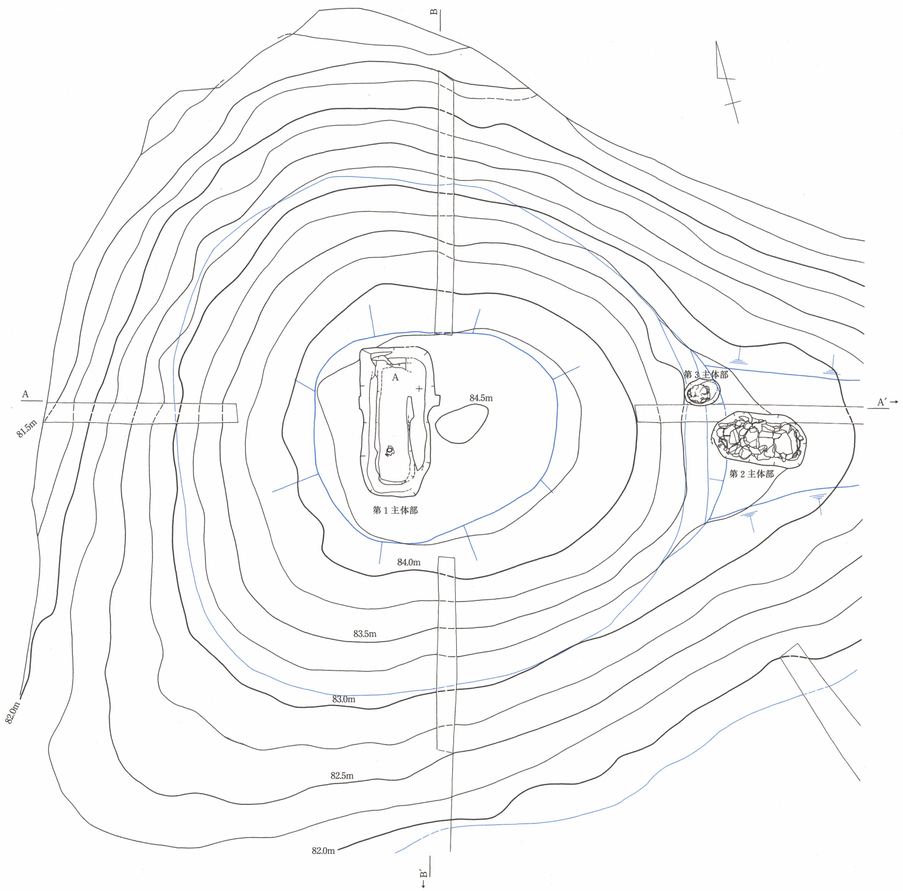
遺物は棺内の南東小口付近に15cm程度の石が３石出土している。石枕を意識したものか隙間補填石の転落かは不明である。その他の遺物は出土していない。

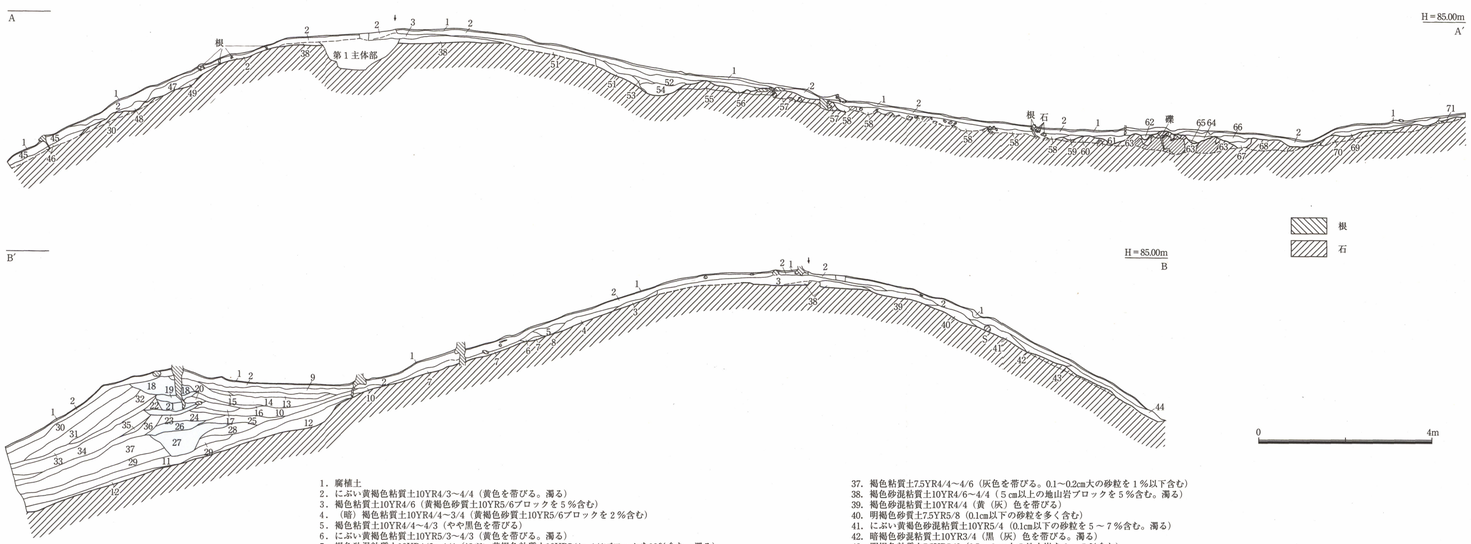
第３主体部は南東裾、第２主体部の北西に位置する。北西端の一部に撹乱を受ける。墓壙は平面が不整円形を呈し、長径1.69m、短径1.26m、深さ23cmを測る。墓壙中央には土師器の壷(７)を横位に安置した土器棺である。土器棺の主軸はN-76°-Wにとり、口を南東に向ける。風化著しく、遺存状態は悪い。本来存在していた口縁部から体部にかけての約１/２が欠失する。遺物は土師器の甕(７・８)が出土している。(７)は土器棺として転用している。復元口径28.4cm、器高48.7cmを測る。複合口縁を有し、口縁部は内傾して立ち上がり端部方向へ肥厚する。体部中上位に最大径を有する。肩部上段に櫛描平行沈線、中位に同一工具による波状文、下段にヘラ状工具による連続刺突文を綾杉状に施す。(８)は口縁部、推定口径15.2cmとなる。複合口縁を有し、口縁部は外傾する。



1．腐植土
2．褐色粘質土7.5YR4/4～4/6（濁る）
3．暗褐色粘質土7.5YR3/4（黒色を帯びる。１cm以下の地山岩を１％含む。濁る）
4．黒褐色粘質土7.5YR3/2（黒色を帯びる）
5．暗褐色粘質土7.5YR3/4（黒色を帯びる。僅かに砂粒含む）
6．明赤褐色粘質土5YR5/6～4/6（１～５cm大の地山岩を５％含む）
7．にぶい褐色粘質土7.5YR5/4（濁る）
8．褐色粘質土7.5YR4/6～5/6（0.5～３cm大の地山岩を１％含む）
9．明黄褐色粘質土10YR6/6（１～４cm大の地山岩を１～２％含む）
10．褐色粘質土7.5YR4/4～3/4（やや黒色を帯びる）
11．赤褐色粘質土5YR4/6～4/8（１～３cm大の地山岩を３～５％含む）
12．褐色粘質土7.5YR4/6～5/6（１cm以下の地山岩を５％含む。濁る）
13．褐色砂混粘質土7.5YR4/4（0.5～３cm大の地山岩を２～３％含む。濁る）
14．明褐色粘質土7.5YR5/8（0.5cm以上の地山岩を20％含む）
15．暗褐色粘質土7.5YR3/3（木根痕）
16．明褐色砂混粘質土7.5YR5/6（濁る）
17．明褐色粘質土7.5YR5/8（砂粒を含む。若干濁る）
18．赤褐色粘質土5YR4/6（１～４cm大の地山岩を３％含む。若干濁る）
19．明赤褐色粘質土5YR5/8（１～８cm大の地山岩を３～５％含む）
20．橙色粘質土7.5YR6/8（１～３cm大の地山岩を２％含む）
21．褐色粘質土7.5YR4/4（黄(灰)色を帯びる。１cm以下の地山岩を２％含む）
22．赤褐色砂混粘質土5YR4/6（１～６cm大の地山岩を３％含む）
23．暗褐色粘質土7.5YR3/3～3/4（黒色を帯びる。僅かに砂粒を含む）
24．褐色砂混粘質土7.5YR4/6（0.5cm大の地山岩を３％含む。濁る）
25．暗褐色粘質土7.5YR3/3（黒色を帯びる。褐色砂混粘質土7.5YR4/6が混じる）
26．褐色粘質土7.5YR4/3（黒色を帯びる。１～２cm大の地山岩を１％含む）
27．明褐色粘質土7.5YR5/8（１～５cm大の地山岩を10％含む）
28．褐色砂混粘質土10YR4/6（灰色を帯びる。濁る）
29．褐色砂混粘質土7.5YR4/6（１～５cm大の地山岩を１％含む。濁る）
30．明褐色粘質土7.5YR5/6～5/8（やや黄色を帯びる。0.5cm大の地山岩を３％含む）
31．褐色粘質シルト10YR4/4（やや灰色を帯びる）
32．褐色粘質土7.5YR4/3～4/2（明褐色粘質土5YR5/8ブロックを７％・0.5～５cm大の地山岩を５％含む）
33．明褐色粘質土7.5YR5/8（橙色を帯びる。0.5～３cm大の地山岩を３％含む）
34．明褐色粘質土7.5YR5/8（暗褐色粘質土10YR3/3ブロックを７％・0.5～６cm大の地山岩を５％含む。濁る）
35．明赤褐色粘質土7.5YR5/6（0.5～３cm大の地山岩を５％含む。濁る）
36．褐色粘質土10YR4/4（明褐色粘質土7.5YR5/8ブロックを３～５％含む。僅かに砂粒を含む。濁る）
37．にぶい黄褐色粘質土10YR4/3（黒色を帯びる。橙色粘質土7.5YR6/8を２％含む）
38．橙色粘質土7.5YR6/8（地山岩を５～10％含む。若干濁る）
39．暗褐色粘質土10YR3/4（黒色を帯びる。橙色粘質土7.5YR6/8ブロックを１％以下含む）
40．黒褐色粘質土10YR3/2（灰色を帯びる。１cm大の地山岩を１％以下含む）
41．にぶい黄褐色粘質土10YR4/3（黄色を帯びる。橙色粘質土7.5YR6/8ブロックを２～３％含む）
42．黒褐色粘質土10YR2/3（0.5cm大の地山岩を僅かに含む）
43．褐色粘質土10YR4/6（黒褐色粘質土10YR3/2ブロックを２％含む。１～３cm大の地山岩を僅かに含む）
44．暗褐色粘質土10YR3/3
45．明褐色粘質土7.5YR5/8（暗褐色粘質土10YR3/3ブロックを７％・0.5～６cm大の地山岩を５％含む。濁る）
46．明赤褐色粘質土5YR5/8（１～３cm大の地山岩を３％含む）
47．木根痕

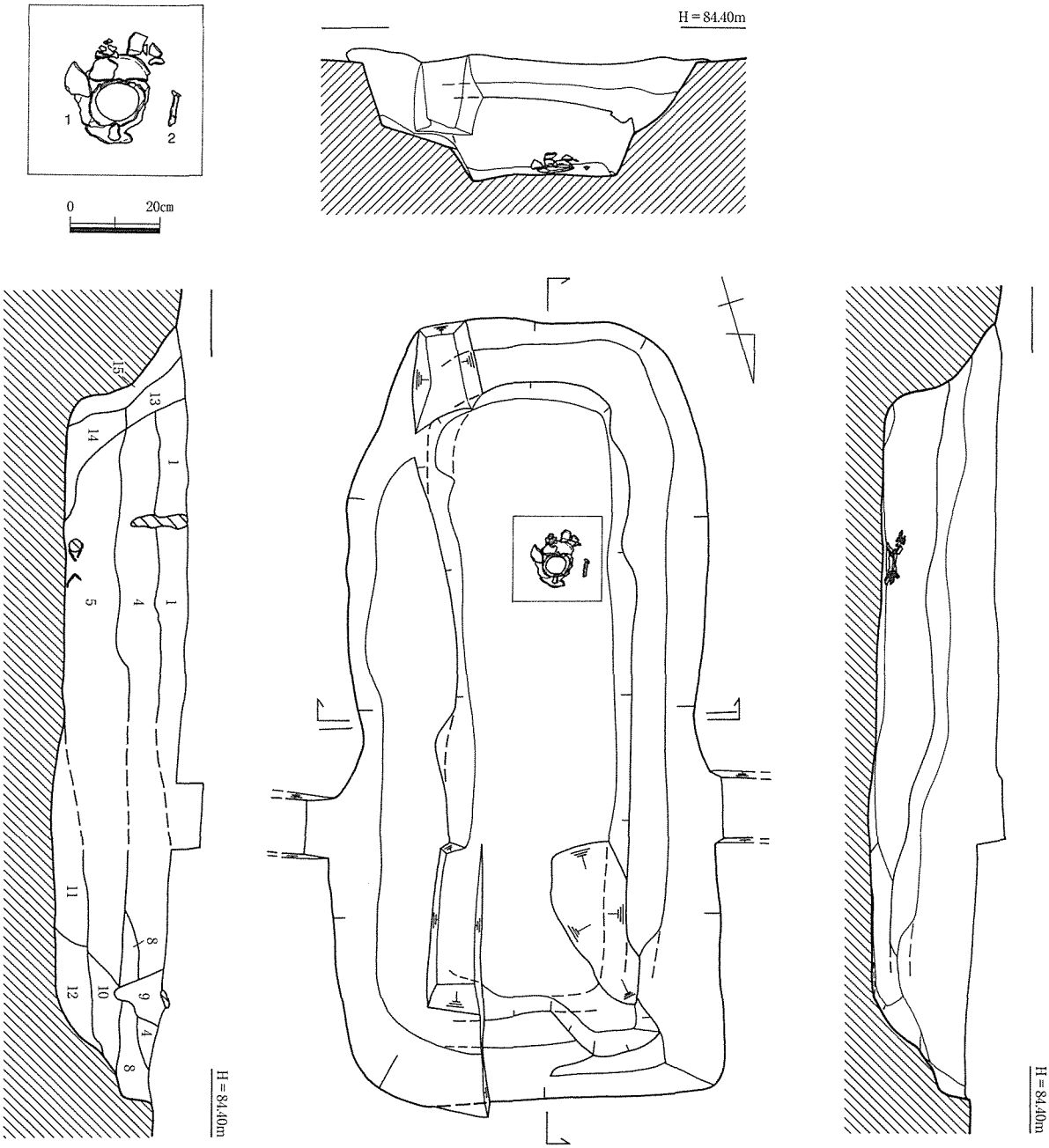
第36図　10号墳墳丘遺存図・断面図





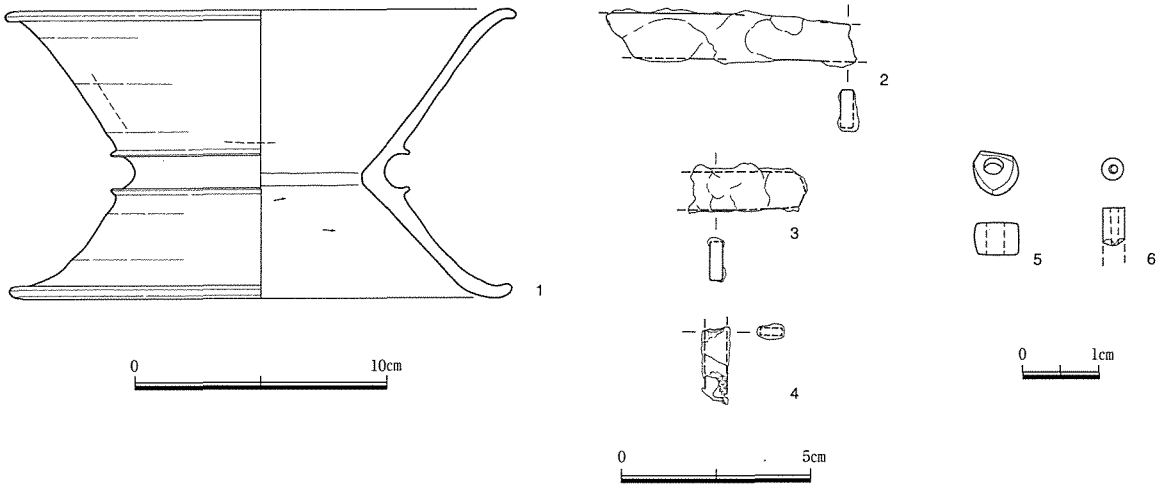
1．腐植土
2．にぶい黄褐色粘質土10YR4/3～4/4（黄色を帯びる。薄る）
3．褐色粘質土10YR4/6（黄褐色砂質土10YR5/6ブロックを５％含む）
4．（暗）褐色粘質土10YR4/4～3/4（黄褐色砂質土10YR5/6ブロックを２％含む）
5．褐色粘質土10YR4/4～4/3（やや黒色を帯びる）
6．にぶい黄褐色粘質土10YR5/3～4/3（黄色を帯びる。薄る）
7．褐色砂混粘質土10YR4/6～4/4（にぶい黄褐色粘質土10YR5/4～4/4ブロックを10%含む。薄る）
8．にぶい黄褐色粘質土10YR5/4～4/4（１cm大の地山岩を３～５％含む）
9．明赤褐色粘質土5YR5/6
10．褐色砂混粘質土10YR4/6
11．暗褐色砂混粘質土10YR3/4（黒色を帯びる）
12．明黄褐色砂混粘質土10YR6/6～6/8
13．明褐色シルト質極細砂7.5YR5/6～4/6（横帯状に細砂を含む）
14．明褐色粘質土7.5YR5/8
15．明褐色砂混シルト7.5YR5/8
16．褐色粘質土7.5YR4/4～4/6（黒色を帯びる）
17．明褐色砂混粘質土7.5YR5/6（薄る）
18．褐色砂混シルト質極細砂7.5YR4/6（0.1～0.3cm大の砂粒を25～30%含む）硬化
19．褐色真砂10YR4/6（赤色を帯びる）硬化
20．明赤褐色砂混粘質土5YR5/6（薄る）
21．褐色真砂7.5YR4/6（0.1～0.5cm大の砂粒を20%含む）硬化
22．赤褐色砂混シルト質極細砂5YR4/6（薄る）
23．にぶい赤褐色真砂5YR4/4（0.1～0.3cm大の砂粒を15%含む）硬化
24．褐色砂混シルト7.5YR4/6（黄色を帯びる）
25．褐色砂混粘質土7.5YR4/6（帯状に細砂を含む）
26．褐色真砂7.5YR4/6（0.1～0.5cm大の砂粒を20%含む）硬化
27．褐色真砂10YR4/4（黄色を帯びる。0.1～0.3cm大の砂粒を20%含む）硬化
28．にぶい褐色粘質シルト7.5YR5/6～5/4
29．にぶい褐色粘質土7.5YR5/4～4/4
30．明赤褐色砂混シルト5YR5/6（0.3cm以下の砂粒を３～５％含む）
31．赤褐色砂混シルト5YR4/6（0.3cm以下の砂粒を２％含む）
32．褐色砂混シルト7.5YR4/6（0.1～0.3cm大の砂粒を５～７％含む）
33．褐色砂混粘質土7.5YR4/4（0.1～0.3cm大の砂粒を３～５％含む）
34．褐色砂混粘質土7.5YR4/6～4/4（0.1～0.3cm大の砂粒を２％含む）
35．にぶい赤褐色砂混粘質土5YR4/4（0.1～0.2cm大の砂粒を２～３％含む）
36．暗赤褐色砂混粘質シルト5YR3/4～4/4（0.1～0.2cm大の砂粒を1%含む。３cm大の地山岩を僅かに含む。薄る）
37．褐色粘質土7.5YR4/4～4/6（灰色を帯びる。0.1～0.2cm大の砂粒を１％以下含む）
38．褐色砂混粘質土10YR4/6～4/4（５cm以上の地山岩ブロックを５％含む。薄る）
39．褐色砂混粘質土10YR4/4（黄（灰）色を帯びる）
40．明褐色砂質土7.5YR5/8（0.1cm以下の砂粒を多く含む）
41．にぶい黄褐色砂混粘質土10YR5/4（0.1cm以下の砂粒を５～７％含む。薄る）
42．暗褐色砂混粘質土10YR3/4（黒（灰）色を帯びる。薄る）
43．明褐色粘質土7.5YR5/6（0.5～３cm大の地山岩を３～５％含む）
44．褐色砂混粘質土7.5YR4/6～4/4（明褐色粘質土7.5YR5/6ブロックを２％含む。薄る）
45．褐色粘質土10YR4/6（0.1cm以下の砂粒を２％含む。薄る）
46．黄褐色砂質土10YR5/6（薄る）
47．暗褐色粘質土10YR3/4（黒（灰）色を帯びる。0.1cm大の砂粒を３％含む）
48．褐色粘質土10YR4/6（黄色を帯びる。４cm大の地山岩を含む。薄る）
49．にぶい黄褐色粘質土10YR5/4～4/4（黄褐色粘質土10YR5/6を７～10%含む）
50．黄褐色砂質土10YR5/6～6/6（0.5～３cm大の地山岩を３％含む）
51．明褐色砂混粘質土7.5YR5/6～5/8（暗褐色粘質土7.5YR3/3ブロックを７％含む）
52．黒褐色砂混粘質土7.5YR3/2（１～５cm大の地山岩を２％含む）
53．暗褐色砂混粘質土7.5YR3/4（明褐色砂混粘質土7.5YR5/6～5/8が混じる）
54．褐色砂質土7.5YR4/4～4/6（黄色を帯びる。暗褐色砂混粘質土7.5YR3/4ブロックを10%含む）
55．明褐色砂混粘質土7.5YR5/6（３～５cm大の地山岩７％含む。若干薄る）
56．暗褐色粘質土10YR3/3（１～３cm大の地山岩を３％含む。薄る）
57．明褐色砂混粘質土7.5YR5/8（３～10cm大の地山岩を15～20%含む）
58．暗褐色砂混粘質土10YR3/4（地山岩を15～20%含む）
59．黒褐色粘質土10YR3/2（砂粒を僅かに含む）
60．明褐色砂混粘質土7.5YR5/8（３～10cm大の地山岩を３％含む。若干薄る）
61．暗褐色砂混粘質土7.5YR3/3（１～３cm大の地山岩を２％含む。薄る）
62．褐色粘質土7.5YR4/4（黄色を帯びる。砂粒を僅かに含む。薄る）
63．明褐色砂混粘質土7.5YR5/8（赤褐色軟岩5YR4/6を30%含む。薄る）
64．褐色粘質土7.5YR4/4～3/4（やや黒色を帯びる。薄る）
65．暗褐色粘質土7.5YR3/4～4/4（やや黄色を帯びる。薄る）
66．にぶい黄褐色砂混粘質土10YR4/3～4/4（黄色を帯びる。薄る）
67．褐色粘質土7.5YR4/3～4/4（明褐色砂混粘質土7.5YR5/8ブロックを５％含む。薄る）
68．明褐色砂混粘質土7.5YR5/8（１～８cm地山岩７％含む。薄る）
69．（暗）褐色粘質土10YR3/4～4/4（黄色を帯びる。薄る）
70．明褐色粘質土7.5YR5/8（やや橙色を帯びる。１cm大の地山岩を３％含む。薄る）
71．にぶい褐色粘質土7.5YR5/4（砂粒を僅かに含む。薄る）

第37図　11号墳墳丘遺存図・断面図

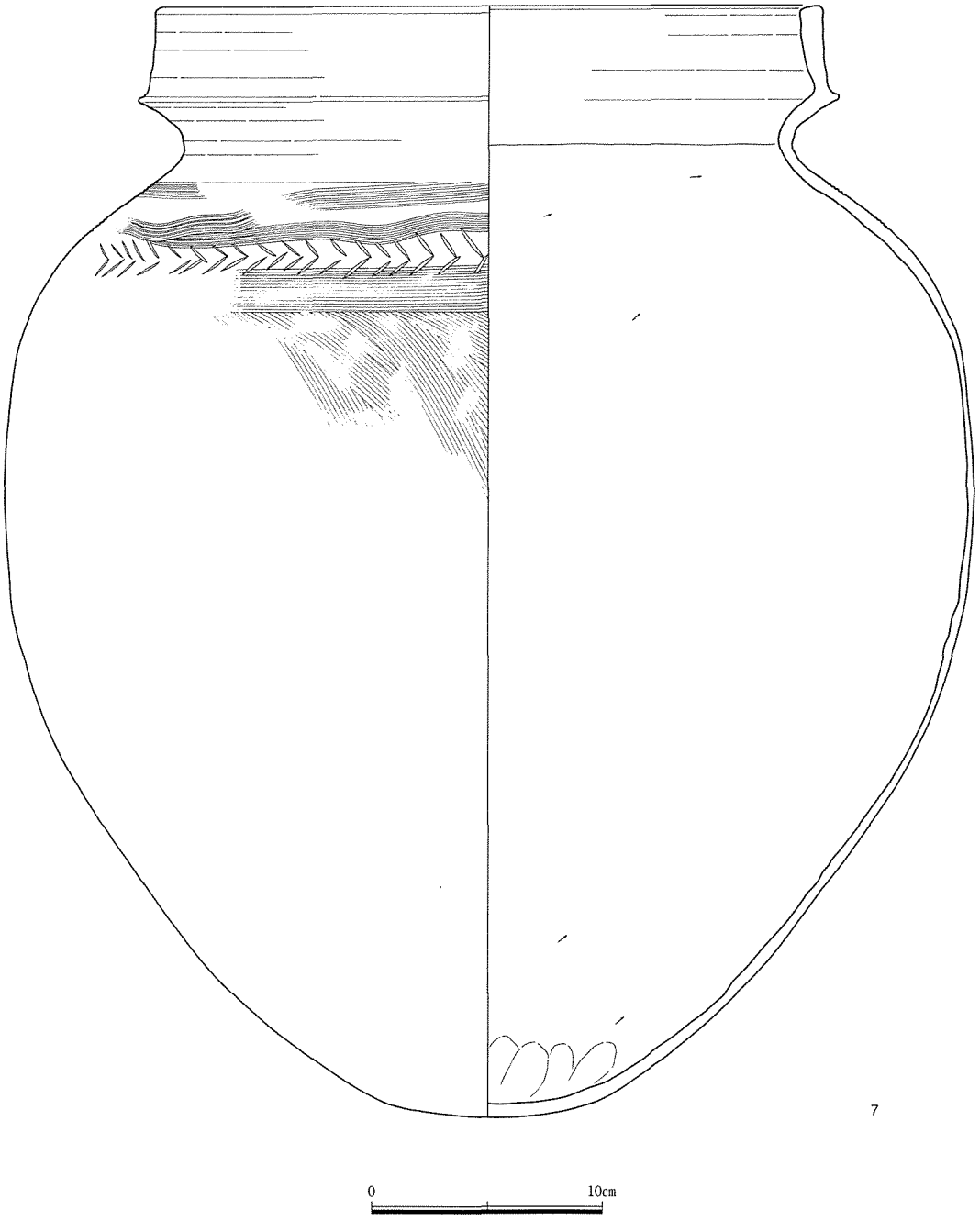


1．褐色砂混粘質土10YR4/6～5/6
2．黄褐色砂混粘質土10YR5/6～5/8
3．褐色砂混粘質土10YR4/4
4．黄褐色粘質土10YR5/6～4/6（砂粒・1㎝以下の軟岩を含む）
5．黄褐色粘質土10YR5/6（砂粒を含む）
6．暗褐色砂混粘質土10YR3/4～4/4
7．にぶい黄褐色粘質土10YR5/4～5/6（砂混、1～3㎝大の軟岩を3％含む）
8．褐色粘質土10YR4/6（砂粒を含む。0.5～2㎝大の軟岩を2％含む）
9．褐色粘質土10YR4/4（砂粒を含む。0.5～1㎝大の軟岩を1％含む）
10．にぶい黄褐色粘質土10YR5/4～5/6（1㎝以下の軟岩を含む）
11．黄褐色粘質土10YR5/8～5/6（砂粒を多く含む。0.5㎝以上の軟岩を含む）
12．明黄褐色粘質土10YR6/8～5/8（砂粒を含む。1～4㎝大の軟岩を5％含む。濁る）
13．褐色砂混粘質土10YR4/6～5/6（0.5～5㎝大の軟岩を7％含む）
14．明黄褐色粘質土10YR6/6～5/6（0.5～1.5㎝大の軟岩を2％含む）
15．黄褐色粘質土10YR5/6～4/6（砂粒を含む。0.5～4㎝大の軟岩を1％含む）

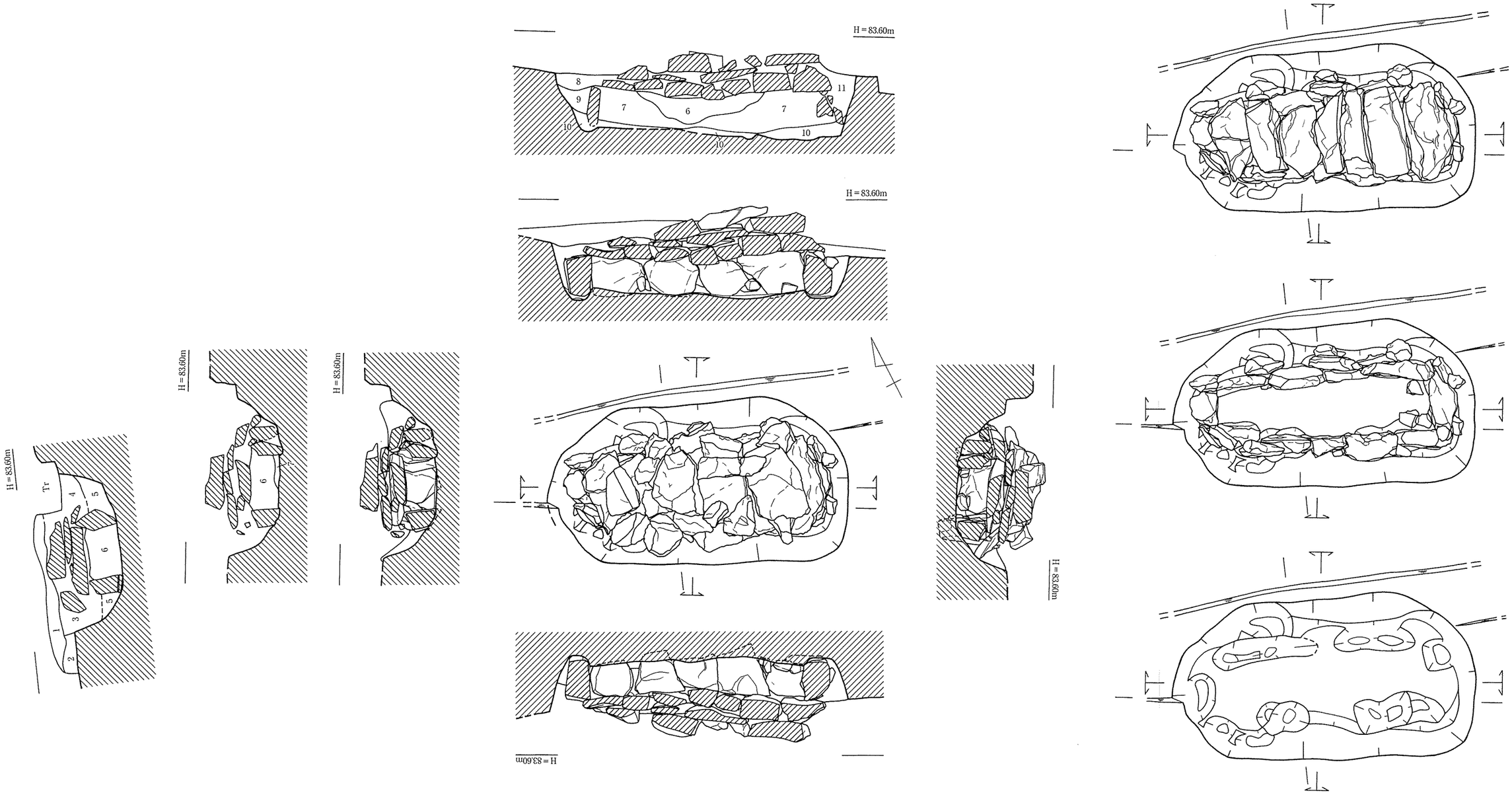
第38図　11号墳第1主体部実測図



第39図　11号墳第１主体部出土遺物実測図

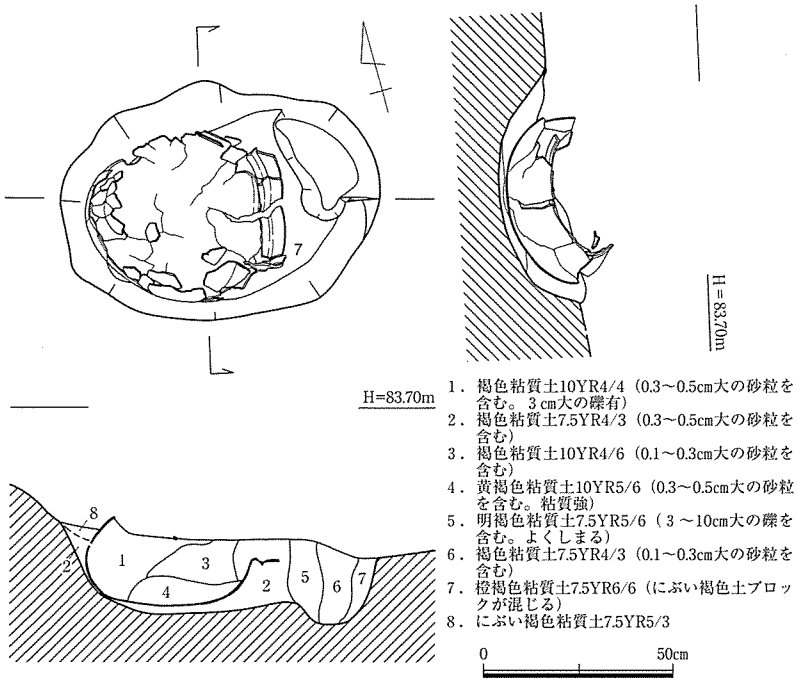


第40図　11号墳第３主体部出土遺物実測図

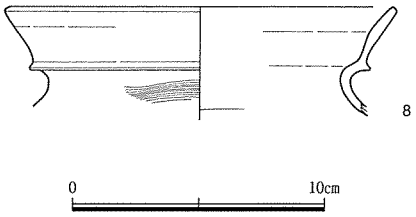


1．暗褐色砂混粘質土10YR3/3～2/3
2．褐色砂混粘質土10YR4/4（黄褐色砂混粘質土ブロック10YR5/6～5/8を含む。湧る）
3．褐色砂混粘質土10YR4/4～5/4（１cm以下の地山岩を１％以下含む）
4．にぶい黄褐色砂混粘質土10YR5/4（黄色を帯びる。湧る）
5．にぶい黄褐色粘質土10YR5/4～4/4（砂粒を含む）
6．黄褐色粘質土10YR4/4（３～５cm大の礫を含む）
7．黄褐色粘質土10YR5/6（３～５cm大の礫を含む）
8．にぶい黄褐色砂混粘質土10YR4/3（黄褐色砂混粘質土10YR5/6～5/8ブロックを２％・２cm大の地山岩を１％含む。湧る）
9．褐色砂混粘質土10YR4/6（４cm大の地山岩を１％以下含む）
10．にぶい黄褐色砂混粘質土10YR5/4
11．暗褐色砂混粘質土10YR3/4

第41図　11号墳第２主体部実測図



第42図　11号墳第３主体部実測図



第43図　11号墳墳裾出土遺物実測図

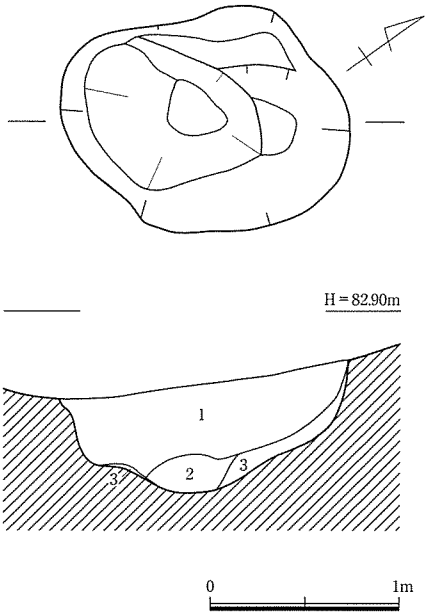
８．その他の遺構

SK―01（第44図、図版19）

７号墳の南裾、標高82.75mに位置する。平面は不整円形を呈し、長径1.56m、短径1.28m、深さ57cmを測り、主軸はN-52°-Eにとる。底面は中央がやや凹む。遺物の出土は無く、時期、性格は不明である。

整地層（第37図、図版30）

11号墳南裾側には幅３～４m、長さ24.5m以上の細長い平坦面を検出した。尾根筋を内側に向けて緩やかに弧を描く。北東端は尾根との交点手前で終息するが、西端は調査地外へと延びる。帯曲輪などの城跡関連遺構の可能性を検討する為、横断３ケ所を断割った。断割り断面の観察から、外側(谷側)に幅96～193cm、厚さ12～57cmの真砂土硬化層が５～６層確認された。真砂土は外圧により硬化しているものと考えられ。想像を逞しくすれば、「道」として機能していた可能性が考えられる。11号墳の南西墳裾外斜面に盛土し、平坦面に加工した後、道幅部分を掘削して真砂土を敷設している。真砂土硬化層が多層存在することから少なくとも数回、修復されていると考えられる。遺物の出土は無く、時期は不明である。



第44図　SK―01実測図

第3節　まとめにかえて

篠田古墳群には、当初、城跡関連遺構が存在する可能性を指摘されていたが、曲輪、堀、土塁、切岸などの顕著な遺構、当該時期の遺物は確認できなかった。また、これまでに5基の古墳が確認されていたが、今回実施した調査の結果、新たに6基が追加となり、古墳の総数は計11基を数える。諸般の事情でこの度、再踏査を実施することは叶わなかったが、尾根上方や北西および南東の両側に派生する小尾根上にはまだ古墳の存在するものがあると考えられ、さらに広範囲にわたる詳細な分布調査が必要である。今回の調査地は字界に相当する比較的大きな小尾根のひとつに該当する。主稜線から東北東方向に延びる小尾根に存在する支群7基が調査対象となった。内訳は方墳4基、円墳3基ですべて前期古墳である。標高は概ね72～86mに位置する。この小尾根も標高78.8m付近から北西方向と北東方向へ細分岐しており、北東へ延びる小尾根先端付近には4基の古墳が分布している。

古墳の築造方法は10・11号墳を除き、尾根高位を切削して低位側へ若干の盛土を行い、墳形を整えている。10・11号墳は地山の切削にて成形し、さらに若干盛土して形を整えている。何れの方法も原地形を最大限利用している。規模的には方墳が全長7～10m、円墳が12～14mと小規模な古墳である。最も大きな古墳は6号墳で全長約14m、高さ約3mを測る。

埋葬施設は全部で木棺直葬5基、箱式石棺2基、土器棺2基、不明2基の計11基を検出した。木棺は明瞭に確認できるものは少なく、不明分も木棺とすれば7基となる。明瞭に二段墓壙が確認できたものは6号墳第1主体部、9号墳主体部、11号墳第1主体部の3基である。なかでも6号墳第1主体部は墓壙の長さが5.1mと長大であり、割竹形木棺の可能性も考えられるが明確ではない。近隣の類例として服部18号墳の第2主体部が最も類似している[1]。石棺は6号墳第2主体部、11号墳第2主体部の2基である。何れも長さが2.2m前後の中規模石棺であるが、6号墳の石棺に対して11号墳のそれは粗雑で副葬品などの遺物もない。7号墳の第1・2主体部は遺存状態が悪く、埋葬形態は不明である。

遺物は土器転用枕と考えられるものが5号墳第1主体部、6号墳第1・2主体部、11号墳第1主体部の4点を検出している。5号墳、11号墳の土器枕は器台、6号墳は高杯を転用している。隣接する横枕古墳群において土器転用枕の保有率は約7割と報告されているが当古墳群では4割程度である。また、土器転用枕は地域の墓制との指摘もある[2]。各墳の周溝内外からは高杯、壺甕類が出土する。とりわけ6号墳周溝内の土器類は遺存状態が良く、種類も量も豊富である。鉄製品は鉄剣が5号墳第1主体部、6号墳第1・2主体部から各1点出土している。三者とも長さ30～40cm程度の中型のもの。5号墳のそれは直角両関で剣身が幅狭であるのに対し、6号墳第2主体部のものは斜角両関で剣身は幅広である。6号墳第1主体部のものは銹化著しく詳細は不明である。刀子片が5号墳第2主体部、6号墳第1主体部から各1点、「V」字状に折り曲げた鉋1点が出土している。類例に横枕25号墳第1主体部に「U」字状に折り曲げた鉄剣が出土している[2]。この他、11号墳第1主体部から不明鉄製品が3片出土している。玉類は5号墳第1・2主体部から各1点、6号墳第1主体部から3点、11号墳第1主体部から2点の計7点が出土している。11号墳からのガラス小玉1点以外は全て碧玉製の管玉であり、6号墳のそれらは比較的大型である。出土遺物において最も特筆すべきであり、当古墳群を特徴づけるのは6号墳第1主体部より出土した銅鏡である。銅鏡は鈕を中心に左右に翼を広げた鳥文を配する「飛禽鏡」と称される鏡である[3]。飛禽鏡は出土例が少なく、明確に遺跡から出土したものは管見の限り、この度で国内12例目となる[4]。日本国内の出土分布は、各地に分散しているが日本海側と九州地方に若干多い傾向が窺える。時期的には弥生時代終末期から古墳時代初期の発生期古墳や前期古墳に集中するようである。縁の断面形態には平縁、斜縁、三角縁の3種類、主文様には半肉彫り、細線描きの2種類が存在する。今回出土したものは斜縁の半肉彫である。製作地は中国大陸の徐州説、朝鮮半島の楽浪郡説があるが、楽浪周辺からの出土が集中することから、現在のところ楽浪郡説が有力と思われる[5]。仿製鏡は確認されておらず、舶載鏡であると考えられる。主文様である鳥文に関しても嗜好や思想的な解釈もある。同笵・

同型鏡の存在なども今後の課題である。出土例も少なく特異な鏡ゆえにその性格などの解釈は難しいが、その出土分布から中央政権などを経由せず供給地から独自に直接入手したことはほぼ確実であろうかと考えられる。当時、中国大陸や朝鮮半島とこの地域の直接的な交流を示唆している。また、本古墳の被葬者の社会的地位を窺わせるものである。

古墳の築造時期は全て古墳時代前期とみて大過ないものと考える。詳細な時期を数少ない遺物から判断することは困難でもあり危険も伴うが6号墳を除き前期前半(前葉～中葉)、6号墳は周溝内の土器に若干新しい要素のみられるものがあるが、概ね前期後葉に比定できようか。各墳裾の僅かな新旧関係などから築造順は10(方)→9(方)→7(方)→8(方)→5(円)→11(円)→6(円)号墳と推定できる。円墳である5・6・11号墳に関しては時期が降るに比例して規模も大きくなる。多少強引な解釈をすれば、今回の調査地にて最も高位で眺望の良い位置から下方に向かい築造する計画であったが、尾根が狭小ゆえに空間的に恵まれず、後の円墳は空きスペースや若干離れた場所に築造したとも考えられる。前期古墳のなかで方墳から円墳への移行と考えられ、中期以降にしか円墳が出現しない横枕古墳群や中期にまで方墳が残る下味野古墳群とは様相が異なり、同じ千代川左岸域丘陵の先端に位置する服部墳墓群にて前期中葉に方墳から円墳に移行しており、当古墳群と比較的類似する[1]。土器転用枕の初現を横枕古墳群周辺に求める意見[2]もあり、これらの古墳群は地域色の強い古墳群といえる。

千代川左岸域の丘陵における各古墳群の調査は近年進んでおり、相当数の調査事例が蓄積されつつある。隣接していても尾根毎に特色を有し、類似するものもあれば異なるものも存在する。今回、時間と紙数の制約により成し得なかったが各古墳群の特徴を詳細に分析、比較検討することで各群の再編成、造営集団、社会的背景なども次第に解明することも可能であろう。

註

(1) 『服部墳墓群』鳥取市文化財団　2001年
(2) 『横枕古墳群Ⅱ』鳥取市文化財団　2003年
(3) 樋口 隆康『古鏡』新潮社　1979年
車崎 正彦「弥生・古墳時代 鏡」『考古資料大観』第5巻　小学館　2002年
(4) 間壁 葭子「飛禽鏡の性格」『季刊 考古学』第43号　雄山閣　1993年
上記論考により8例が集成されているが、その後の調査事例の増加により1例が追加①、大阪府教育委員会　西川 寿勝氏からの資料提供により2例の追加が判明した②③。
① 兵庫県朝来郡山東町　若水A11号墳　第1主体部
② 広島県福山市加茂町上加茂　石鎚山5号墳
③ 神奈川県厚木市伸道　稲荷山第1号墳
(5) 森下 章司「山東・遼東・楽浪・倭をめぐる古代銅鏡の流通」『東アジアと『半島空間』—山東半島と遼東半島—』思文閣　2000年
西川 寿勝「三角縁神獣鏡と卑弥呼の宝飾鏡」『歴史読本』　新人物往来社　2000年
また、西川氏より直接のご教示、ご指摘による。

篠田古墳群調査一覧表

名称	墳丘		埋葬施設等					出土遺物		時期
	形態・規模(m)	主軸	埋葬方法等	棺規模(内法) 長さ×幅×高さ(m)	墓壙等 平面形態	長さ×幅×高さ(m)	主軸	埋葬施設	墳丘・周溝 その他	
5号墳	円形 長径 11.82 短径 11.35 高さ 1.29				1)隅丸長方形	3.29×1.13×0.44	N-76°-E	土師器(器台)、鉄剣、管玉	土師器(高杯)	古墳時代前期前半
					2)長楕円形	2.60×0.91×0.27	N-64°-E	刀子、管玉		
			土器棺		3)円形	1.31×1.21×0.20		土師器(壺)		
6号墳	楕円形 長径 13.99 短径 12.09 高さ 2.88	N-42°-E	木棺直葬	3.70× — ×0.48	1)隅丸長方形	5.10×1.83×0.68	N-34°-W	土師器(高杯)、鉄剣、銅鏡(飛禽鏡)、刀子、管玉	土師器(高杯・壺・甕)	古墳時代前期後葉
			箱式石棺	1.36×0.29×0.19	2)隅丸長方形	2.16×0.93×0.31	N-32°-W	土師器(高杯)、鉄剣		
7号墳	方形 長辺 9.55 短辺 7.9 高さ 2.19	N-83°-E			1)不整長方形	2.64×1.00×0.11	N-8°-E		土師(壺・器台) 須恵器 砥石	古墳時代前期前半
					2)不整楕円形	1.84×0.67×0.26	N-88°-E	土師器(高杯・壺)		
8号墳	方形 辺 10.4 高さ 2.23	N-28°-W							土師器(器台)	古墳時代前期前半
9号墳	方形 長辺 7.1 短辺 6.5 高さ 0.7	N-63°-E	木棺直葬	2.56×0.61×0.32	長方形	2.74×1.42×0.43	N-24°-W	鉇	土師器(壺)	古墳時代前期前半
10号墳	方形 辺 9.1 高さ 1.64	N-71°-E				(2.16×1.24×0.5)	N-47°-E		土師器(高杯)	古墳時代前期前半
11号墳	円形 長径 12.07 短径 11.15 高さ 1.72	N-72°-W	木棺直葬	2.81×0.84×0.28	1)不整長方形	3.58×1.77×0.55	N-18°-E	土師器(器台)、不明鉄製品、管玉、ガラス小玉		古墳時代前期前半
			箱式石棺	1.53×0.39×0.31	2)不整楕円形	2.22×1.23×0.56	N-26°-E			
			土器棺		3)不整円形	1.69×1.26×0.49	N-87°-W	土師器(壺)		
SK—01					不整円形	1.56×1.28×0.57	N-52°-E			

出土遺物観察表

—記載事項について—

挿図番号　遺構ごとの実測番号、図版番号、付図内表示番号を統一して示す。

器　　種　土器は形態的特徴から、壺・甕・高杯・低脚杯等の従来の呼称を用いた。部分名称の場合は(　)で表示。石製品は形態、使用痕の観察から、砥石・磨石等の名称を用いた。

法　　量　土器……口径：①　底径：②　最大胴径：③　器高：④をcmで示す。なお、(　)は復元値。〈　〉は推定値。ただし目安としての径の残存が7分の1以下を推定値とした。
石製品・鉄製品……長さ：L　幅：W　厚さ：T　径：Dをcmで示す。(　)は現存値。

形態・手法の特徴　主要部分について記述した。土器については口縁部の内外面ヨコナデ調整を特別な場合以外は省略した。

胎土・焼成・色調

①　胎土　砂粒の大きさとその量を示す。

②　焼成　良好(堅緻)・良(普通)・やや不良(やや軟)・不良(軟)の4段階に分けた。

③　色調　主として外面の色調を示すが、内外面が異なる場合(外)・(内)で表示。

備　　考　赤彩、黒斑、釉、籾痕、煤・炭化物付着の有無等を記載。石製品等は重量を記載。(　)は現存値。

遺物登録番号　出土地を調査区分の通し番号で表示。遺物台帳登録番号。

—遺物実測図中における表示—

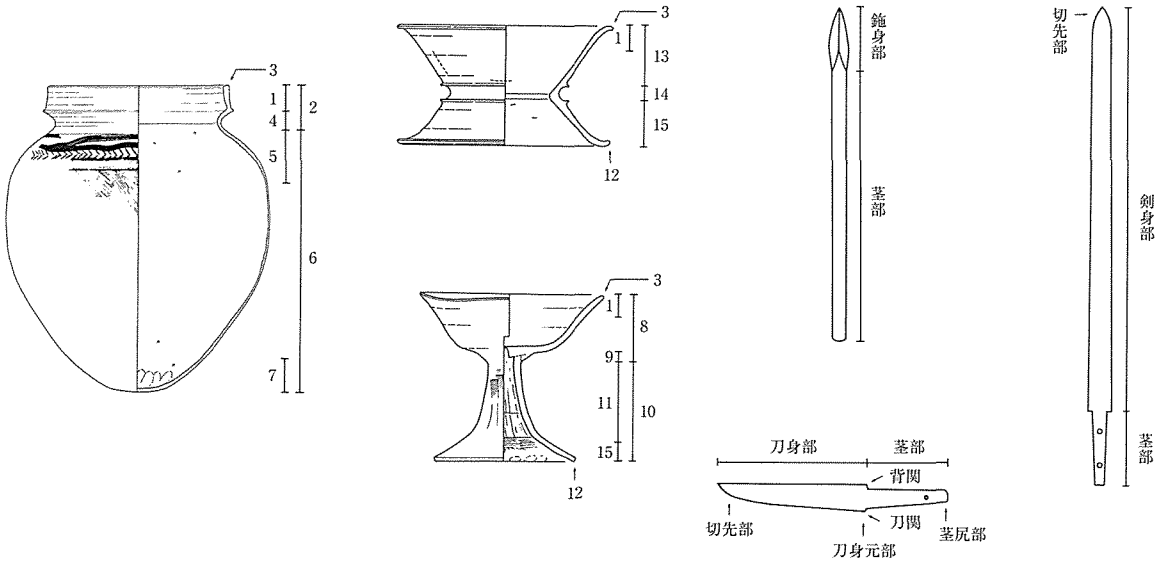
須恵器：黒塗り　　石製品実測図加工範囲：

遺物使用痕範囲：　　石製品実測図磨滅範囲：

土器実測図のヨコナデ調整による稜：

—土器の部分名称について—　部位名称を略す場合は頭文字を(　)で表示。

—鉄製品　部分名称—



土器・鉄製品細部名称図

篠田古墳群

5号墳（第9・12・13図）

挿図番号	器種	法量 ①口径 ②底径 ③最大胴径 ④器高	形態・手法の特徴		①胎土 ②焼成 ③色調	残存状況	備考	遺物登録番号
1	器台	① 〈19.2〉	鼓形器台。 受部は端部方向へと直線的に開き端部で外反して丸く納める。	風化剥落不明瞭。 (外)接合部ヨコナデ。	①0.5㎜以下の砂粒を含む 2㎜の砂粒有 ②不良 ③淡橙褐色	(口) 1/4 (受) 1/3	土器転用枕	41
6	土器棺 (肩部)		肩部は大きく張り出す。	(外)肩部斜位ハケ目、胴部縦ハケ目後横ハケ目。 (内)風化剥落不明瞭。	①0.5㎜前後の砂粒を僅かに含む ②やや不良 ③(外)黄褐色 淡灰色 (内)黄褐色	(肩)一部	黒斑有	48
7	高杯			脚柱部(外)ハケ目後ナデ。 (内)ヘラ削り後ナデ。	①1㎜前後の砂粒を含む ②良 ③淡橙褐色	(脚柱) 1/2		52
8	高杯			杯底部剥落不明瞭。	①0.5㎜以下の砂粒を含む 6㎜の砂礫有 ②不良 ③淡黄褐色	(杯底) 1/2		51

6号墳（第17・18・20・21図）

1	高杯	① 最大〈20.9〉 最小〈19.6〉	有段の杯部。 口縁部は外傾し端部で外反、端部を欠く。	剥落不明瞭。 杯部(外)ヘラ磨き痕。	①1.5㎜以下の砂粒を多く含む 4㎜の砂礫あり ②良 ③橙褐色	(杯)ほぼ1		82 83 87
2	高杯	① 〈19.2〉	有段の杯部。 口縁部は直線的に開き端部で面を持つ。	杯部(外)上半ハケ目、下半ヘラ磨き。 (内)ハケ目後ヘラ磨き。	①1㎜前後の砂粒を含む ②良 ③淡橙褐色	(口) 4/9	黒斑有	81
8	高杯	① 15.1	口縁部は直線的に開き端部で丸く納める。	杯部(外)ハケ目後横方向のナデ。成形時の指頭圧痕。 (内)上半ハケ目後ヘラ磨き。下半ナデ。 杯部と脚部の境界に1条の沈線。	①1㎜以下の砂粒を多く含む ②良 ③橙褐色	(口) 2/3	杯部打欠き 土器転用枕	94
10	(口縁部)	① 〈21.6〉	口縁部はほぼ直立して立ち上がり 端部で外反、凸面をもつ。	(外)ナデ。 (内)ナデ、工具痕。	①1～2㎜の砂粒を多く含む 3.5～4.5㎜の砂礫有 ②良 ③褐色	(口) 1/10	炭化物付着	123
11	土器棺 壺	③ 44.2	複合口縁。 体部は上位に最大径をもつ。	(外)体部ハケ目後肩部ナデ後頸部ヨコナデ。底部剥落不明瞭。 (内)体部ヘラ削り後胴部上半ナデ。底部粗なナデ。成形時の指頭圧痕。	①2～3㎜の砂粒を多く含む 7～8㎜の砂礫有 ②良 ③褐色	(体)ほぼ1	黒斑有	104 115 117 120 126
12	壺	① 17.0	複合口縁。 口縁部は直立気味に立ち上がり端部を欠く。	(外)頸肩部縦、斜位ハケ目後頸部ヨコナデ。胴部剥落不明瞭。体部下半縦方向のハケ目、底部不定方向のハケ目。 (内)頸部ナデ。体部ヘラ削り後ナデ。底部ハケ目痕？	①1～2㎜の砂粒を多く含む 6～10㎜の砂礫有 ②良 ③(外)淡橙褐色 橙色 (内)淡橙褐色 橙色 褐色	(口) 3/4 (体) 1/2	炭化物付着 底部焼成後の不整円穿孔	99 100 101 103 110 114 118 121 125
13	小型壺	① (8.7) ③ (8.3)	口縁部は直線的に外傾し端部は細る。	(外)体部ハケ目。 (内)体部上半ナデ、下半ヘラ削り。	①1㎜前後の砂粒を多く含む 3㎜の砂粒有 ②良 ③黄橙色	(口) 1/6 (肩) 1/6	黒斑有	108
14	甕	① (11.4) ③ (15.8)	口縁部は外傾し端部で丸く納める。 体部は球形。	(外)体部上半剥落不明瞭。底部ナデ。 (内)頸部ナデ。体部ヘラ削り後上半ナデ。	①1㎜前後の砂粒を多く含む 3～4.5㎜の砂礫有 ②良 ③黄褐色 暗黄褐色	(口) 1/2 (体) 1/2 (底) 1/6	煤付着	105
15	高杯	① 14.4 ② 11.1 ④ 13.5	口縁部は外傾し端部で丸く納める。脚部は基部から緩やかに開き下半で大きくハの字状に開いて裾端面をもつ。	杯部剥落不明瞭。 脚部(外)上半工具ナデ後ハケ目。下半ナデ。 (内)上半の絞り目を軽くナデ消す。下半ハケ目 後裾部 ヨコナデ。 成形時の指頭圧痕。	①1～2㎜の砂粒を多く含む 4㎜の砂礫有 ②良 ③黄橙色	(口) 3/4 (脚) ほぼ1		108

7号墳（第25・26・27図）

1	(頸肩部)			風化剥落不明瞭。 (外)頸部ヨコナデ。体部ハケ目痕？	①0.5㎜以下の砂粒を多く含む 3㎜の砂粒有 ②良 ③褐色 暗褐色	(頸) 1/8 (肩) 1/7		69
2	(底部)	② 5.0	平底。	剥落不明瞭。 (外)ナデ。 (内)ヘラ削り後ナデ。	①1～2㎜の砂粒を含む 4㎜の砂礫有 ②やや不良 ③淡橙褐色	(底) 1	黒斑有	66 68
3	高杯		有段の杯部。口縁部は外傾して伸び端部を欠く。脚下半部はハの字状に開き端部を欠く。	剥落不明瞭。 脚部(外)上半ナデ。 (内)工具痕。	①2㎜以下の砂粒を多く含む 4㎜の砂礫有 ②不良 ③橙色	(杯) 1/2 (脚) 1/2	赤彩	64 65 67 68
4	(頸肩部)			風化剥落不明瞭。 (内)頸部ナデ。肩部ヘラ削り。	①1㎜前後の砂粒を多く含む 4㎜の砂礫有 ②良 ③暗褐色	(頸) 1/6		71
5	(口縁部)	① 〈18.6〉	複合口縁。 口縁部は外傾して開き端部で外反気味として面をもつ。	剥落不明瞭。 (外)口縁端部横ハケ目後ヨコナデ。	①1㎜以下の砂粒を含む ②良 ③淡褐色	(口) 1/10	黒斑有	76
6	器台	① 〈11.3〉	鼓形器台。 口縁部は外傾し端部で丸く納める。	剥落不明瞭。 (外)受部ハケ目痕。接合部ヨコナデ。 (内)接合部ナデ。台部ヘラ削り後ナデ。	①1㎜以下の砂粒を多く含む ②やや不良 ③橙褐色	(受) 一部 (台) 1/2		74
7	砥石	L 15.7 W 4.6 T 3.0		長軸4面に使用痕。	③淡褐色	完存	456g	61

8号墳（第28図）

1	器台			風化剥落不明瞭。 (外)接合部ヨコナデ。	①0.5㎜以下の砂粒を含む ②良 ③橙色	(接合)1/10 (台) 一部		142

9号墳（第33・34図）

挿図番号	器種	法量 ①口径 ②底径 ③最大胴径 ④器高	形態・手法の特徴		①胎土 ②焼成 ③色調	残存状況	備考	遺物登録番号
1	壺	① (14.6)	くの字状口縁。 口縁部は外反気味に開き端面をもつ。	(外)肩部ハケ状工具による？平行沈線。 (内)頸部ナデ。肩部ヘラ削り後ナデ？	①1㎜以下の砂粒を含む ②良 ③淡褐色	(口) 1/4		33 38
2	(底部)	② 7.8	平底。	風化剥落不明瞭。 (外)体部ハケ目後底部ナデ。 (内)ナデ。	①0.5㎜以下の砂粒を多く含む ②やや不良 ③淡黄褐色	(底) 1/2		22 32
3	壺		複合口縁。 口縁部は外傾し端部を欠く。	剥落不明瞭。 (外)ヨコナデ。	①1㎜以下の砂粒を含む ②良 ③淡褐色	(口) 1/8		39

10号墳（第35図）

1	高杯			剥落不明瞭。 杯底部 (外)脚部ハケ目。	①1㎜以下の砂粒を含む ②良 ③橙褐色	(杯底) 1		23

11号墳（第39・40・43図）

1	器台	① (19.8) ② 19.0 ④ 11.5	鼓形器台。 受部、台部共に直線的に開き端部で外反して凸面をもつ。	(外)ヨコナデ。 (内)受部、接合部剥落不明瞭。台部ヘラ削り。	①1㎜前後の砂粒を含む ②良 ③淡褐色	(受) 1/4 (台)ほぼ1	受部打欠き 土器転用枕	1 2
7	土器棺甕	① 28.4 ③ 42.2 ④ 48.7	複合口縁。 口縁部は内傾して立ち上がり端部方向へと肥厚し面をもつ。体部中上位に最大径をもつ。	剥落不明瞭。 (外)体部上半斜位ハケ目後横ハケ目。肩部上段櫛描平行沈線、下段同一工具による波状文を施した後残存部にヘラ状工具による連続刺突文を綾杉状に施す。底部ナデ。 (内)頸部ナデ。体部ヘラ削り後ナデ。底部成形時の圧痕。	①1㎜以下の砂粒を多く含む 3㎜の砂粒有 ②良 ③黄褐色	(口) 1/2 (体) 1/2 (底)ほぼ1	黒斑有	7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18
8	甕	① 〈15.2〉	複合口縁。 口縁部は外傾し端部で面をもつ。	(外)頸部ハケ目。 (内)頸部剥落不明瞭。	①1㎜以下の砂粒を含む ②良好 ③黄褐色	(口) 1/10		17

篠田古墳群　銅製品

（単位）：cm

出土地	挿図番号	器種	L(長さ) W(幅) T(厚さ) D(径)	其の他計測値		形態の特徴		残存状況	備考	遺物登録番号
						平面形等				
6号墳 第1主体部	第17図 7	銅鏡 飛禽鏡	L 9.3 T(最大)0.43 (最小)0.03	乳	0.18	円形	表面は外縁近くで反りをもつ。 裏面は斜縁の縁から内方向に鋸歯文、櫛歯文、素文帯とし、内区は4乳と1羽の鳥形を配す。上下に頭と尾、左右に羽を広げて鈕を胴体とした形状をなす。外区の左右文帯に潰れ部を観察し、厚味は薄手を呈す。鋸歯文75前後。櫛歯文150前後を推測する。内区の鳥は頭は左向き、尾先は右向き、左右の羽根はほぼ縦平行に広げる。足部は不明瞭。	4/5残存		85

篠田古墳群　鉄製品

単位：cm

出土地	挿図番号	器種	全長	法量							形態の特徴	残存状況	備考	遺物登録番号
				刀部		茎部								
				長さ	断面形	長さ	断面形		幅	厚さ				
5号墳 第1主体部	第10図 3	鉄剣	38.1	27.4	レンズ状？	10.7	長方形状	剣身切先部 剣身中央部 茎元部 茎中央部	2.21 2.40 1.98 1.02	0.40 0.45 0.45 0.35	錆化する。剣身は先端部方向へ幅、厚を僅かに減らし、中心軸の鎬は不明瞭。直角両関。茎部に目釘孔1の痕跡。	ほぼ完存	(124)g 布目痕 木質痕	45
5号墳 第2主体部	第11図 4	刀子	(2.7)		二等辺三角形		長方形	刀身部 茎中央部	0.82 0.88	0.18 0.20	錆化著しく湾曲する。	切先部欠 茎尻部欠	(1.8)g 木質痕	47
6号墳 第1主体部	第17図 3	刀子	(3.6)	(3.6)	二等辺三角形			刀身切先部	1.43	0.40	錆化、膨張して不明瞭。	刀身切先部	(5.9)g	90
6号墳 第2主体部	第19図 9	鉄剣	33.0	24.8	レンズ状？	8.2	長方形	剣身切先部 剣身中央部 茎元部 茎中央部	2.90 3.30 3.41 2.04	0.45 0.50 0.50 0.33	錆化する。剣身は先端部方向へ幅、厚を僅かに減らし、中心軸の鎬は不明瞭。斜角両関。茎部の目釘孔1に目釘が残る。	完存	170g 木質痕？	95
9号墳 主体部	第32図 1	鉇	(28.0)	3.0	凸状 裏凹状	(25.0)	長方形	鉇身中央部 茎元部 茎中央部	1.00 0.86 0.92	0.35 0.35 0.42	錆化する。側面側でV字状に曲がった状態で出土。先端部で反りをもち、鎬は不明瞭。茎端部背幅減、厚細る。	完存	30.3g	31
11号墳 第1主体部	第39図 2	不明 鉄製品	(6.6)						1.00	0.35	錆化する。 膨張、剥落し断面不明瞭。		(8.7)g	3
	第39図 3	不明 鉄製品	(3.1)						1.00	0.35			(2.7)g	6
	第39図 4	不明 鉄製品	(2.0)						0.59	0.20			(0.7)g 布目痕 木質痕	6

5号墳　第1主体部　出土玉類（第9図）

挿図番号	種類	長さ(mm)	径(mm)	孔径(mm)		穿孔	色　調	重量(g)	材質	残存状況	備考	遺物登録番号
2	管玉	(7.0)	4.3	2.0	1.3	両面	暗オリーブ灰色	0.204	碧玉	一端部欠		44

5号墳　第2主体部　出土玉類（第11図）

5	管玉	12.7	4.3	2.0	1.6	両面	オリーブ灰色	0.350	碧玉	完存		46

6号墳　第1主体部　出土玉類（第17図）

4	管玉	50.0	12.3	2.8	2.7	両面	明オリーブ灰色	13.775	碧玉	ほぼ完存		91
5	管玉	(49.0)	13.2	3.1	(2.1)	両面	明オリーブ灰色	13.848	碧玉	一端部欠		84 93
6	管玉	(30.0)	10.0	3.0	2.2	両面	明オリーブ灰色	5.567	碧玉	一端部欠		92

11号墳　第1主体部　出土玉類（第39図）

5	小玉	4.3	6.0	2.5	2.0		青緑色	0.199	ガラス	完存		5
6	管玉	(5.0)	3.0	1.0	0.8		オリーブ灰色	0.067	碧玉	一端部欠		4

図　　版

調査前　全景(北東から)

調査後　全景(北から)

図版 2

6・7・5号墳　全景
（北西から）

5・9・10号墳　全景
（北西から）

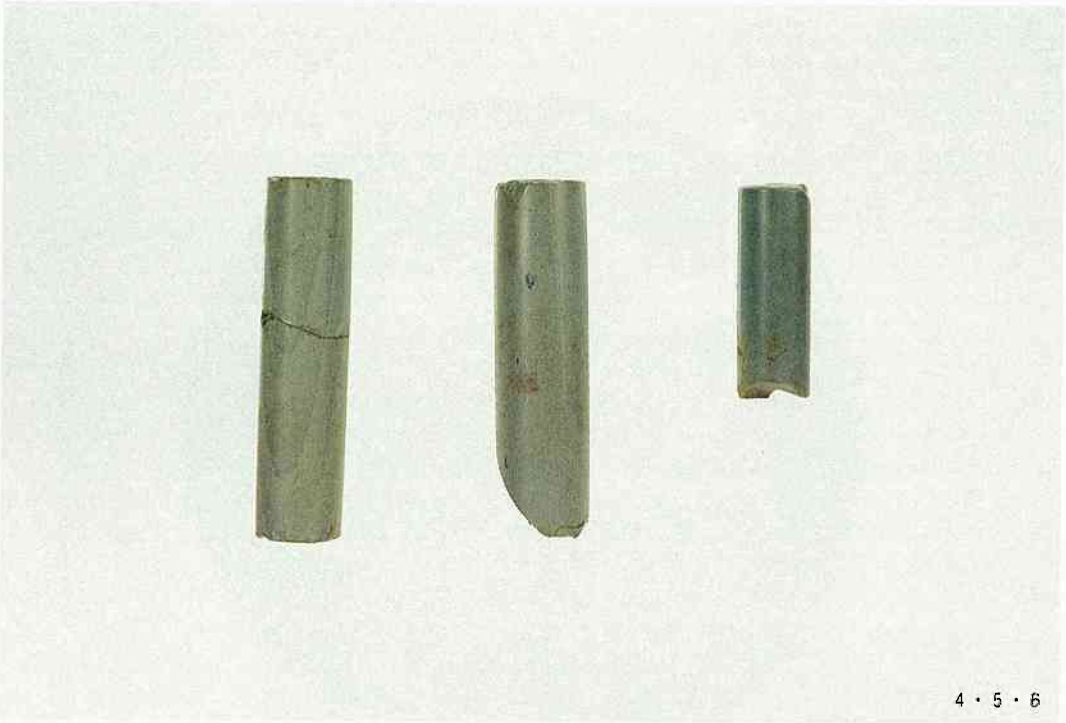
11号墳　全景（南から）

7

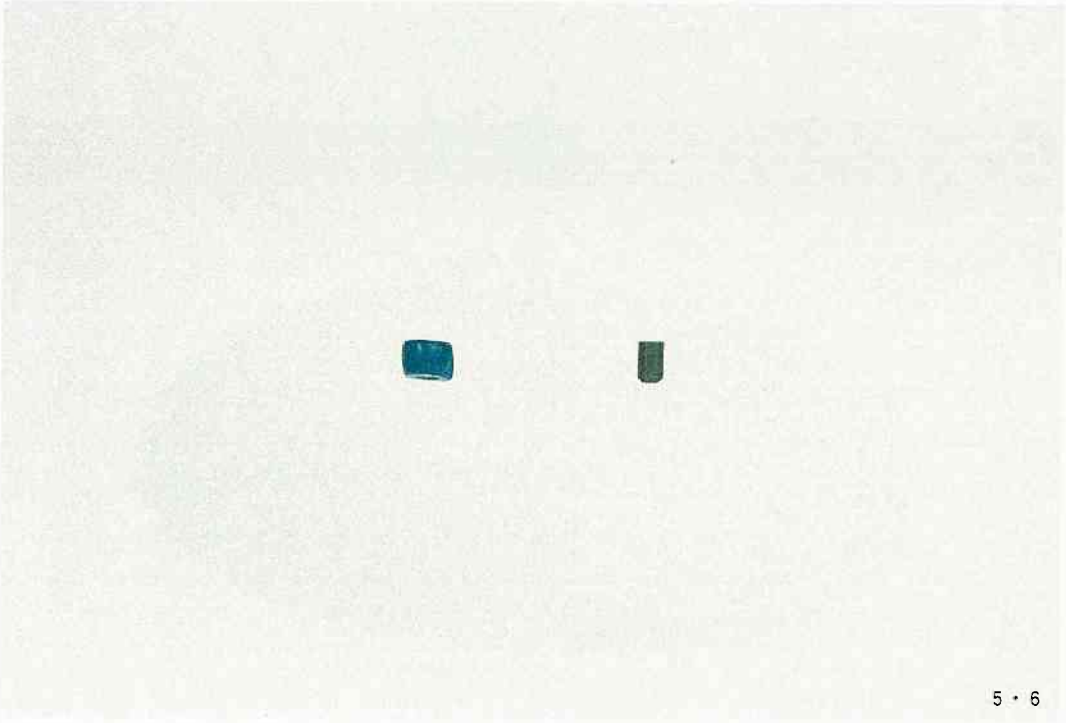
7

6 号墳　第 1 主体部出土 銅鏡（飛禽鏡）

図版 4



6 号墳　第 1 主体部出土 管玉



11号墳　第 1 主体部出土 玉類

5 号墳　調査前
（南西から）

5 号墳　北西裾断面
（西から）

5 号墳　北東裾断面
（北から）

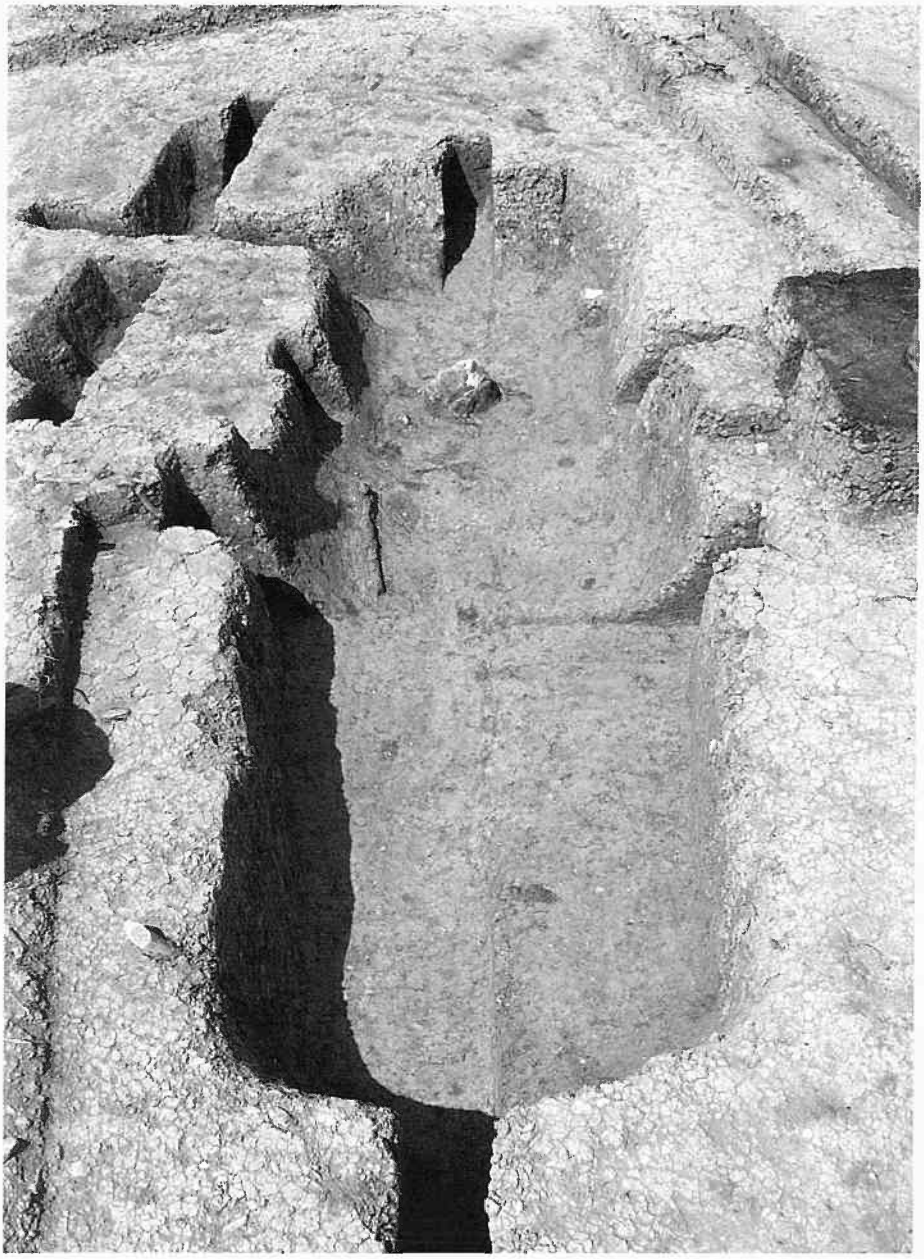
図版 6

5 号墳　墳丘検出状況
（北西から）

5 号墳　第 1 主体部
横断面（東から）

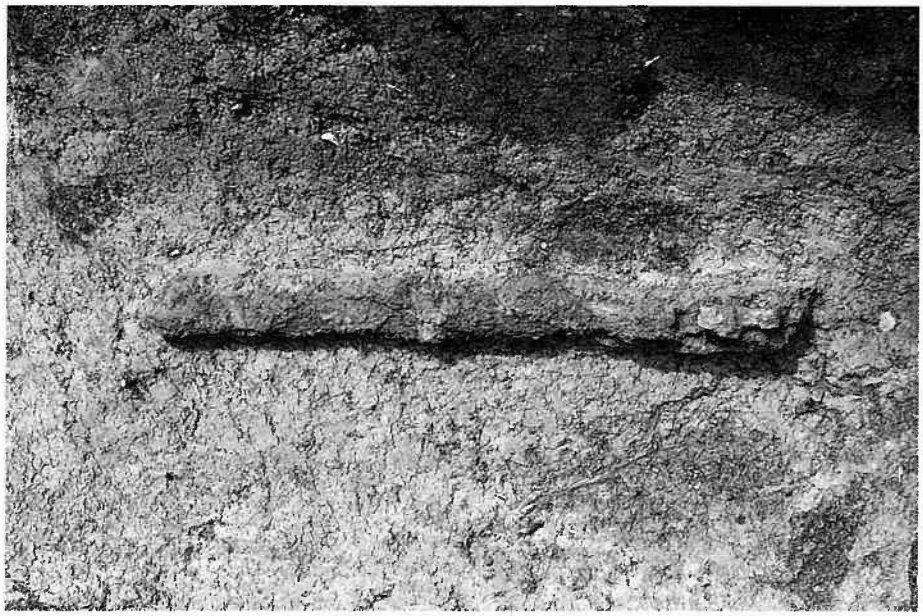
5 号墳　第 1 主体部
縦断面（南から）

5 号墳　第 1 主体部
検出状況（東から）



5 号墳　第 1 主体部内
遺物出土状況①

図版 8



5 号墳　第 1 主体部内
遺物出土状況②

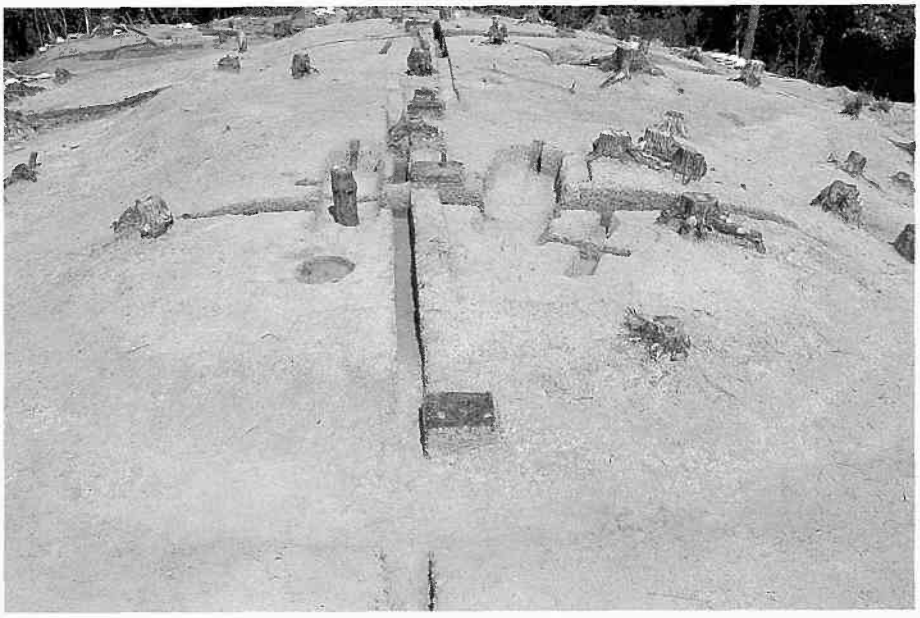
5 号墳　第 2 主体部
横断面（東から）

5 号墳　第 2 主体部
縦断面（北から）

5 号墳　第 2 主体部
検出状況（東から）

5 号墳　第 3 主体部
検出状況（西から）

図版10

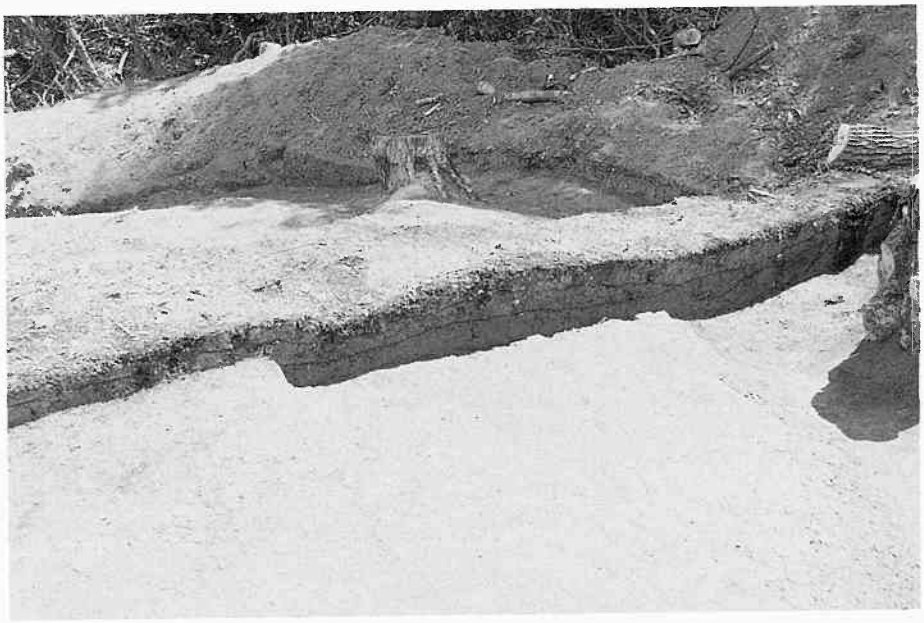


5号墳　完掘状況
（南西から）

6号墳　北裾断面
（北東から）

6号墳　西裾断面
（南西から）

6号墳　東裾断面
（南東から）



6号墳　周溝内
遺物出土状況（南から）

6号墳　周溝内
遺物出土状況①

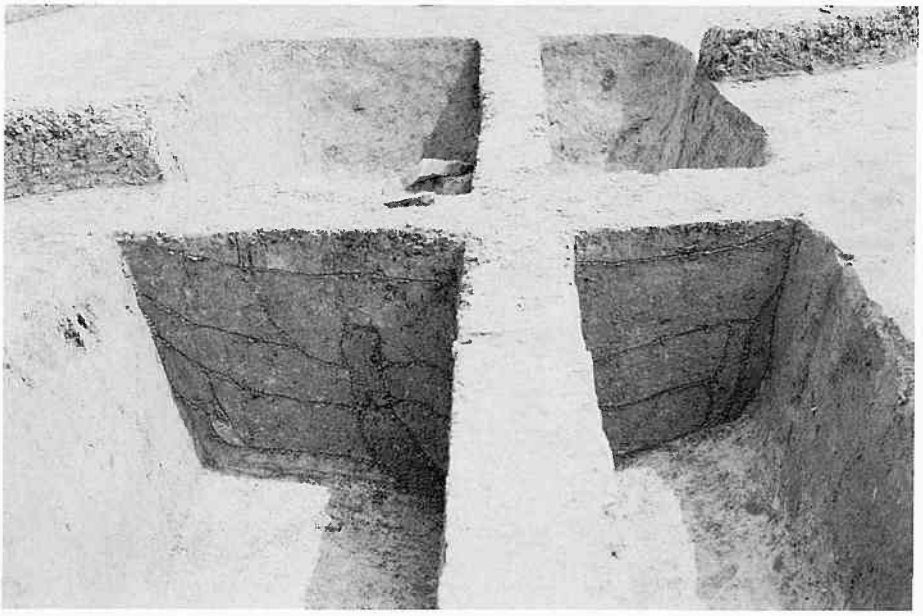
図版12

6号墳　周溝内
遺物出土状況②

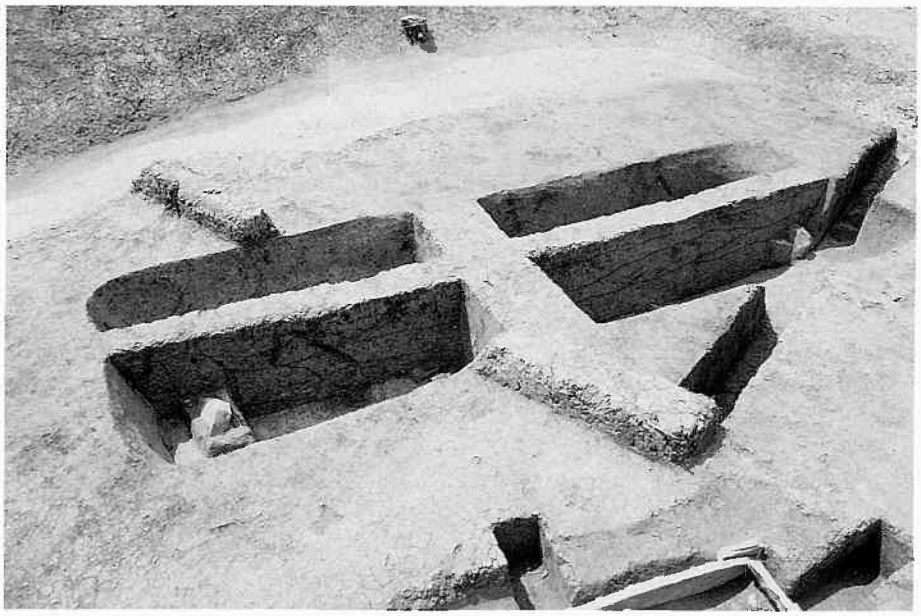
6号墳　周溝内
遺物出土状況③

6号墳　墳丘検出状況
（南から）

6号墳　第1主体部
横断面(北西から)



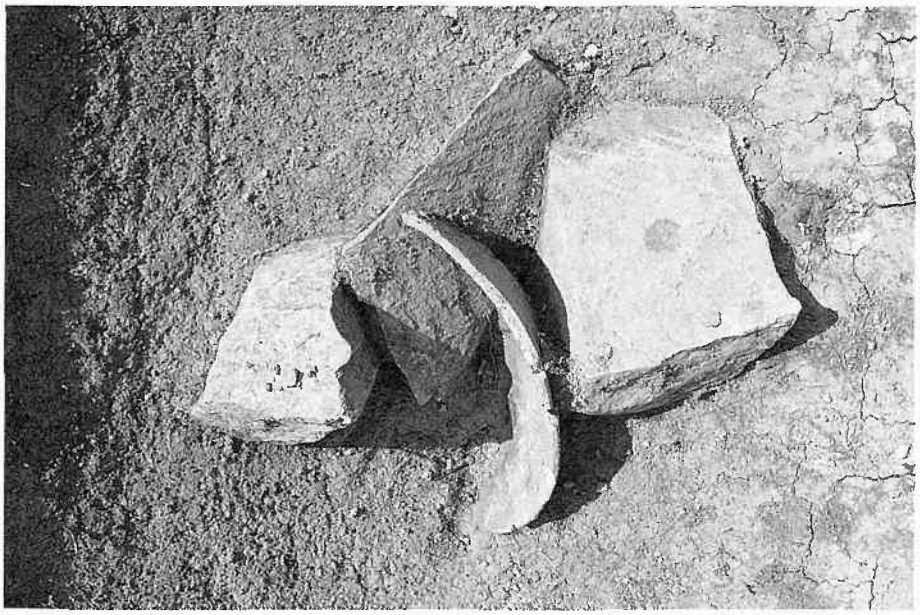
6号墳　第1主体部
縦断面(東から)



6号墳　第1主体部内
遺物出土状況①

図版14

6号墳　第1主体部
検出状況(南西から)

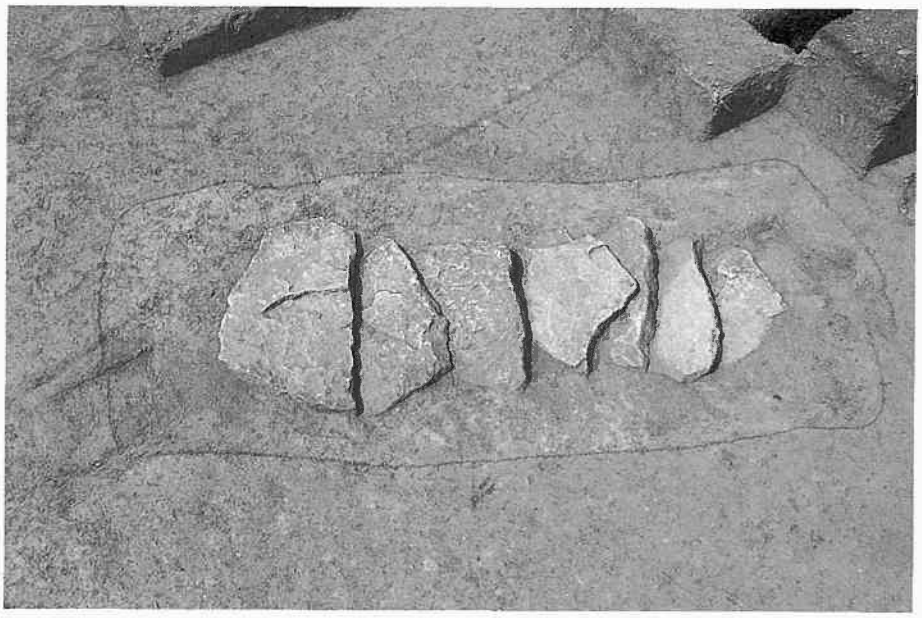


6号墳　第1主体部内
遺物出土状況②

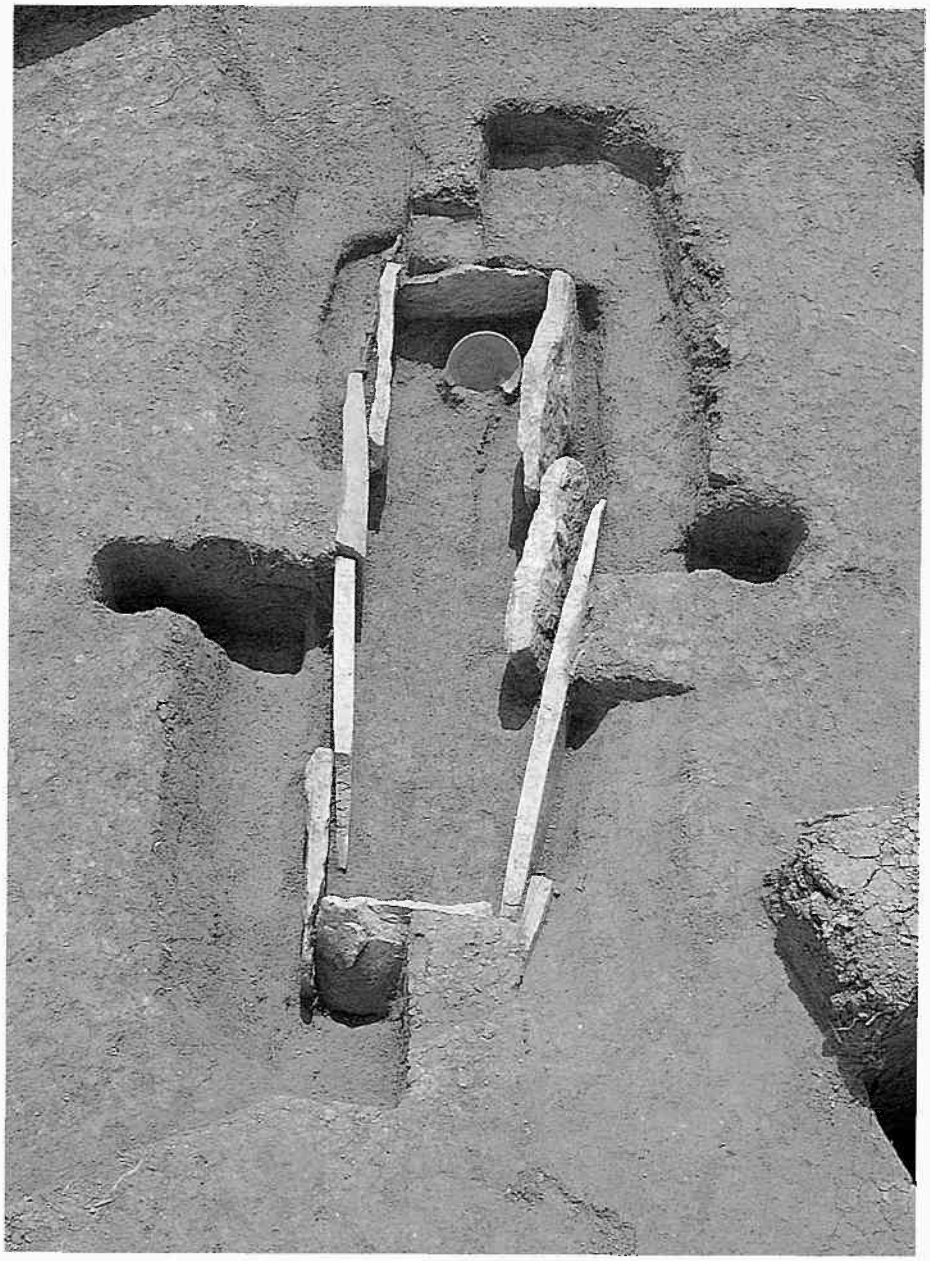
6号墳　第1主体部内
遺物出土状況③

6号墳　第1主体部内
遺物出土状況④

6号墳　第2主体部
検出状況①(北東から)



図版16



6号墳　第2主体部
検出状況②(北西から)

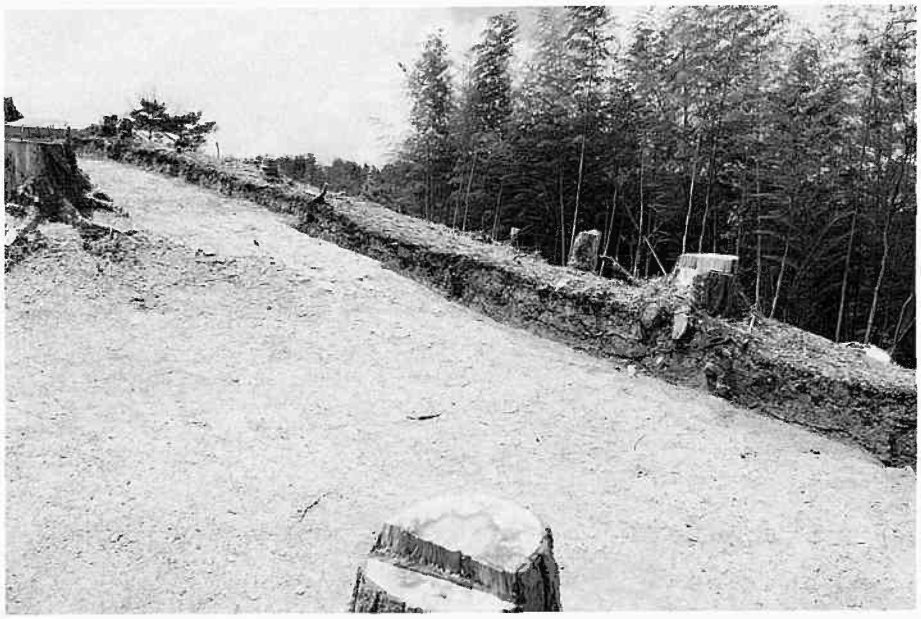
6号墳　第2主体部内
遺物出土状況(北東から)

6号墳　完掘状況
（北西から）

7号墳　調査前
（南西から）

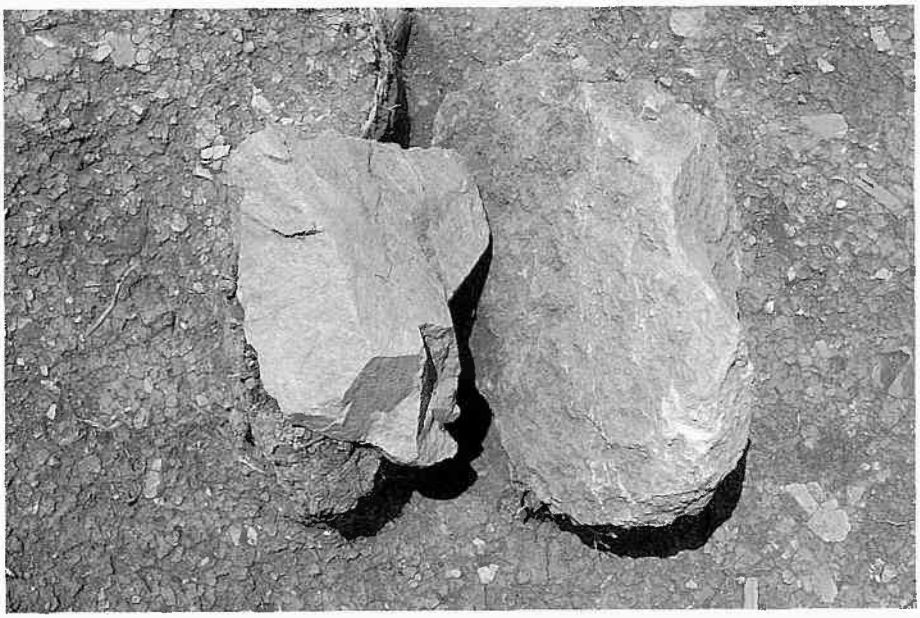
7号墳　北西裾断面
（西から）

図版18



7号墳　北東裾断面
（東から）

7号墳　第1主体部
検出状況（南西から）

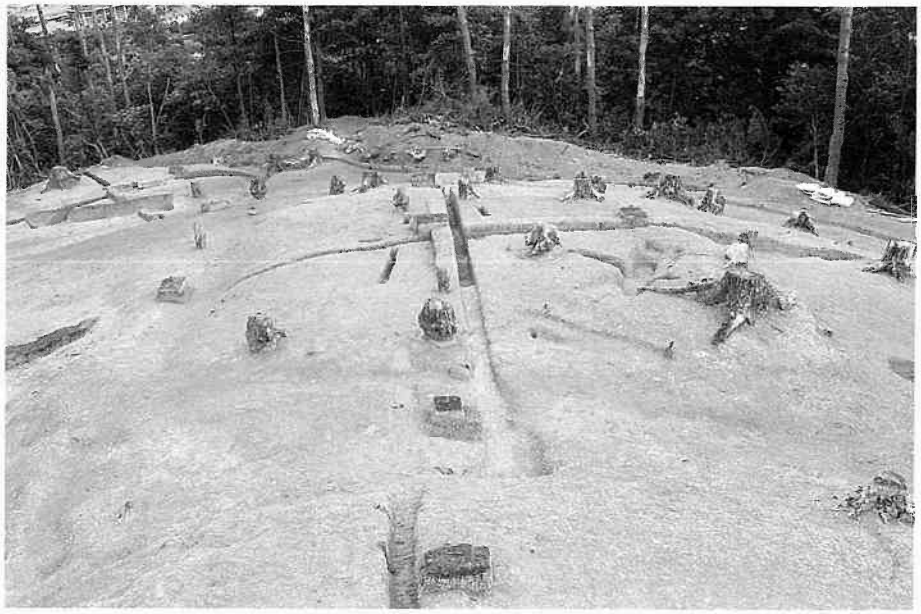


7号墳　第1主体部内
石枕（南東から）

7号墳　第2主体部
検出状況（北から）

7号墳南裾 SK—01
検出状況（東から）

7号墳　完掘状況
（南西から）



図版20

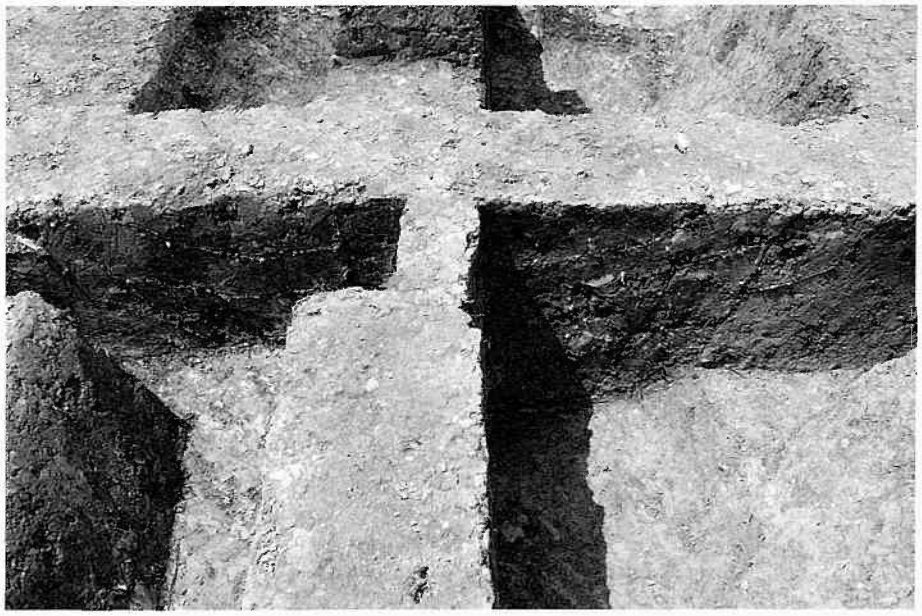
8号墳　調査前(南から)

8号墳　南裾断面
(西から)

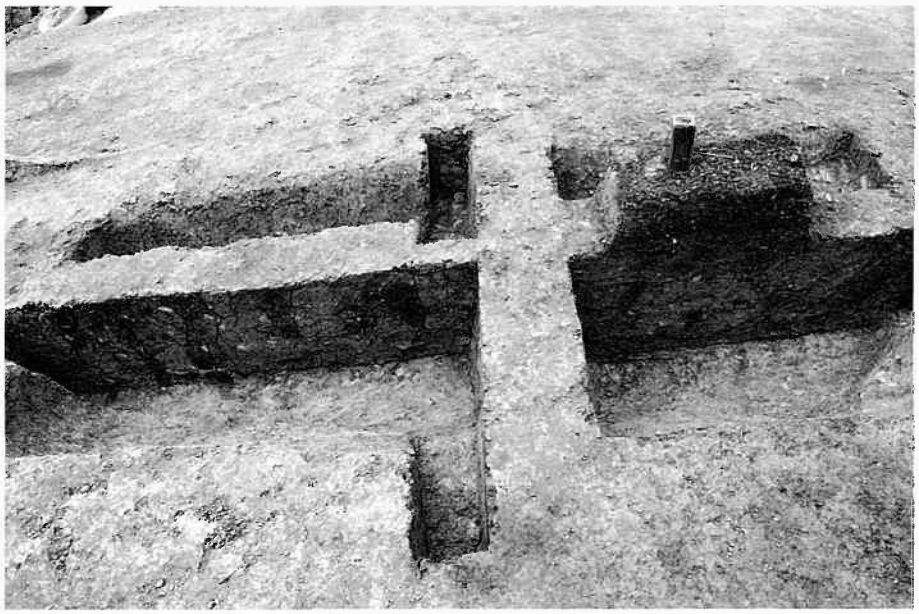
8号墳　完掘状況
(南から)

9号墳　北西裾断面
（西から）

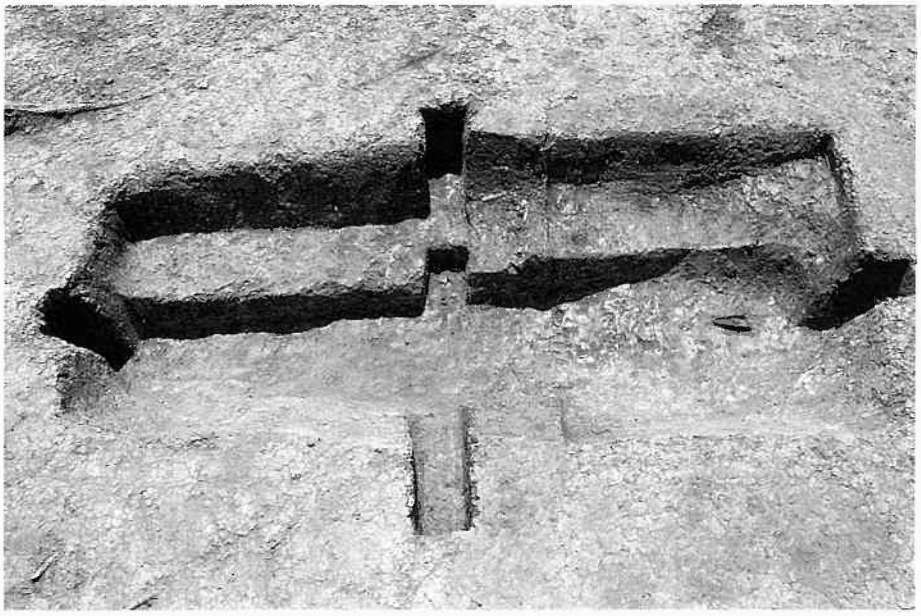
9号墳　主体部
横断面（南東から）



9号墳　主体部
縦断面（北東から）



図版22



9号墳　主体部
検出状況（北東から）

9号墳　主体部内
遺物出土状況（南東から）

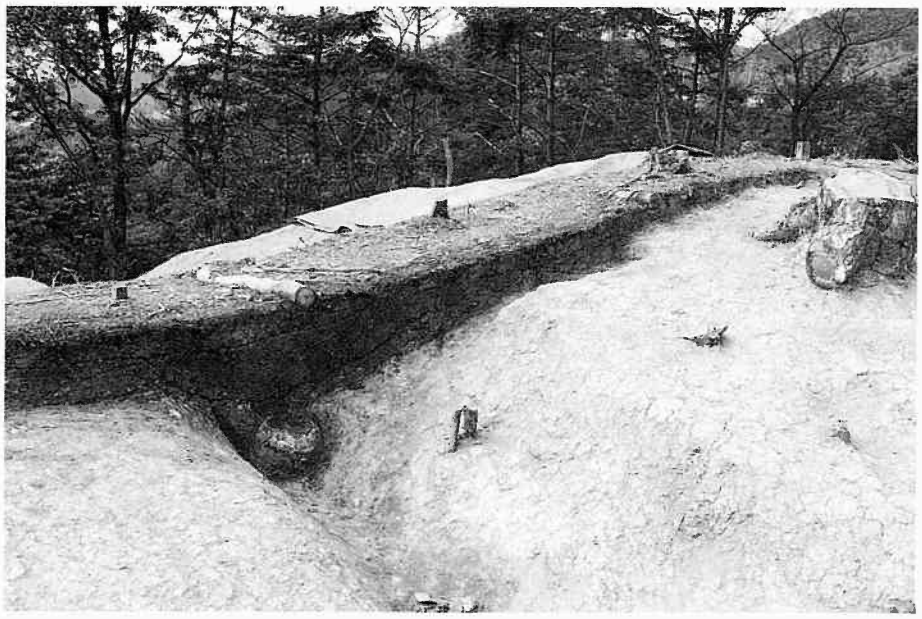
9号墳　完掘状況
（南西から）

10号墳　調査前
（北東から）

10号墳　南西裾断面
（西から）

10号墳　北西裾断面
（西から）

図版24



10号墳　北東裾断面
（北から）

10号墳　南東裾断面
（南から）

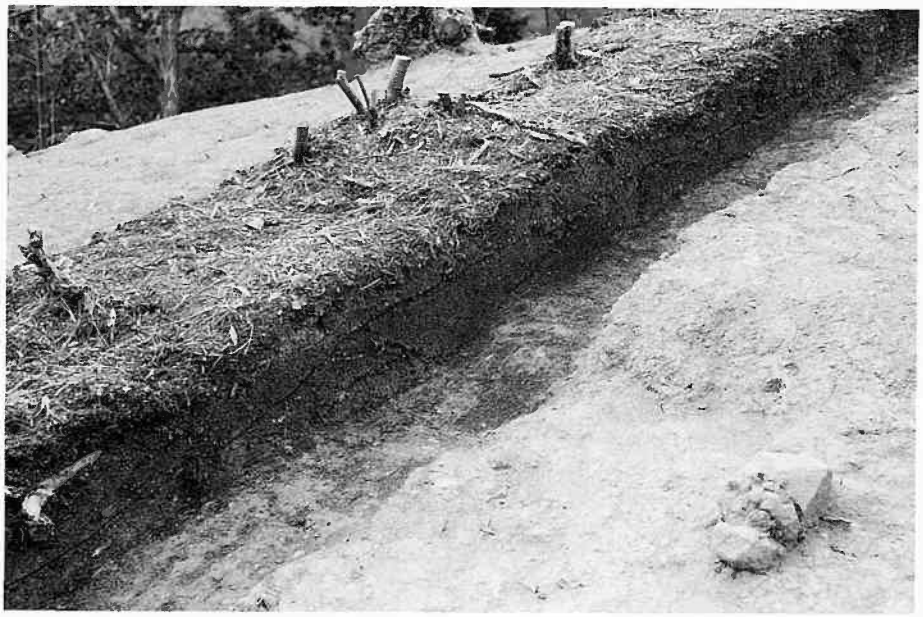
10号墳　完掘状況
（南西から）

11号墳　調査前（東から）

11号墳　北裾断面
（北東から）

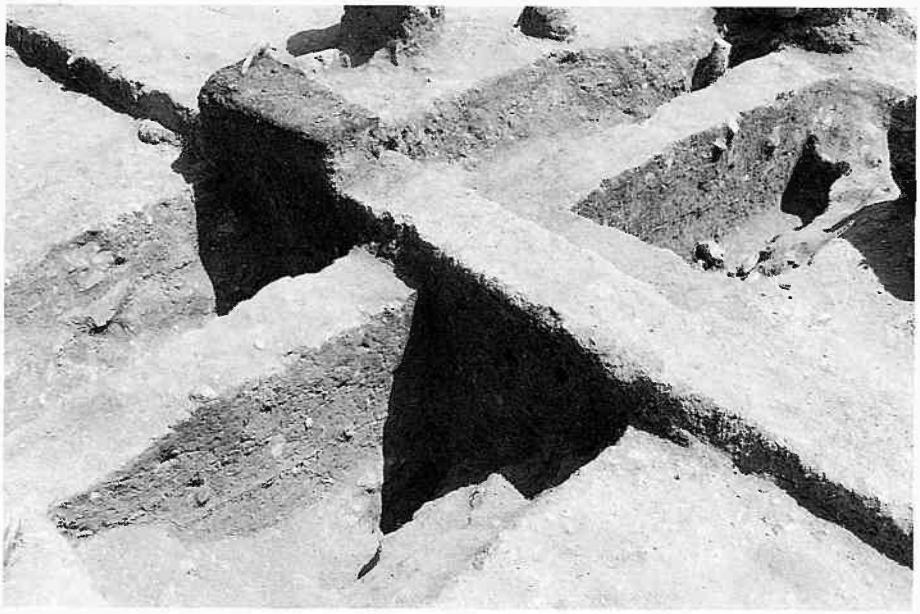
11号墳　東裾断面
（南東から）

図版26



11号墳　南裾断面
（南東から）

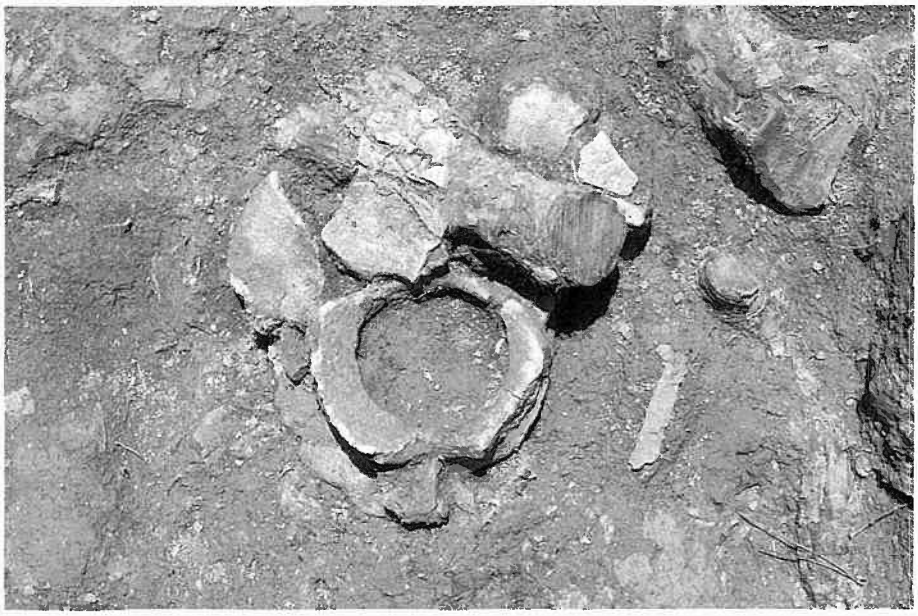
11号墳　第１主体部
横断面（南から）



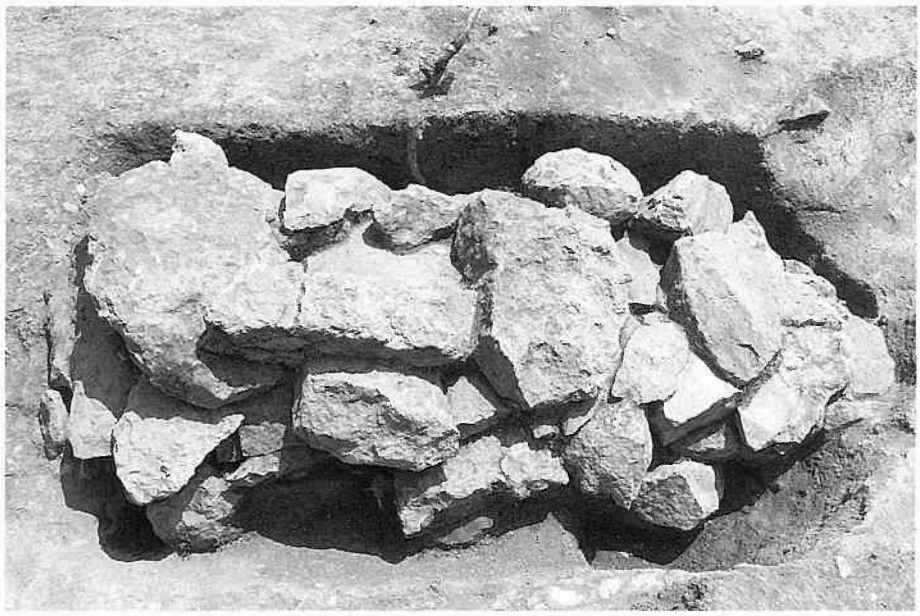
11号墳　第１主体部
縦断面（北西から）

11号墳　第１主体部
検出状況（北から）

11号墳　第１主体部内
遺物出土状況



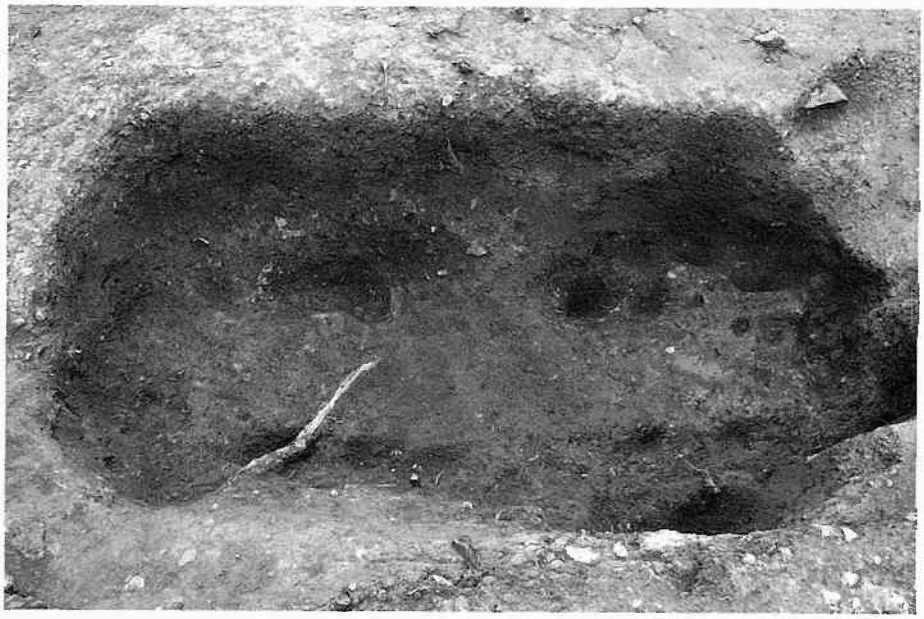
図版28



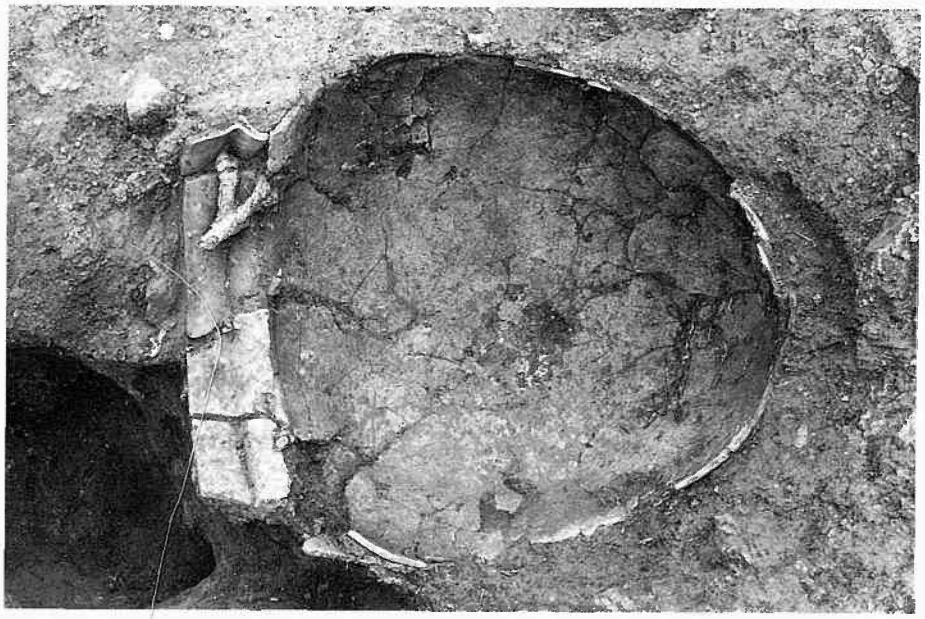
11号墳　第２主体部
検出状況①（北から）

11号墳　第２主体部
検出状況②（東から）

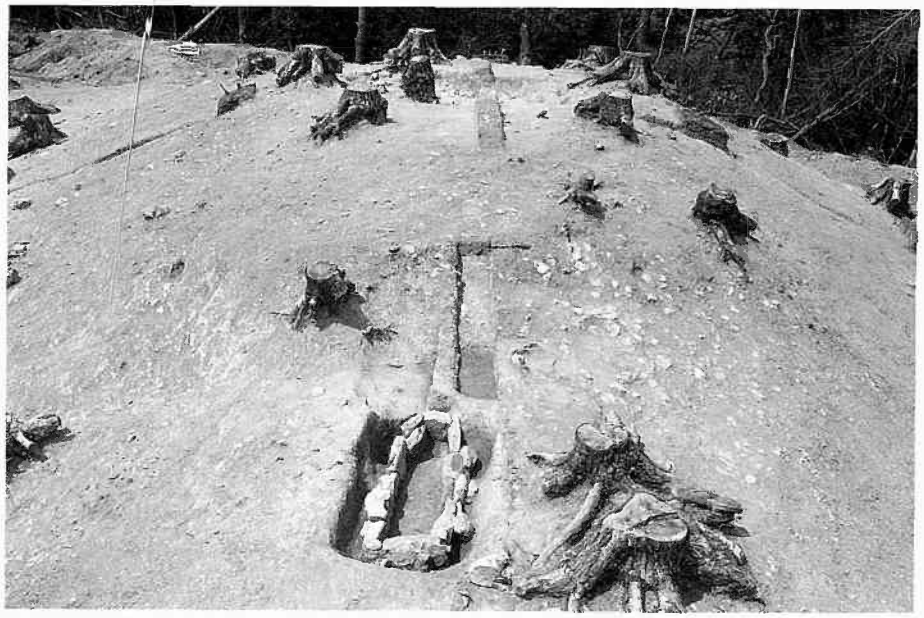
11号墳　第２主体部
完掘状況（北から）



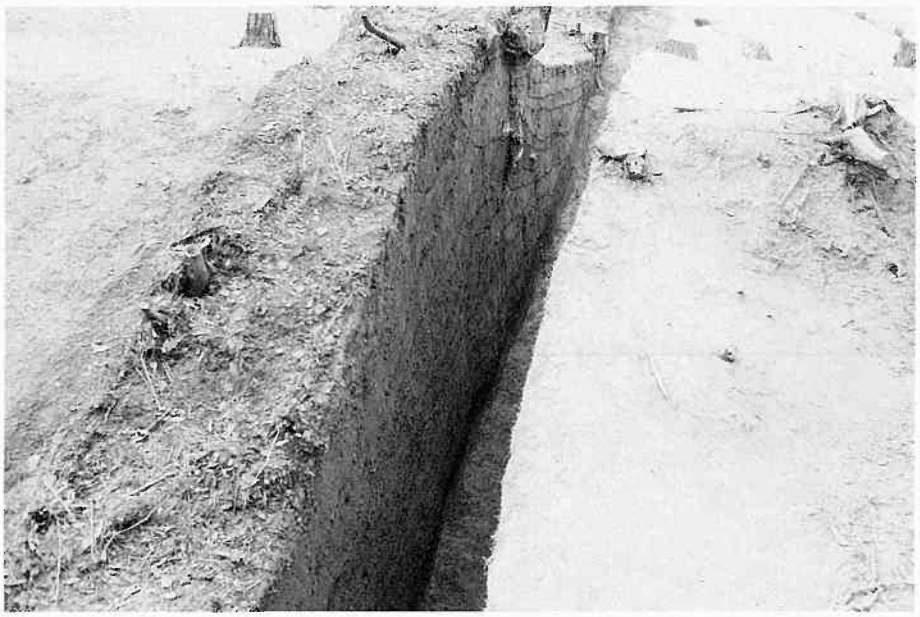
11号墳　第３主体部
検出状況（北から）



11号墳　完掘状況
（東から）

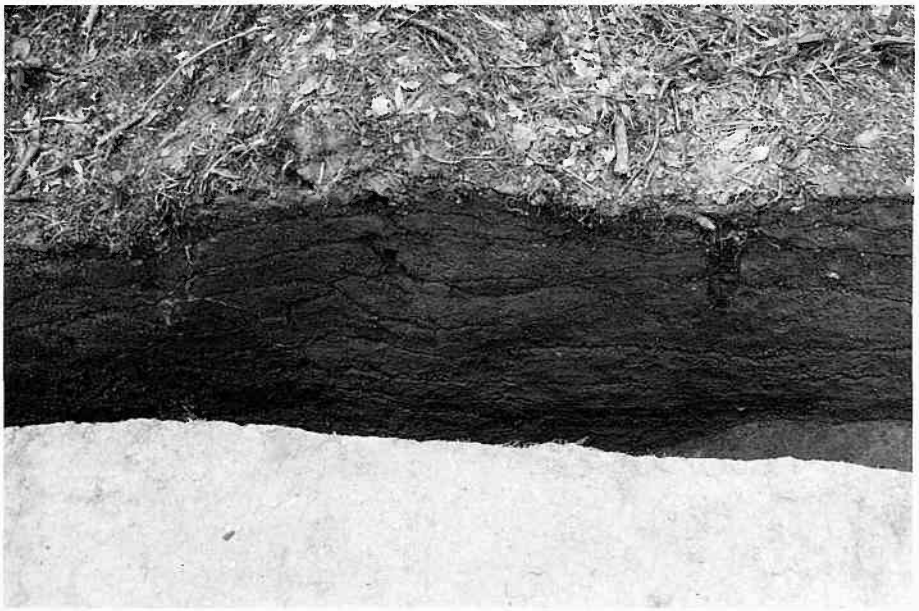


図版30

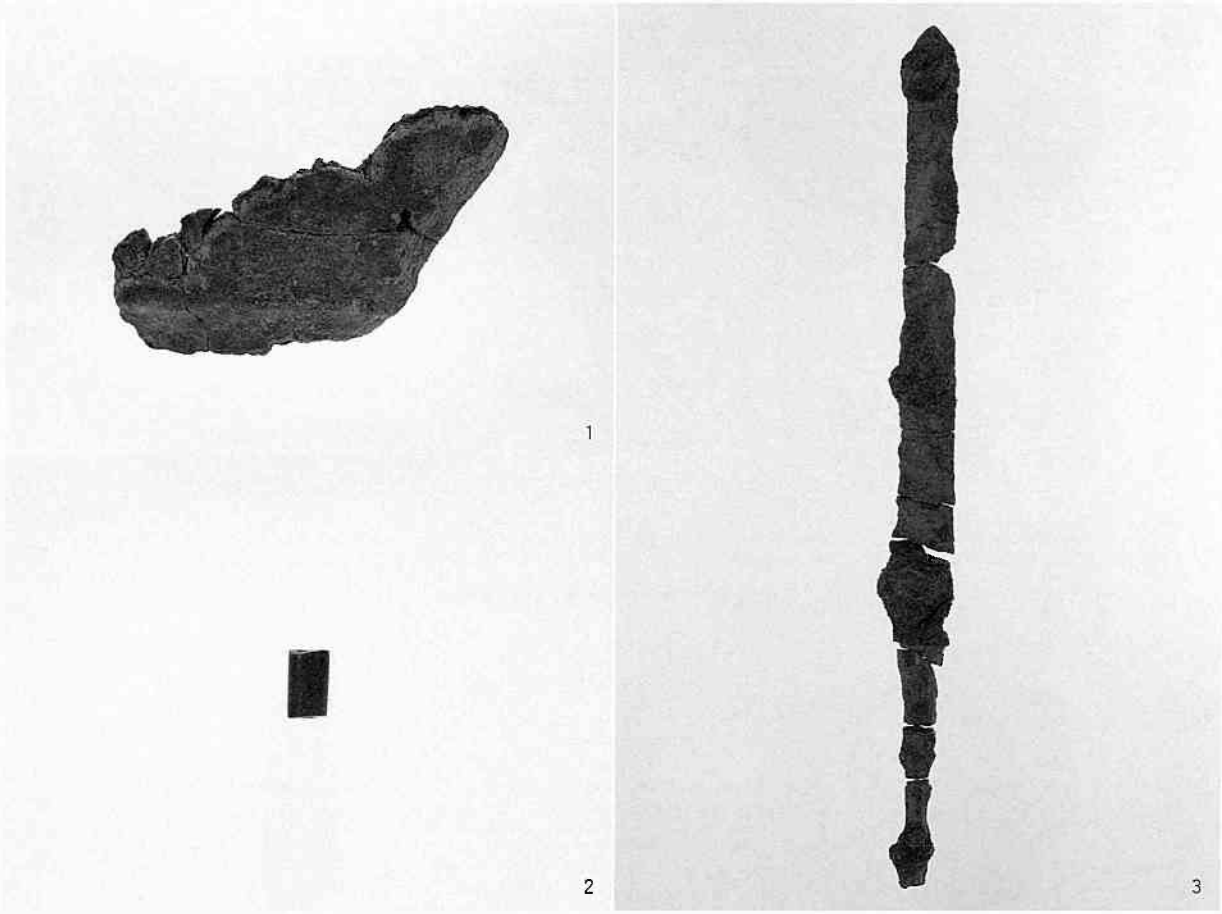


11号墳　南裾
平坦面（整地層）
断面①（南東から）

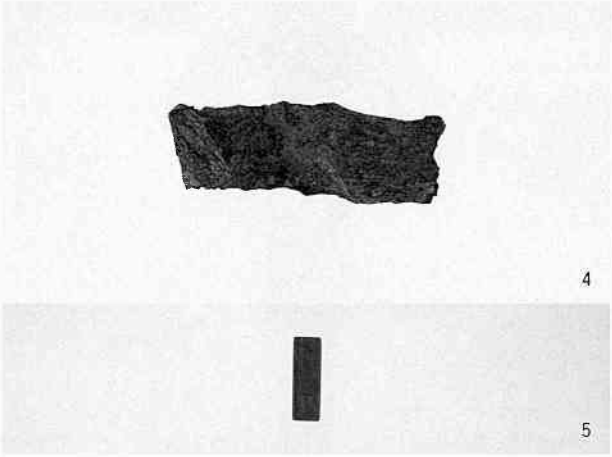
11号墳　南裾
同　硬化層
（東から）



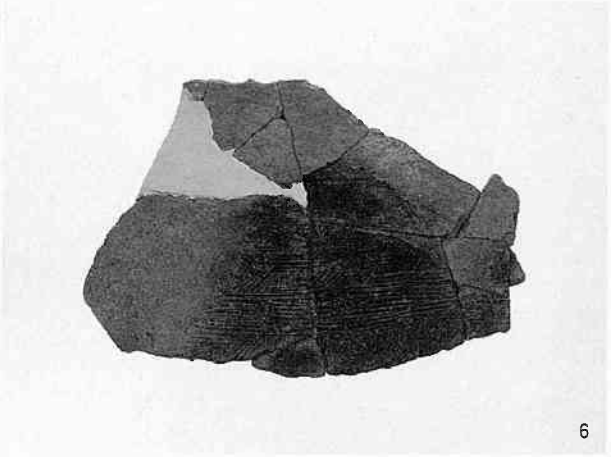
調査地　西端
平坦面（整地層）
断面②（北東から）



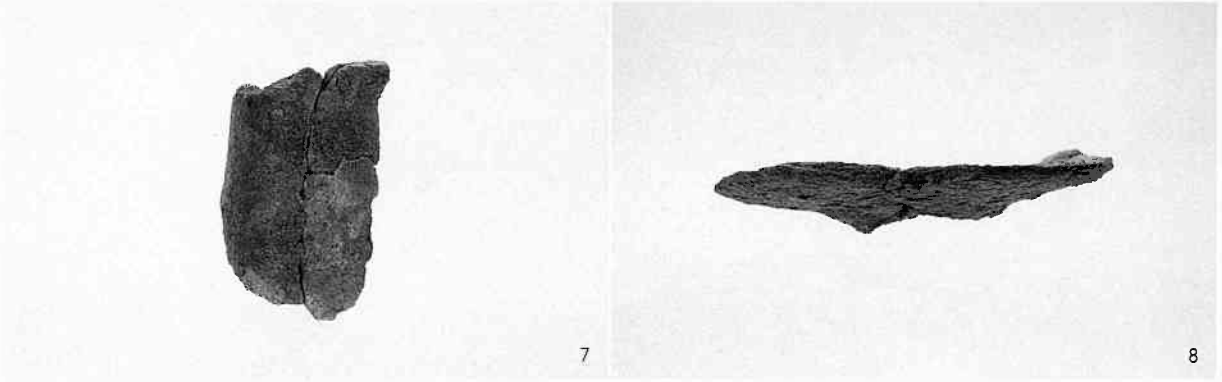
5号墳　第1主体部 出土遺物



5号墳　第2主体部 出土遺物

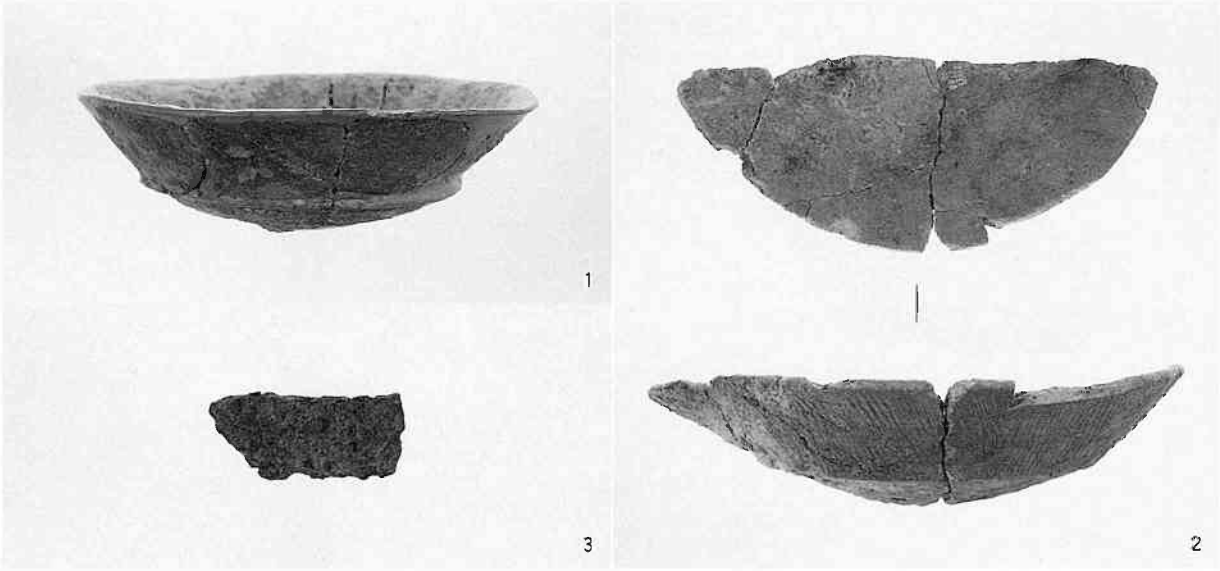


5号墳　第3主体部 出土遺物

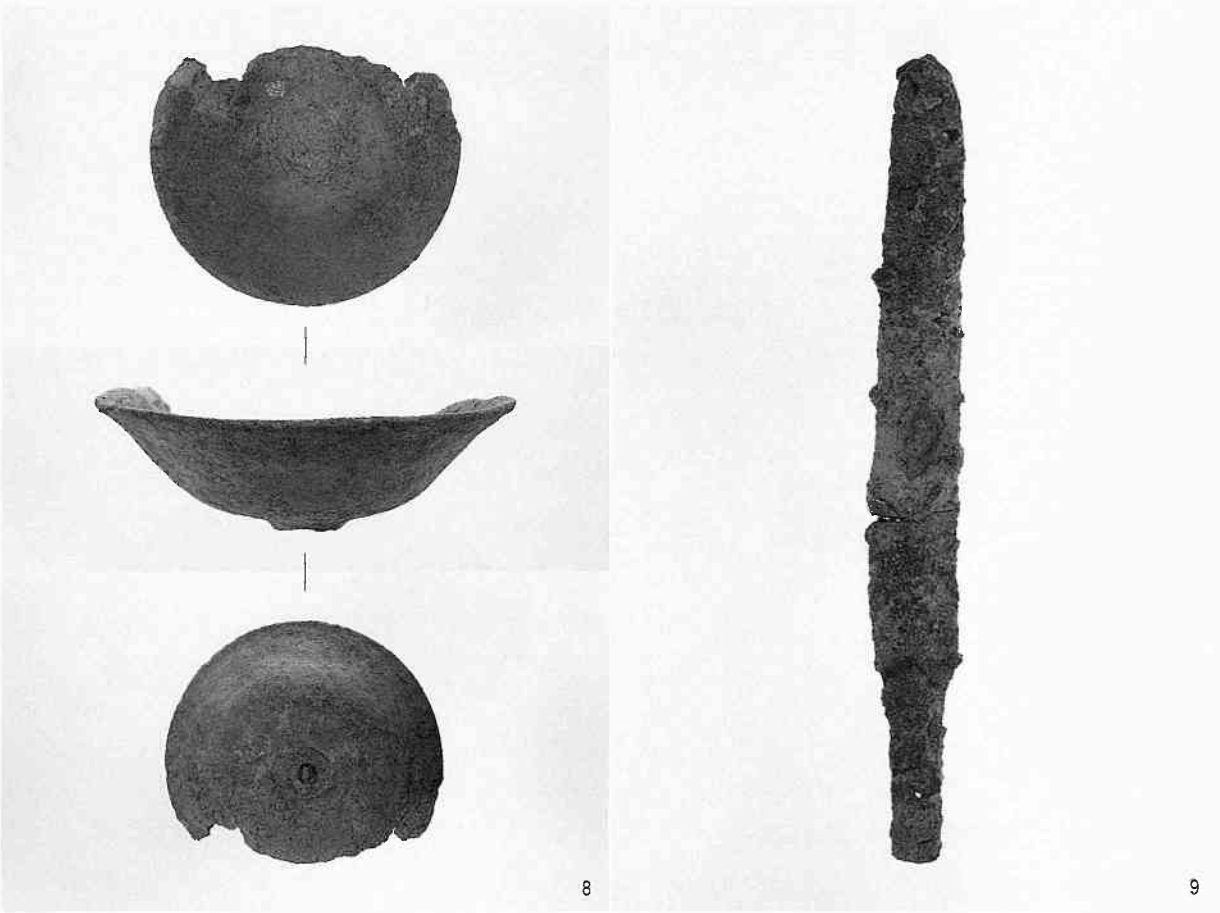


5号墳　出土遺物

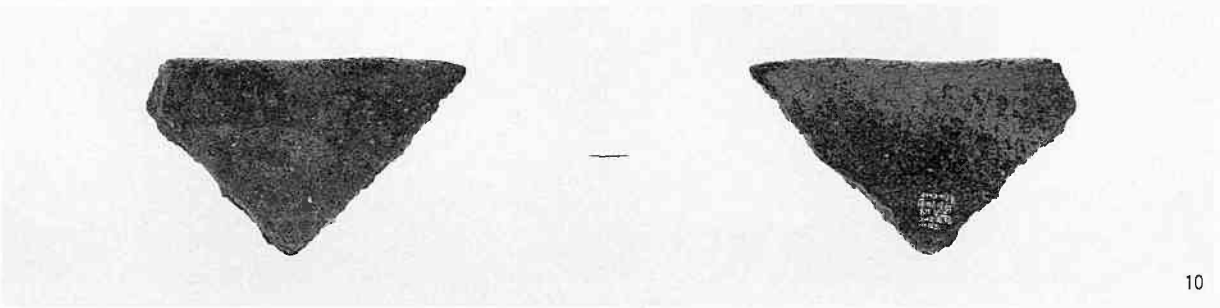
図版32



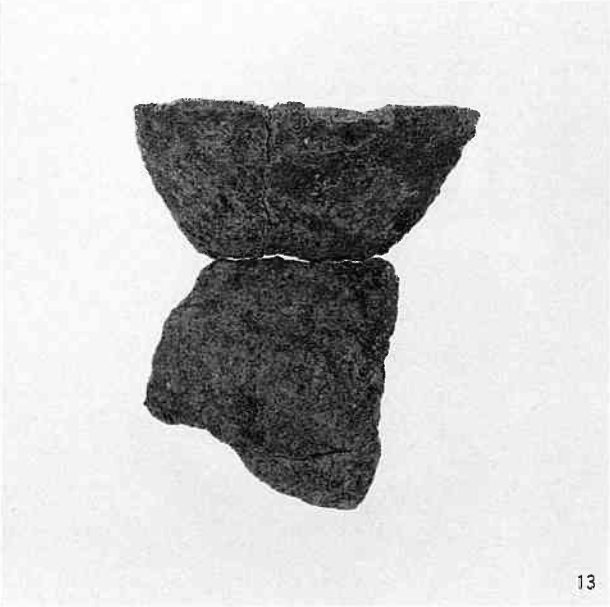
6号墳　第1主体部 出土遺物

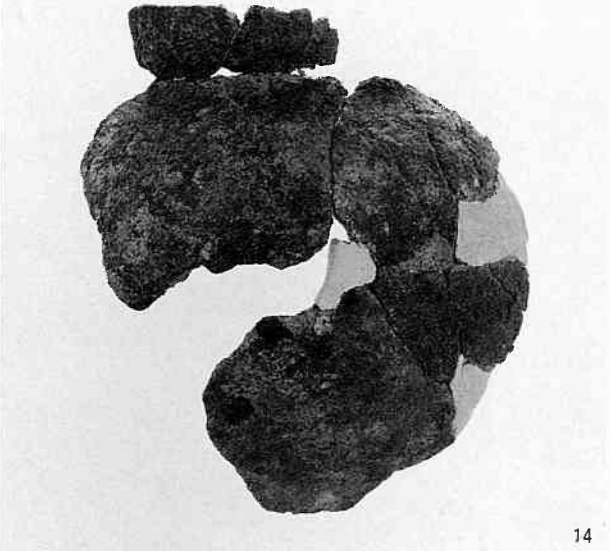


6号墳　第2主体部 出土遺物

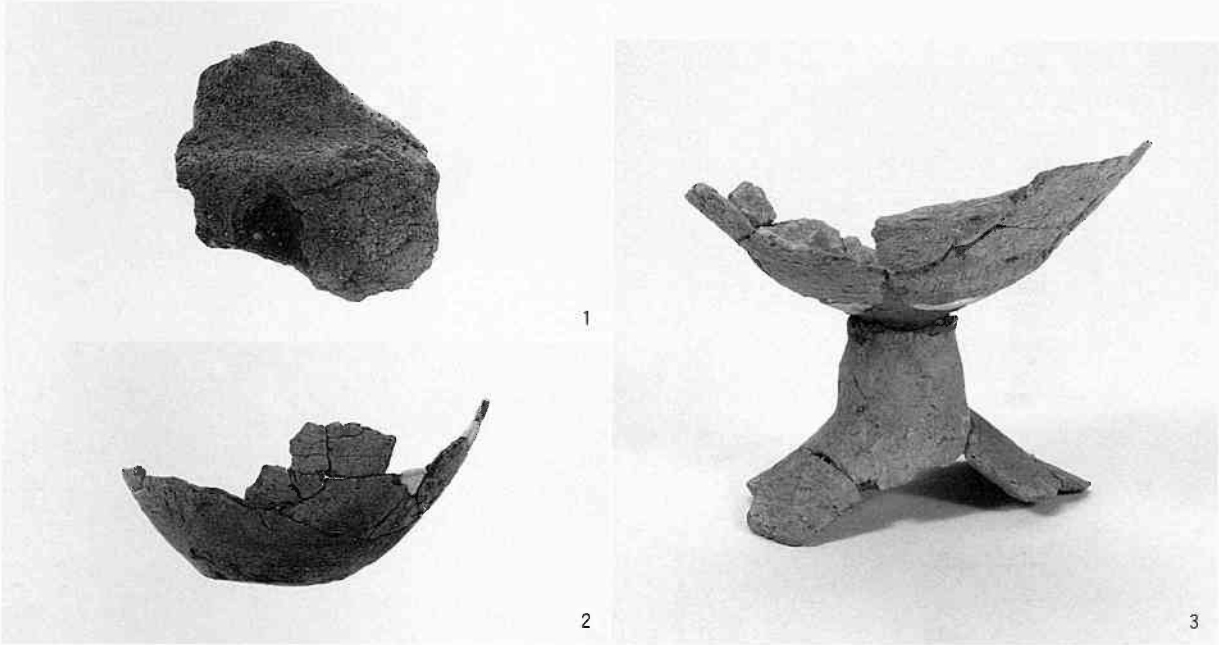


6号墳　周溝内 出土遺物（1）

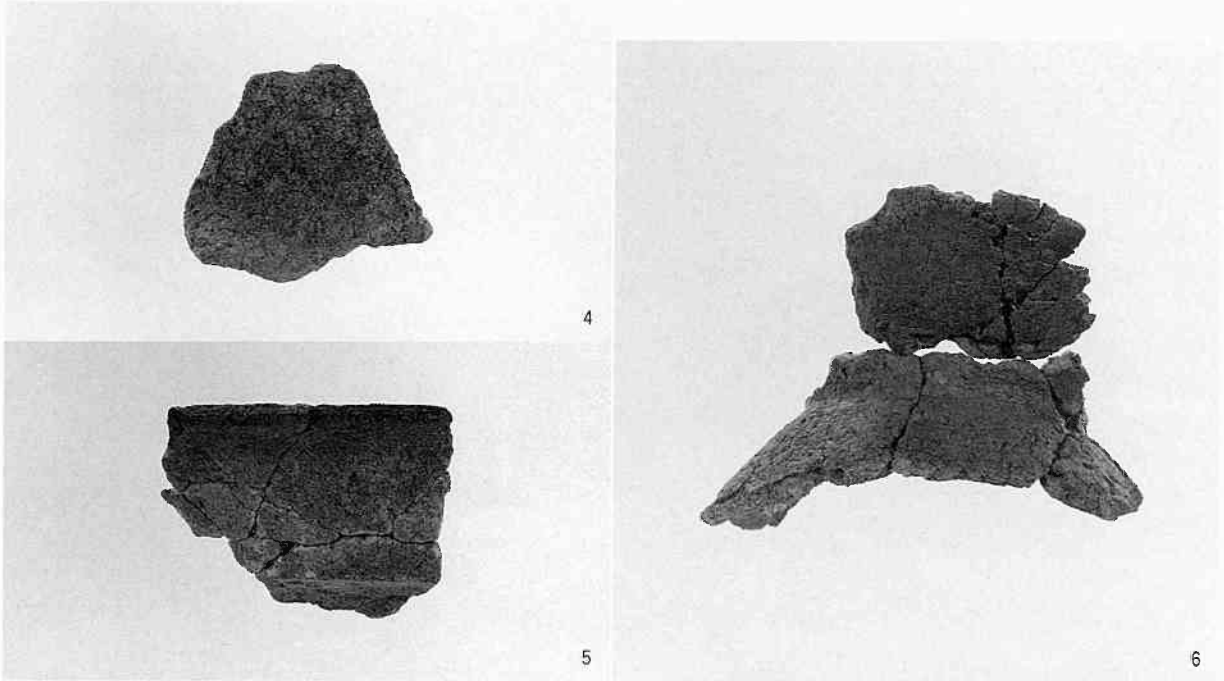




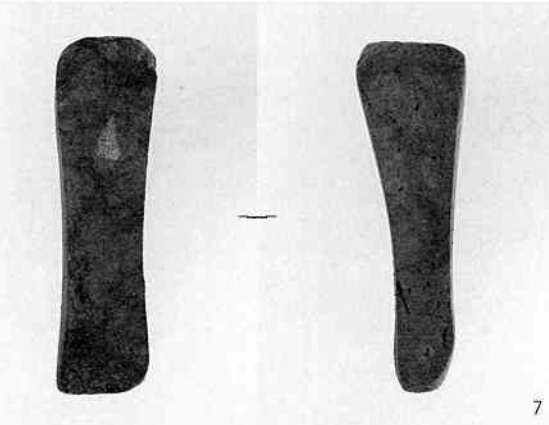
6号墳　周溝内 出土遺物（2）



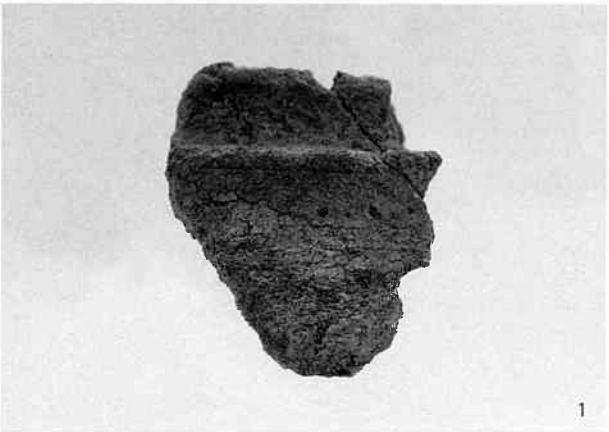
7号墳　第2主体部内 出土遺物



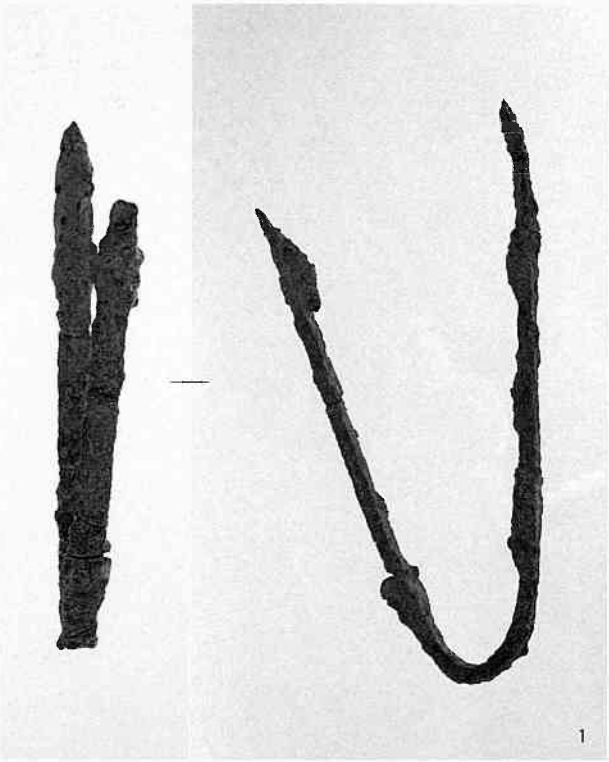
7号墳　周溝内 出土遺物



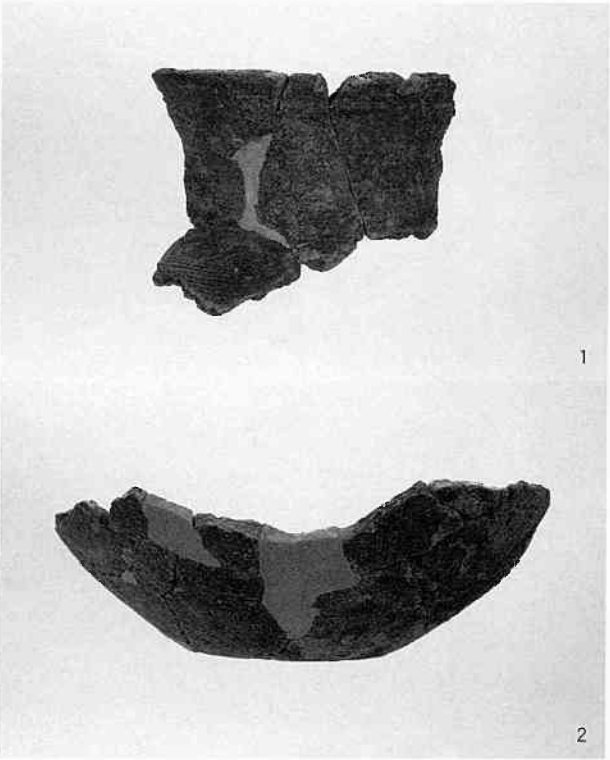
7号墳 出土遺物



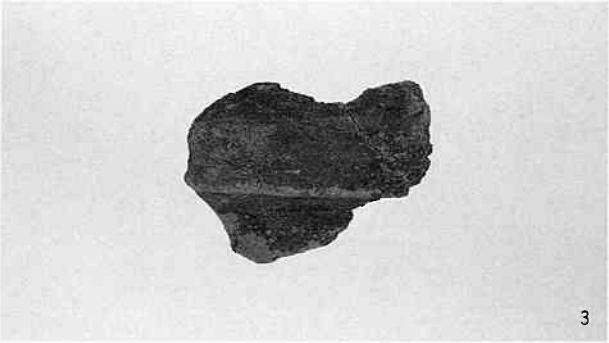
8号墳　周溝内 出土遺物



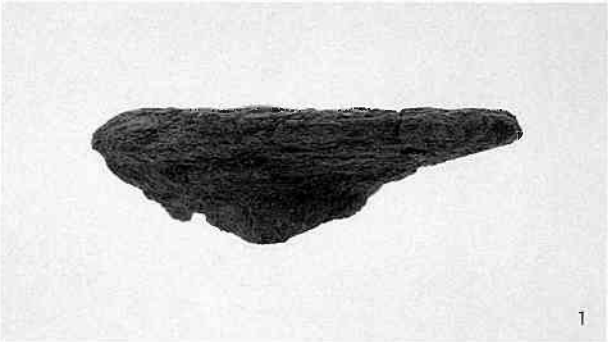
9号墳　主体部 出土遺物



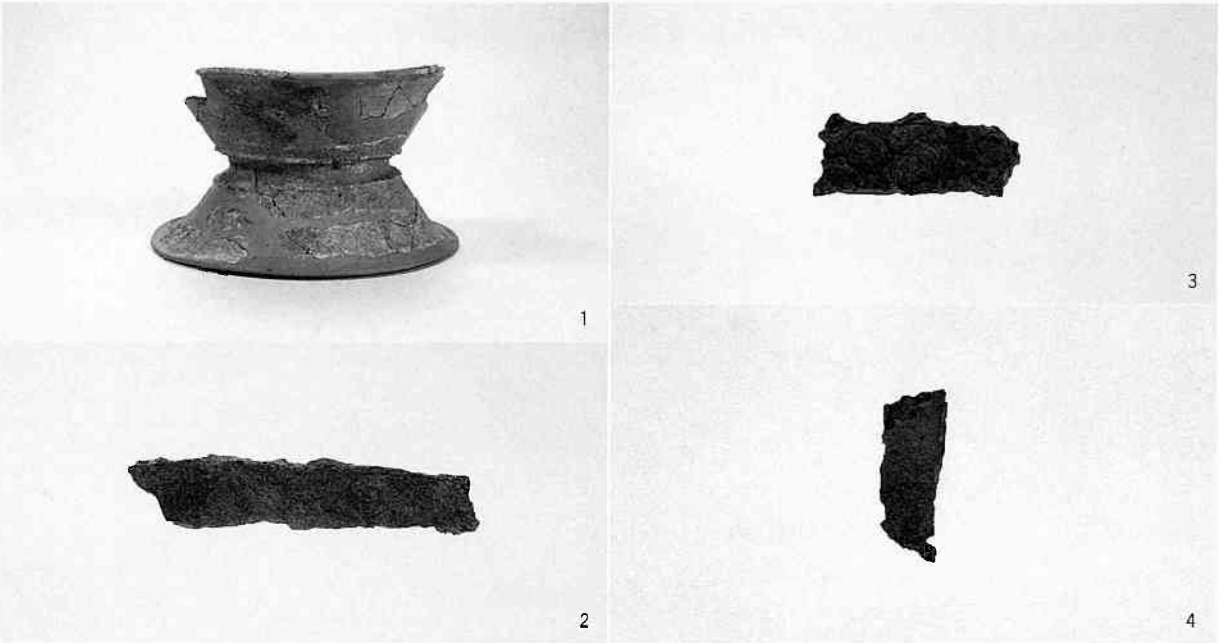
9号墳　周溝内 出土遺物



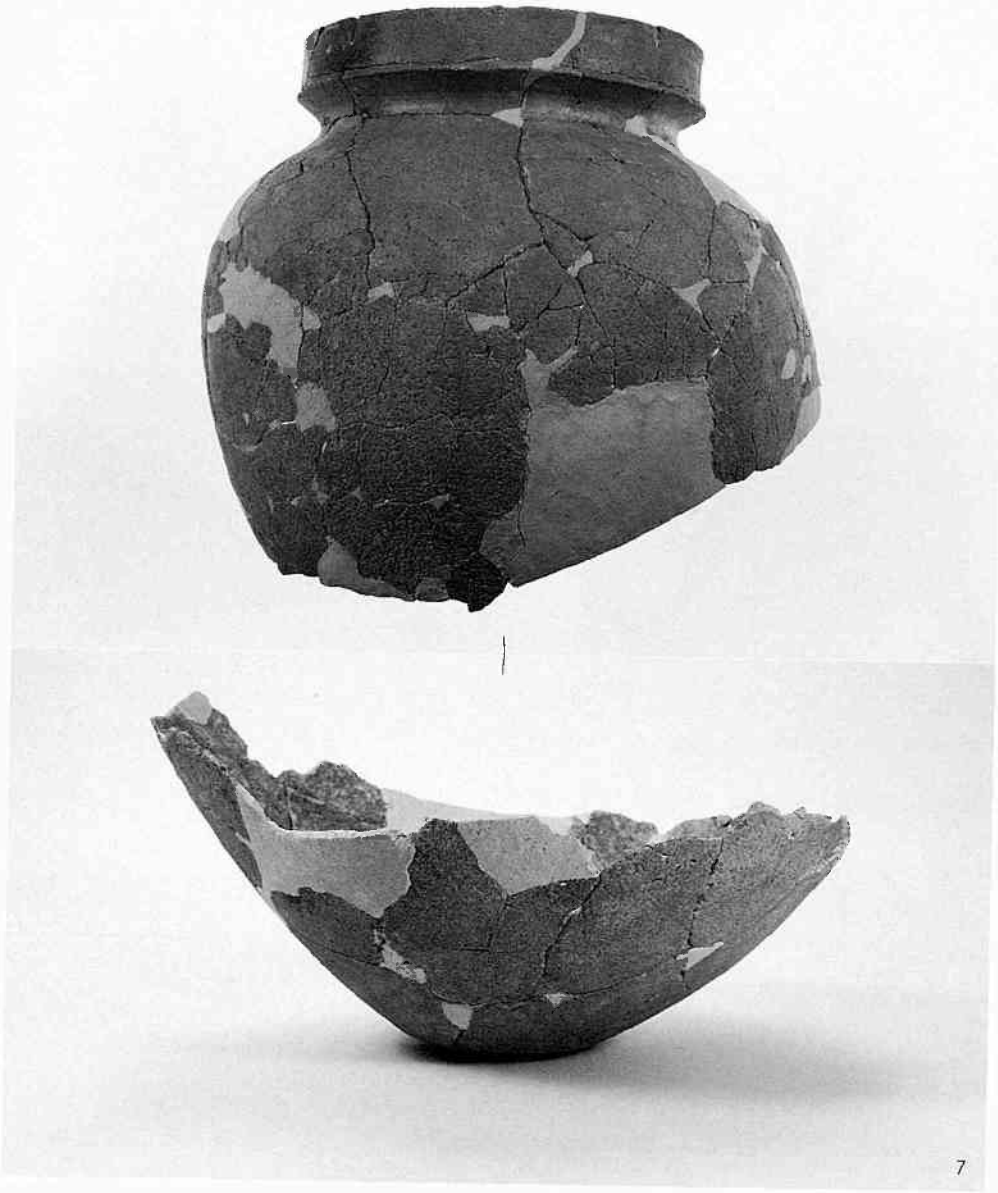
9号墳　墳裾 出土遺物



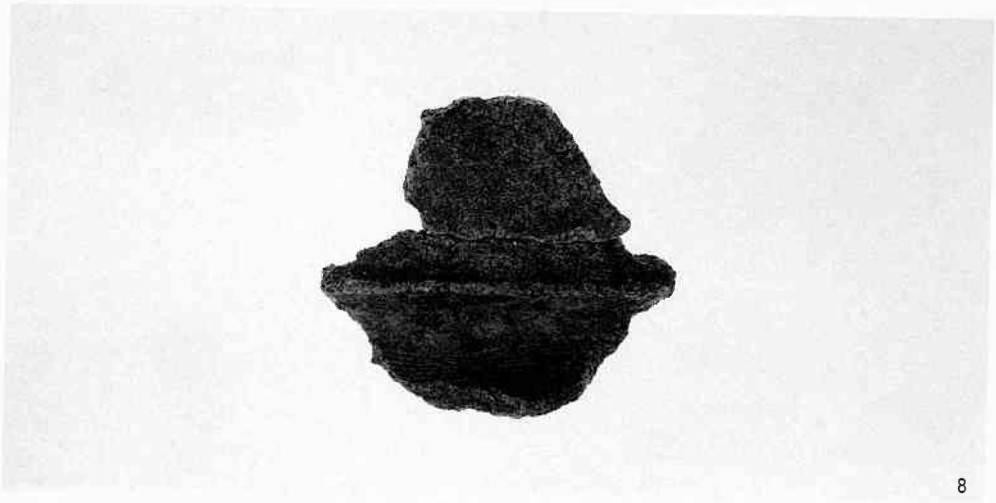
10号墳　周溝内 出土遺物



11号墳　第1主体部 出土遺物



11号墳　第３主体部 出土遺物



11号墳　墳裾 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	しのだこふんぐん
書名	篠田古墳群
副書名	中国横断自動車道 姫路鳥取線整備促進関連事業に係る篠田５～11号墳の発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	藤本 隆之
編集機関	財団法人 鳥取市文化財団
所在地	〒680-0015 鳥取県鳥取市上町88 TEL (0857)23-2410
発行年月日	西暦2004年 3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
しのだこふんぐん 篠田古墳群 (篠田５～11号墳)	とっとりし 鳥取市 しのだ 篠田	31 201		35° 27′ 30″	134° 11′ 44″	20020212 ～ 20020830	2,544㎡	(中国横断自動車道) 姫路鳥取線整備促進関連事業に伴う調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
篠田古墳群	古墳 他	古墳時代 前期	古墳 7基 (方墳 4基) (円墳 3基) (埋葬施設 11基) (他)土坑 1基 道路状遺構(整地層)	土師器 銅鏡(飛禽鏡) 鉄製品 (鉄剣、刀子、鉋、不明鉄製品) 玉類 (管玉、ガラス小玉) 砥石	６号墳より銅鏡(飛禽鏡)が出土

篠田古墳群

—中国横断自動車道 姫路鳥取線整備促進関連事業に係る
篠田5～11号墳の発掘調査報告書—

平成16年3月31日　印刷・発行

編集・発行　財団法人　鳥取市文化財団
印刷所　勝美印刷株式会社